



東方三界黃龍伝

『西抗編』

(前編)

小龍

目次

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	序章	タイムリミット	5
ハイパー・モード	乱調	之信と紫凜	碧霞元君	ヒツキー・シヤロン	スレ違い	再訪	マルちゃん	蘇生の代償	新たな呪縛	天使と悪魔	告白			
206	191	174	158	137	123	108	92	79	67	47	22			
25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	冥府案内の仕方	223
against west	狂乱の宴	蟠桃会開催	前夜祭名物	冥府の攻防	雀士	木佐と九雷	昔日の赤帝君	紫凜の悪戯	四神府の内幕	陽輝と小龍	死神と鴉			
439	413	396	378	354	342	322	308	292	274	258	241			

主な登場人物

沙龍シヤロン（甲斐馨かおる）……主人公。黄龍の保持者。今回は色々と複雑なお年頃。

木佐小次郎（真武君しんぶくん）……四方将神の一人。沙龍の親友。色々と達観しています。

九雷せきでいくん……天界軍元帥。沙龍の恋人。相変わらず色々と策謀を巡らしている模様。

赤帝君しりん……四方将神の一人。真面目ゆえに色々と悩みすぎています。

紫凜へきかげんくん……赤帝君の秘書官。色々な秘密がやつと明らかに。

碧霞元君……天空山（泰山）の管理者。色々なことはどうでもいい系。

序章 タイムリミット

天地開闢かいびやく——。

世界の始まりを意味する言葉である。

『天地創造』と言い換えてもいいが、古くから東方においては『開闢』という言葉が使われてきた。『開』も『闢』も、『ひらく』という意味である。

原初、天も地も一つだった。その状態を『渾沌こんとん』という。

それを自分たちの先祖である『始祖』が分離して、天と地を分け、人の住める世界にした——というものである。

その始祖の一人を盤古ばんこという。

盤古が渾沌から生まれたのか、それとも、盤古が渾沌と闘って天地を開闢したのかは分からない。いずれにせよ、盤古は英雄であり、畏敬の対象となる存在である。

東方天界の神々は、以来、この盤古の血を以って、自分たちの世界を護ってきた

たと言っている。

では、西方はどうであろう。

東方の神々が耶蘇やそと呼ぶ派閥が治めている西方エリアのことである。

東方天界に匹敵する領土を持っているその一大帝国では、世界の始まりは『天地創造』という言葉で説明される。つまり、天も地も自分たちのたった一人の神が創った、と彼等は考えているのだ。

既に、ここに違いがある。

たった一人の神と、その使いである天使たち。それが『西方神界』の全てであり、四方将神と同じような存在として、四大天使と呼ばれる特別な天使が居る。

しかし、この二つの東西世界は隔絶されており、ごく限られた一部の者しか互いの実態を知らない。知りえないようになってきているのだ。

それには理由がある。

『東方天界』と『西方神界』。この二つの巨大帝国は、他の追隨を許さぬ圧倒的な力を持っており、他の異民族神魔たちは狭い領土に影を潜めているのが現状である。

神魔世界においては、人界における宗主国と属国のような関係はほとんどない。それは、先の東方天界における、極東エリアとの徹底抗戦を見ても分かる。彼等は各個に独立した世界を持っており、自分たちの領土が侵食されるということとは、即ち、その存在を否定されることになる。そうなれば、神魔は存続すらできない。妥協はできないのだ。

何故か――。

例えば、人間なら、環境に応じて生きていくことはできる。

戦争によって支配者が変わるということは、生活が変わることを意味する。時には、言葉や衣服、習慣や思想まで強制的に変えられることもあるが、それでも人間は生きていくことができる。屈辱や復讐心、または、諦めや達観を胸にして。しかし、五行の力で成り立っている東方天界が、仮に、他の異民族神魔に侵されることがあれば、五行は無力化し、別のものにとって変わられる。

天地開闢の時からずっと護ってきた独自の世界の有り様と仕組みが壊されてしまえば、彼等はどうも存続することはできないのである。

だから、神魔同士の闘いは文字通りの生存競争であり、それ故に、滅多なこと

では行き来ができないように、お互い暗黙のルールが作られる。

不幸にして境界を接する種族同士が争うことはあるが、その趨勢はここ数世紀で落ち着いてきていた。

「あー、きもちわりー……」

ブーツに入り込む砂が、先ほどから彼のイライラの原因になっていた。

どうせまたすぐに砂まみれになるのに、彼はそのイライラが限界になる度にブーツを脱いで、逆さまに振っている。

やや、潔癖症なのかもしれない。

「なんで完全防水が売りのブーツに砂が入るんだよ。帰ったら、あのアウトドアグッズ専門のメーカーに火つけてやる」

暗く濼んだ空の下、さつきからこんな文句ばかり言っている。

前を歩くネビロスは、一分ごとに文句を言うこの主人に振り向くことはないが、彼がブーツを履き直すまでは一応、立ち止まって待った。

「まったく、誰だよ。『今なら、あの白い虎野郎が居ないので、美女とランバダ踊りながらでも楽に通り返けられます』なんて言いやがったアフォはよ」

ランバダ云々というのは彼の作り話なのだが、お堅い役人の代名詞のようなネビロスにこの手の冗談は全く通じない。

それを分かっているながら言う方も悪いのだが、一昼夜、この西域の荒れた砂漠を徒歩で進んできたので、彼の苛立ちもそろそろ限界に近い。

肉体的な疲労もあるが、それはあまり関係ないだろう。これからまだ地球を一周できるくらいの余力はある。ただ、この男はこういう野外活動が大嫌いなだけである。

「どうしていつも都合のいいところだけ省略して、さらに余計な妄想まで入れて記憶するんですか。使者殿は『現在、白帝白虎聖君^{はくていびやっこせいくん}は任地を留守にしているの

で、西域の砂漠ならなんとか通り抜けられるかもしれませんが』とあくまでも可能性を仄めかしただけです」

ネビロスは、自分も黒縁眼鏡の中の砂を掃いながら、主君を窘めた。

その口調は、どこまでも事務的である。

「知るかよ。大体、あのジーサンも、いい加減舐めてやがんな。俺様に来て欲しかったら、チャイニーズ・ビューティー百人のお迎え寄越して、ワインセラ―付きの自家用飛行機くらい玄関先まで回しやがれってんだ」

そういう派手な東行をしたら、問答無用で撃墜され、射殺されても文句は言えないし、そもそも『鉄壁カーテン』に阻まれて、境界付近で立ち往生するだけなのは、彼にも充分に分かっているのだが、言わずにはいられなかった。

東西の神魔世界の行き来は、この数千年間、表向きはただの一例も確認されていない。

両者の間には、太古の時代から不可侵条約が結ばれており、それぞれの外相が数百年に一度、その条約の効力を確認するだけになっていた。

といっても、それは中央の認識であって、実際に東西世界の境界付近に居る者たちにとっては有名無実の条約であるし、禁を破る者が居るのは世の常である。

「それから、東王夫殿とうおうふは、積極的に来いとは仰ってませんよ。むしろ、今、我々に来られても、先方が困るだけでしよう」

「だから、こうしてお忍びで来てやってんだろーが」

西方の神魔世界と一言で言っても、多種多様な種族が居る。

ネビロスや彼のような『魔』に属する者は、基本的にはそういった表舞台の条約とは無関係の立場に居た。

東方天界のように、俗に言う天国と地獄が一緒くたになっている世界とは違い、西方の場合は、『神』と『魔』が完全に分離している。当然、表の顔は『神』が担っていて、『魔』はその影響力を徹底的に無視しているのだ。

「しかしよー、いくら俺が船旅が嫌いだからって、なにも苦労して砂漠横断なんかしなくってもよかったんだぜ？ ラグジュアリー級の豪華客船なら西海を渡るルートでも我慢してやったのに」

「^{げいか}猥下……、貴方も懲りない人ですね。昔、あの近辺にちよっかい出して、西の龍王に痛い思いをさせられたのをお忘れなんですか？」

ネビロスが、この主君を『猥下』と呼ぶのは昔の名残である。

元々は『西方神界』で要職を務めていたということが窺える。

「あ？ いつの話だよ。まだ俺が洩垂れ小僧だった頃のことだろ？」

今では傍若無人そのもので、豪胆を絵に描いたような『西方魔界』の盟主であ

る彼にも、そういう若い時代があつたのである。

金髪碧眼という、凡そ世間の予想を裏切った容貌をしているのは、彼曰く「墮天したら黒くなるなんてデマ」であり、「それくらいでいきなり遺伝子が変わってたまるか」ということらしい。

よく見れば端整な顔立ちをしているのだが、肩のあたりまで好き放題に伸びた髪の毛のせいで、全体のイメージはかなり野生的である。

時折その金髪をぼりぼりと掻く様は、場末の遊治郎にも見えた。

白いマントをすっぽりかぶっているのだが、にも関わらず、この伸びきった髪の毛のせいで清潔な印象が一切ない。

しかし、見る人が見れば明らかに、この男の周囲だけ空気が違うのが分かる。
卓犖不羈たくらくふきといった所である。

それらを隠すための言動であり、ぼさぼさの髪であり、マントなのかもしれない。
い。

「大体、なんで俺が、こんな僻地くんだりまで足を運ばなきやいけねんだよ」
ネビロスに何度窘められようが、文句を言うのをやめる気はないらしい。

誰に諫められようが、相手の言い分がどんなに正しかろうが、自分の言いたいことを言い、やりたいことをやるのがこの男の美学なのである。

とりあえず彼の機嫌が直るまでは、ネビロスも辛抱強く付き合うしかないのだ。「貴方が、『その黄金龍とやらを一度拝んでみてえな。おい、ネビロス、なんとかして算段取り付けな』——と仰ったからです」

「一字一句再現しやがって」

彼の文句が終わらないのも、半分はこのネビロスの態度に原因があるだろう。愛想もなければ、冗談も通じない、どこまでも機械のような部下なのである。

ネビロスは『少将』という肩書きを持っていた。『西方魔界』における組織の中での階級である。

今は変装して区役所の役人のようなスーツを着ているが、普段は『魔界一の剣士』として『西方神界』の天使軍に畏れられている。

恐ろしいほどの正確さを誇る彼の剣は、いつも一ミリも狂うことなく目標物を寸断できるので、同僚たちはネビロスのことを「食パンスライサー」等と言って半分からかっている。

「折角、口うるさいカミさんが里帰りしてるつてのによー。俺はこんな鄙びた楽園で敵情視察か？ おい。この前口説き落とされたばっかのカノジョとバカンスしようと思ってたのに、逃げられたら、お前のせいだからな」

「猥下……。貴方も、いい加減、往生際が悪いですね。私は貴方の愚痴を聞くために、苦勞して露払いをしたわけではありませんが」

「なに言ってるんだい。我俣し放題、文句タラタラのヤンチャな暴君を諫めて、機嫌取るのがお前の仕事だろうが」

「……」

前方の砂漠の中に、陽炎が立ち昇るような一角が見えてきたので、ネビロスは主君の愚痴に付き合うのはやめた。

「どうやら、東王夫殿は約束通りのことはしてくれましたようですね」

「幾ら払ったと思ってるんだ。やってくれなきゃ困るぜ」

国家予算の半分を注ぎ込んだ、一大事業である。

彼等には、もうあまり時間は残されていない。

ネビロスが背後を振り返り無言で促すと、彼は仕方なくマントのフードを目深

にかぶって仮面もつけた。

これで、全身が白になる。

「しかしよお、これじゃ、俺の男前が半減じゃねえか。いや、半減どころじゃねえ。デパートの屋上で風船配ってるマスコットじゃねえんだぞ」

「猥下の風貌は目立ち過ぎますので」

「そりゃ、ご尤もなんだがよ。ホントに、この冗談みたいなマントであの『鉄壁カーテン』が抜けられるのか？」

「実験はしました。行きますよ」

ネビロスとその主君が吸い込まれるように入っていった空間は、五行の気脈を利用した、いわば『抜け道』である。

人界の科学を無視して言えば、空間と空間を無理やり繋げているのだが、やはりこの手の五行術は荒技であり、邪道と言わざるを得ない。

術者の負担も大きく、こんな荒技を行えば、五行の気脈を管理する四方将神た

ちに察知される危険もある。

しかし、今、この西域の砂漠に居るべき白帝君は、人界へと出掛けています。その留守をついての、お忍び訪問なのだ。

もし、彼等が『西方神界』の正式な使者であるなら、こんなことをせずとも、普通に訪問すればよい。尤も、だとしても『鉄壁カーテン』と彼等が呼ぶ東方天界ご自慢の結界は、容易には解除されない。本当に正式の使者なのか、その判断を中央に仰ぐ間、確実に数日は関門所で待たされるだろう。

東方天界の西端を護る見えない壁は、東端を護る『異風シュンファン』と同じ効果を持つ。

つまり、天仙界の住民にとってはどうということのない空気に等しいものだが、異民族神魔にとっては越えることのできない『国境』なのだ。

今、ネビロスたちが使ったような抜け道や特殊アイテムがない限り、空気の壁の前に立ち往生するだけである。

さて、この二人に協力した者として、名前が挙がった東王夫のことを少し説明しておこう。

九雷くわらいの前任の元帥であり、現在は第一線から退いている、老齡の人物である。東方天界においては、西王母の二番目の夫という認知度の方が高い。

敏慧の人と評されており、元は軍人ではなかったのだが、時の天帝にその人柄と能力を買われて元帥位に就き、智将として期待された。東王夫はそれに応えた。三百六十度から侵攻してくる異民族たちをことごとく打ち破った東王夫の働きは至極であつたと言つていいだろう。

しかし、東王夫の天界軍での働きは、最後の仕事となつた『雅山戦役』で唯一にして大きな汚点を残した。

ヒンドウーの神々と闘つた、苛烈を極めた領土争いである。

この戦争に敗れた東王夫は責任を取つて辞任し、以降は晴耕雨読の隠居生活をする事になったのだが、機密を知る要職経験者に絶えず目を光らせておくのは現役の為政者の仕事である。

東王夫にも『起家チーチャ』という符牒が付けられ、火雲宮かうんきゆうの監視対象となつたのだ

が、特に彼自身に不穩な動きはなく、この好々爺のことは次第に忘れ去られていった。

しかし、西海龍王敖閏ごうじゆんは忘れなかつた。

この数千年間、敖閏ただ一人だけが、彼の行動を見張っていたのだ。

東王夫が元帥位に居た頃、西方軍大将だった敖閏は、当時からこの上官と相性が悪かつた。

が、むしろ、公然と嫌っていたのは東王夫の方である。無断欠席は当たり前、軍服は格好悪いから着たくないだの、軍医は女医にしるだの、我俣を通り越した敖閏の勤務態度には、東王夫でなくとも腹に据えかねるものがあるだろう。

四方軍の歩調を乱し、挙句の果てに『男所帯は嫌』と言ってさっさと引退した敖閏の破天荒ぶりは、現在の陽輝ようきの比ではない。

だから、実直な東王夫が、いい加減で我俣な龍王家の若様大将に怒った——と世間は見るのだが、それには敖閏の計算が半分ある。

「僕の素行が悪いから、罷免されちゃった」

というのが敖閏の周囲への言葉で、その言葉には「自業自得なので別に恨んでませんよ。火雲宮での職を失ったところで、僕は食いっぱぐれないし」という東王夫に対する諷意もあつた。

その頃から、敖閏の『遊び人』というイメージは定着していくわけだが、その裏で、敖閏はずっとこの元上官の言動を注視し続けていたのだ。

『あのジーサンは、いつか敵になる』

そう言った緑麗りょくれいの言葉もある。

東王夫が具体的に何をする気なのか、というのは緑麗に言わせれば『黄龍を排除したいんだろう』という簡単な言葉で説明された。

敖閏に言わせればそれは『原理主義』となる。

つまり、天地開闢の頃より存在する五行の力だけが善であり、異端のものは全て排除すべし、とする考えである。

しかし、東王夫は隙を見せることはない。ともすれば危険思想と取られるような軽はずみな言動は公の場では決してしなかった。

だから、敖閏は我慢比べのように時を待ち、ひたすら元上官が尻尾を出すのを待ったのである。

引退した東王夫を慕う者は多くとも、今更、火雲宮の決定を覆し、神獣と神獣の保持者を排除する力はない。

実際、北海龍王を使喚して、沙龍シャロンを神獣ごと葬ろうとした計画は、失敗に終わった。

敖吉ゴウキツの先走りもあったし、敖坤の邪魔も入ったのが失敗の原因だが、本来、あのクーデターは、東王夫にしてみれば予てから利害関係が一致している『西方魔界』と歩調を合わせるべきだったのである。

利害の一致というのは、敖閏の推測であるが、今や唯一の神獣である黄龍を排除したい東王夫と、その黄龍に興味を示しているネビロスの主君の様子を見れば、既に推測の域を出ているだろう。

帝都の城壁が高性能の双眼鏡でかろうじて確認できる崖の上に、ネビロスの姿がある。

しかし、彼が今見ているのは城壁ではなく、崖下の草むらだった。彼等の他にも、侵入者が居るようだ。

「おいおい、鉢合わせか？ ガヴィにしちや、仕事が早えじゃねえか」

双眼鏡を覗かずとも、白いマントの主君はその侵入者の所属部隊を推測していた。

「ご本人はいらっしゃらないみたいですが、三名ほど、天使軍のエージェントらしき者が居ます。……行かせますか？」

「奴等の目的は分かってる。ただの偵察だろ。あの少人数だ」

「しかし、武装の様子からすると、ことによっては、という感じですが」

「舐めてやがんな。三流のレポーターどもが。まあ、いい。様子を見ようぜ」

1 告白

この際、寝惚けて最愛の恋人を叩いてしまったことは、深く深く反省すれば済む話なのだ。

だから、沙龍はしばらく、逃げ込んだシャワールームで一人、頭を抱えている。
(うわあ……。もう、どないしよ……)

九雷は「気にするな。どちらかというと、昨夜、背中につけられた爪痕の方が痛い」と怪しい笑みを浮かべて言っていたが、そこで一緒に笑えるほど、沙龍は無責任ではないし、夢の中で九雷が言ってしまった言葉は「夢だから忘れよう」で済む話ではないのだ。

今朝の夢は、やけにリアルで、やけにコミカルだった。

新宿のビル街を、何故かトレンチコートを着た恋人が歩いており、沙龍は慌てながらそれを追いかけている。

『沙龍、もう、終りにしよう』

『え……？』

唐突に始まる別れ話。

何故か枯葉が舞っているが、確か、今は秋でも冬でもない。

昨日は「もうすぐ蟠桃会だね」と話していた記憶がある。

『所詮、同じ世界では生きられぬ身だ。お互い、辛い思いをするのなら、いっそ——』

『ちよ、ちよっと。なに言ってるの？ それを言ってしまったら……』

『お前は、お前の居るべき場所へ帰った方がいい——』

それを聞いた途端、熱風のような怒りが沸いた。

目覚めた時は、その怒りでもって目の前の九雷を平手打ちしてしまったのだが、グーで殴らなかつたことは自分でも褒めてやりたいと思つたものだ。

しかし、その直後には、呆然とわけの分からぬ顔をしている恋人に気付いて青くなり、何度も謝って、最後はシャワールームに逃げ込んだのである。

（あんな夢を見るってことは、私、やっぱ色々気にしてんのかな……）

気にしていないはずはないのだ。

人としての百年に満たない人生を、ほぼ不老不死である恋人の傍らで終えることに沙龍自身は迷いはない。

しかし、残された九雷はどうするのだろうか、と考えた時、沙龍はいつも心が騒ぐ。

だから、玉帝ぎょくていの遺したレポートに一条の希望が記されていたのを発見した時は、歓喜した。

『保持者が人の身であった場合、長寿を保つ方法は一つある。それを保持者が望めばの話だが』

しかし、その寿命をかなり伸ばせる反則技について、玉帝は具体例を書いていない。

書いてあったのは、後続の以下の一文だけである。

『神獣の力を以ってすればよい』

沙龍はレポートを復元してくれた太乙たいいつや、協力者である九玄きゅうげんにその意味を問いたが、二人は答えられなかった。

このレポート自体が極秘のものであるので、他の人に聞いて回るわけにも行かず、沙龍はもう一人、自分の主治医である天真てんまにだけは相談してみたが、天界一の名医にも、抽象的すぎるその短い一文から、なにが分かるはずがない。

結局、ぬか喜びのようになってしまった。

だから、沙龍はもうこのレポートのことは忘れた振りをしていたのだが、今朝のような夢を見るということはやはり絶えず心のどこかで気にしているのだろう。（もう、いつそ、道連れにしてしまおうか——）

冗談ではなく、そう思う時もある。自分が死ぬ時は、九雷も連れて行けばいい。一緒に死ねるのなら、なにも憂うことはない。

そんな風に考える沙龍は、当然、九雷にも同じことを望んでいる。

（一人では死なせない。あの人死ぬ時は、私も一緒に連れて行ってもらう）
それが出来ない男なら、最初から要らないのである。

『甲斐馨』とは、そういう人間だった。

そして、きっかり五分、洗面台に顔を突っ伏していた沙龍は、思い出したようにシャワーの蛇口を捻った。

白い湯気に徐々に満たされながら、寝巻きを解く。

ふと、目の前の鏡に写った自分の姿に、昨夜の名残を見つけて「あーあ」と思った。これでは、襟の開いた服は今日は着れない。

そんなに激しかっただろうか？　そう言えば、さつき九雷も背中中の傷がどうのと言っていた。そこまで理性が飛んだ覚えはないのに。

体を傾けながら、鏡をもう一度見た。

「……え？」

既に湯気で曇ってしまった鏡では、よく見えない。

だから、沙龍は一瞬、見間違いだろう、と思ったのだが、

「嘘——!？」

慌ててバスタオルを引っ掴んで、シャワールームを出て行った。

コーヒーを淹れていた九雷は「何事だ？」という顔をして、ほぼ全裸で箆笥を

引っ掻き回している沙龍を見ていたが、沙龍がそこから手鏡を見つけ出して、鏡台の前に、後ろを向いて立った時は、なにをしたいのかは分かった。

しかし、何故、自分の背中を見たいのかは分からない。

「沙龍、どうしたんだ」

「……」

聞いても答えず、沙龍は驚愕に近い顔で何度も確認するように手鏡の中を見ている。

「沙龍？」

近付いて肩に手をかけると、ようやく自分以外の存在に気付いたとでも言うように九雷を見る。

「俺は、つけてないぞ？ お前にはつけられたが」

と、二人にしか分からない軽口を言ってみたが、沙龍が気にしているのは昨夜の情事ではないのだ。

「どうして——？」

「だから、どうしたんだ」

笑い交じりに聞いていた九雷も、沙龍の深刻な様子に、段々と心配そうな顔つきになる。

早く説明してくれ、という仕草をしたところで、

「背中の傷が……、無い!？」

「だから、俺はつけて……」

「そうじゃなくて！ 背中の傷がない！ どういうこと？ アレが、消えちやつてる……!」

「……?」

「ねえ、おかしいよ。一生消えるような傷じゃないんだから。なのに、なんで?」

九雷は、沙龍の言ってることが分からない。

それは沙龍がまだ子供の頃、十歳になったばかりの頃に負った傷のことだ。

分からなくて当然なのである。

しかし、そうであれば、二人の関係からして、九雷がその傷を見たことがないのはおかしい。

「いつから？　ねえ、いつから、無くなったの？」

「沙龍、落ち着け」

「だ、だって、前はついてたでしょ？」

「いや？」

「嘘!？　大きな刀傷があつたでしょ？」

「刀傷？　沙龍、なにを言ってるんだ？」

「……。ちよつと待てよ？」

沙龍も、九雷の様子に、なにかがおかしい、と感じた。

だから、確認するために聞いたのだが、

「あー、えーと、じゃあ……。ですね、その……。一番最初の時は？」

こんな朝日の燦々と降り注ぐベッドルームで、直接的な言葉はなかなか使えない。

しかし、九雷はすぐに分かったようだ。

「あの時は暗かったから見えなかったし、そもそも全部脱がした記憶はな——」
みなまで言う前に、沙龍は額に手を当てて、やれやれという顔をする。

何故か、九雷はこういうことを、決算報告をするような口ぶりで言うのだ。

「でもね、あの時は『まだ』あったはずなんだよ。最後に確認したのがいつなのか、覚えてもいないけど、少なくとも……」

沙龍は記憶を辿るように、初めて水雲宮すいいうんきゆうに連れてこられた時のことを思い出した。

「そうだ。紗衣さいいなら覚えてるはず。最初に私の着替えを手伝ってくれたのは紗衣だった」

そう言っつて、インターフォンで確認する。

紗衣は聞かれたことにだけ短く答えた。「ええ、確かにありました」——と。そのやり取りを見守っていた九雷は、既に一つの可能性に行き着いていた。

沙龍が水雲宮に来た時にはあった——と沙龍が主張する——その背中せなかの刀傷は、ここ数年で、消えるはずもないのに消えてしまった、ということらしい。

いや、『数年で』ではない。傷が消えたことに沙龍が気付かなかっただけで、本当は『数年前に』消えていたに違いない。

「泰山府君たいざんぷくくんか——」

九雷が独り言のように言ったその名前で、沙龍も気付いた。

「もしかして、私が一度死んだ時？」

「可能性はそれしかない。あの時、泰山府君はお前の体を『蘇生』したんだ。

『蘇生』は全ての外傷を元通りにするという技術でもある」

「ああ、それで過去の傷もついでに消えちゃったってことなのか……。ああ、びっくりしたー」

解答を得られたことで沙龍はすぐにさっぱりとした顔になって、シャワールームに戻っていく。

しかし、九雷は難しい顔をしたまま、しばらくその場に佇んでいた。

やはり、この件については赤帝君を近いうちに問^{せきていくん}い質さなければなるまい。

赤帝君が仮死状態にし、泰山府君が『蘇生』をした沙龍の現在の体は、特に不都合があるわけではないし、傷跡が綺麗になったのならむしろ悪いことではないのだが、自分の知らないことを赤帝君が知っているらしい——しかも沙龍のことで——というのが気に食わないのだ。

シャワーを終えた沙龍は出掛ける支度を始めていた。今日は悠花^{ゆうか}や紗衣の手を

借りず、自分の出来る範囲で着替えをした。

とりあえず、一人でも着れるものを選んだが、この広いウオークイン・クローゼットに積み上げられたり、吊るされている大量の着物は、一人で着れないものの方が圧倒的に多い。

どこのお姫様だ、といつも思うが、これらを買って与えているのは勿論、九雷である。

要らないと言うのに、いつの間にか増えているので、もう沙龍は好きにさせていた。

九雷も、沙龍が服やアクセサリに興味がないことは一応理解しているのだが、半分は遠慮して言ってるのだと勝手に勘違いしているのか、それともこういったものを買って与えるのが彼の楽しみになっているのか、来年あたりにはこのウオークイン・クローゼットももう一つできてそうな勢いである。

長い髪を無造作に結んで、沙龍はベッドルームに戻ると、二本の愛刀を探した。

しかし、その様子を最初から否定的に見ていた九雷が、聖魔剣と大和守秀国を

手にしようとした沙龍に、

「それは、必要ない」

とだけ言った。

確かに、デートに行くのには必要ないかもしれないが、沙龍にとって武器を携行することはハンカチを持って行くのと同じ感覚なのである。

現に、九雷だって、いつもまったくの丸腰ではない。

しかし、沙龍は素直に従った。

全く抵抗がないわけでもないのだが、「必要ない」と言った以上、彼はなにが
あろうとその言葉は守るだろう。

常春の帝都に季節感というものはあまりないが、足元の蒲公英（タンポポ）が
白い綿毛をつけているのを見て、沙龍は春だな、と思った。

今日は何故か九雷が「仕事は行かない。どこかに出掛けよう」と子供のよう
なことを言い出したので、複雑な想いでそれに付き合うことにしたのだ。

こんな我侂を言い出す男が組織の長でいいのだろうか、と沙龍は人界に居た頃の感覚で考えるのだが、最近はだいぶ慣れた。

少し強い風が吹いて、辺り一面に舞う蒲公英の綿毛に気を取られていると、

「沙龍、こつちだ」

数歩先を行く九雷が手を差し伸べる。

その手を取ると、沙龍は胸が詰まった。

相愛の関係になって久しいというのに、こんな風にデートのようなことをしたことがなかったのだ。

水雲宮での暮らしは全くの二人きりというわけではない。許可がなければ最上階に上がってこないとはいえ、従業員が数人居るし、飛龍ひりゅうもたまにうろろしているし、小龍は常にうろろしている。

帝都の城壁も既に見えなくなるほどの野外で、見渡す限りのこの場所には、本当に、自分と九雷しか居ないのだということが沙龍には新鮮だった。

「昔は、この景色だけが世界の全てだと思っていた」

「前に、住んでたの？」

「ああ、もう少し行った所にある」

そういうことか、と沙龍は素早く悟った。

繋いだ手の感触からも、切ないまでに伝わってくるものがある。

暫くは、無言で歩いた。

足元の黄色と白の花をなるべく踏まないようにして、小川を越え、時折、やはり綿毛に視界を邪魔される。

黒焰虎こくえんこも今日は水雲宮で留守番だ。

舗道のある場所までは車を使ったが、そこからはずっと徒歩である。

「……？」

九雷が何故、立ち止まって視線を自分に落とし、微笑んでいるのか、沙龍には分からなかった。

髪に触れてきて、掬うように取って見せた綿毛が、九雷の手から放れて風に乗って行く。しばらくその行く末を見守っていたが、小さな種は宙を舞ってやがて見えなくなった。

この水色の空と足元一面の野生花の景色は、沙龍にとって暖かくて切ない風景

の一つに重なる。

二年前、同じような場所で「自分の生きる世界を選べ」と、この男に言われた。その時足元を埋めていたのは蒲公英ではなかったが、花の種類をあまり知らない沙龍にとってそれは重大事ではない。

九雷は、金盞花の花畑の中でこう言ったはずだ。

『自由に選べ。ただし、もし人界に戻ると言うなら再び監禁する』
選べと言っておきながら、実は、選択の余地など与えていないのだ。

沙龍はこの時笑った。九雷という男の不器用さを。

ただ、彼は本当に監禁しただろう。いや、本当は軟禁くらいで、事実上は『お願いして水雲宮の豪華な部屋に居てもらおう』というレベルであるはずだが。

沙龍はこの時『否』と言うこともできた。

人界への未練が、九雷への思慕よりも勝っていたのなら、『否』と言ったはずなのだ。

しかし、幸いにして、沙龍は九雷と共にあることを望んだ。

だから、言いなりになったわけではなく、『これが私の選択』という想いが沙

龍にはある。

(なに……?)

九雷がいつまでも視線を放さないので、沙龍は困惑した。

微かに憂いを含んだ九雷の眼差しは、なにかを問うものではない。

ただ、愛する人が目の前に居て、この平凡で美しい景色の中を自由に動き、笑い、楽しんでいるといふ幸福を噛みしめているだけのものだ。

「あのさ、もし……」

しばらく歩いたのち、沙龍は言いかけたが、やめた。

まだ、それを聞くだけの勇氣はない。

九雷がどれだけ過保護ぶりを発揮しようが、それだけは、沙龍にもまだ百パーセント確信は持てないのだ。最後の躊躇が当然ある。

「……。なんだ？」

「もし、今朝の話が本当で、泰山府君が私の体を元通りに蘇生したんだとしたら、あの爺様は、文字通り死んだ人を生き返らせることが出来るってこと？」

そう言って誤魔化したのが、それも気になっていることの一つである。

「条件はかなり厳しいが、出来ないことはないだろうな」

「条件って、例えば？」

「魂魄が体内に残っていることが第一条件だ。冥府に行ってしまった魂魄を戻すことは、さすがに泰山府君でも無理だろう」

「つまり、死んだ直後じゃないと駄目ってことか……」

「そうだな。それに、『蘇生』が成功したとしても、体力がほとんど残ってないような重病人がその先、自力だけで命を繋ぐのは難しい」

「そっか。だから——」

再生能力があれば、蘇生は百パーセント成功するということなのだ、と沙龍は得心した。

沙龍が泰山府君に『蘇生』を受けた時も、九雷が先の極東との闘いにおいて死にそうになった時も、赤帝君が傍に居た。

彼の持つ『再生』という特殊能力は、具体的には、全ての有機体にエネルギーを与えるというものだ。それは、一時的な体力の前借というものではない。

彼自身がその無尽蔵のエネルギーの供給主なのである。

無尽蔵——、つまり、底がない。

だから、『再生』という技を使うことによって、赤帝君自身が体力を消耗することはあっても、エネルギーは尽きることはない。

何故か。

それは、太陽を大元にした『火行』によるエネルギーだからである。

（じゃあ、体があっても、魂魄がそこになれば、泰山府君でも『蘇生』はできないわけか……）

沙龍はそう理解した。

だとしたら、気掛かりは一つ減る。緑麗のことだ。

自分の前世である緑麗の体は、まだこの東方天界のどこかにある。恐らく、火雲宮の内か、近辺にあるはずだ。

その体と『緑麗の魂魄』があるのなら、『甲斐馨』は不要ではないか——と
思ったことがある。

誰にも言えない話だ。

『緑麗の体があっても、その体の中に魂魄がないのなら『蘇生』は叶わない——

』
そうと知れば、確かに気掛かりは減るのだが、心は一層昏さの中に沈んでいく
気もした。

九雷は崩れかかった石壁の前で一度立ち止まった。

「ここだ」

沙龍は、黙したまま後を追う。

そこに一歩足を踏み入れた途端、なにか張り詰めるものがあつた。あまりにも
静か過ぎて、怖いくらいである。

殆ど原型を留めていないその建造物は、人の住む家ではなく、まるで――、

(牢獄……?)

口には出さなかつた。

ここが九雷の生家なのだろうと分かる。

予想はできた。

天真や陽輝からそれとなく聞いたこともあるし、『九雷の出生の話はタブー』という噂が本当なら、彼の幼少期は辛いものだったはずである。

沙龍は九雷の過去を自分から聞いたことはなかった。

必要ならいつか話してくれるだろうと思っていたし、話してくれなくても構わないと思っていた。

半分以上崩れている分厚い壁と、明り取り用の小さな窓枠を見て、間違いなくここは牢獄だ、と沙龍は思った。

「まだ形が残っているとは思わなかったが——、いっそ、なくなっていた方がよかったかもしれないな」

「……」

「俺は、ここで生まれて、ここで過ごした。もう何千年前になるのか、数える気もないが……」

最初はこういう顔をしたらいいか分からず、目を伏せていた沙龍だったが、急にフツと笑った。

「私の生まれた所よりは、家賃が高そう。坪数も断然、負けてるね」

つられるように、九雷も微笑む。

陽輝も、真剣な話ほど軽く流そうとする所がある。

そういった陽の性質は、九雷にとっては眩しい。

「不自由はなかった。少なくとも、生きていく分には」
そうだろう、と沙龍は思った。

辺りの様子から察するに、一部屋の大きさはかなり広い。他にも何部屋があったような名残もある。

更に、門があり、囲いがあつたということとは、それなりの敷地を持った、貴人用の牢獄ということだろう。

逃亡を阻止する必要もないような、ただ、宮殿での贅沢を取り上げただけの生活——というのが想像される。

「俺の母親は庶民だったが、時の天帝に見初められて後宮に上がったらしい。随分寵愛されたと聞いたが、そのせいで、後宮の中でも辛い想いをしたんだろう」

淡々と昔話を始めた九雷は、床の上に光っていたなにかを拾った。小さなボタンのようなものだ。

それを、自然な動作でポケットに入れる。

「庇ってくれる情夫がいる間は良かったんだろうが、当時は、血で血を洗う政権抗争が繰り広げられていて、すぐに帝位が代替わりをした。それと同時に、後宮の女たちも大半が殺された。母は見た目が良かったせいで、新帝の妃嬪ひひん（※天子の第二、第三夫人）になることを強要されたようだ。が、母はそれを拒んだらしい。その後、なにがあったのかは大体想像はつく」

そう言った九雷の瞳に、陰が射す。

拒否した所で、殺されるか、無理矢理、側室にされるかのどちらかである。

恐らく後者だったのだろう。

だから、ここに、権力を欲しいままにした父親を憎み、心の壊れた母親を哀れに思いながら育った九雷が居る。

「俺が物心ついた時は、既に正気ではなかった。美しい人だったが、息をしているだけの人形のようなだった。そして、最期まで、俺を自分の子だと認識することなく、逝ってしまった。それを恨んではいけない。俺は、なにも望んではいなかったからな」

九雷が、かろうじて残っている高窓の枠に手を掛けた。

今は手が届くその小さな窓も、昔は届かなかったのだろう。

(なにも望んでない、か……)

そうなのかもしれない。

野心や反骨精神があればストレートにその感情を外に出し、復讐の鬼にもなるのだろうが、九雷には元々そういった性質がなかった。

彼の場合、それは内に向かうのだ。

その結果、内側で処理仕切れなかった部分が、彼の屈折した性格を作ったのだろう。

「何故、気の触れた妾を、盤帝が生かしていたのか俺には分からないが、気味悪がって殺す気も失せたのだろう、と監視役の侍女たちは言っていた」

九雷はそう言ったが、

(愛した人を殺せなかった……ってことじゃないのかな)

沙龍は単純にそう思った。

しかし、それを言っても九雷は信じないだろう。

『執着』と言い換えるなら信じるかもしれないが、美女は集めようと思えば、いくらでも集められたはずである。

後ろ盾もない庶民の娘のことなど、忘れていた——という説明の方が、九雷は理解できる。

「そうして、数百年をここで暮らした。母と、俺と、数人の侍女と、時折やってくる家庭教師だけが俺の話相手だった。たまに、その家庭教師と一緒に外出することが許された。静かで、なにもない世界——。俺はそう思っていた」

さつき二人で歩いてきた蒲公英の野原を、彼はそういう冷めた目で見ていたのだ。

沙龍は一度、溜息をついてから、高窓に手を掛けたままの九雷のところまで歩いていった。背中に抱きついたつもりだが、沙龍の身長ではそこまで届かない。せいぜい腰のあたりだ。

「もう、いいよ……」

「こんな鬱々とした話は聞きたくないか？」

「そうじゃなくて、もう、充分分かったから」

何故、九雷がここに自分を連れてきたのか、何故、今になって昔語りをする気になったのか、沙龍は分かった。

これは彼の『告白』なのである。

他人には決して語らない話を、自分にだけは聞かせる。

独占欲を満たしてくれるという点では、これほど、甘美な話はない。

しかし、実際にはそうやってお前だけは特別だと、無言で縛っていくような陰の部分、九雷は常に持っていた。

2 天使と悪魔

出掛ける前に水雲宮の料理長に渡されたバスケットはかなり巨大サイズで、沙龍の体の半分くらいはあった。

そこに、今日のランチが一式詰め込まれているのだが、取り出してみると、サンドイッチや唐揚げといった定番のメニューは元より、アワビ入りの粽だの、梅干入りおにぎりだの、多種多様なラインアップが窺える。おにぎりは健一が作ったものだろう。

「行き届いてるなあ……」

九雷の好きな紹興酒も入っていたので、沙龍は思わず微笑んだが、バスケットの底にあったものに対しては、一瞬だけ眉をひそめた。

これを入れたのは紗衣だろうか。それとも、九雷の指示だろうか――。

しかし、楽しいランチを前に、すぐ忘れることにした。

また一つ、風に舞う蒲公英の綿毛が目の前に現れ、いずことなく消えていく。

他愛のない話の相槌を打ちながら、その景色を楽しんでいたが、半身を起こした九雷がゆっくりと自分の顎を取るので、特に抵抗することなく体を預けた。

が、よく考えてみれば、九雷の今の挙動はどこかおかしい。——というのは、沙龍にしか分からないことで、端から見ている分には、仲睦まじい恋人同士のごく自然な風景である。

(なに……?)

と、目で問うまでもなく、案の定、唇を重ねる短いキスをしただけで、九雷は細めた瞳で自分の背後に集中している。

その様子から、なにか危険が迫っているのは理解した。しかし、九雷の肩越しには水色の空しか見えない。

バスケットは手を伸ばせば届くところにある。九雷の目は、一瞬、それを確認していた。

「……三人？」

沙龍にもようやく、その気配らしきものが感じられた。

風の動きや草の動きから、いや、大地の動きから、と言った方がいいかもしれ

ない。

「いや、崖の上にもう二人居る。そっちの方が厄介だ」

囁くように言った九雷の言葉は、見せ掛けのラブシーンに相応しい響きを持っていたので、沙龍は思わず苦笑した。

「俺の懐にパイソンがある。撃たなくていい。持ってる」
黙って頷いた。

コルト・パイソン——、玄人向けの重たい銃である。

普通の女性が片手で、咄嗟に撃てるような代物ではないが、握力百二十を誇る沙龍なら、撃つだけなら容易い。

しかし、撃つたとしても、沙龍は射撃があまり得意ではないので、命中率はかなり落ちるはずである。

九雷もそれくらいは分かっている。援護射撃を期待しているわけではないのだ。

『なにもしなくていい』と言っても、それでは沙龍が納得しないということ踏まえた上での『持ってる』なのだ。

九雷の白い手袋をつけた手がじりつとバスケットの方に動いた。

出掛けに言った言葉からしても、バスケットの底に納められている聖魔剣は自分を使うつもりなのだろう。

もう一度、九雷が触れるだけのキスをしてきた時、それが合図だと分かったので、沙龍は重なった体の奥からパイソンを抜いた。

「……」

ふと、沙龍の双眸に不安の色がよぎる。

以前、九雷が生死の境に陥った時、味わった恐怖がまだ完全には癒えていない。

全てが凍りつくようなあの感覚は、もう二度とご免だ。

「心配するな、すぐ終わらせる」

九雷は、沙龍の心情を慮って口の端をあげた。

その刹那、沙龍が見た九雷の表情は明らかに『憤怒』だった。

振り向き様、九雷がなにをしたのかすら、沙龍には分からなかった。

バスケットの底から左手で聖魔剣を引き抜いた九雷の自由な右手には、既に空

気を凝縮したような塊があつたのだ。

その塊が、漆黒の闇を喚んで唸り、その直後、幾筋もの光が天地を引き裂いた。

『雷法』である。

意のままに雷鳴を落とすことができるというこの雷法を以ってすれば、四方将神としての青龍の力などなくても、九雷は間違いなく帝位すら篡奪できるはずなのである。

尤も、彼がこの『雷法』を披露することはあまりない。

自らが第一人者であるにも関わらず、この術法は強力すぎて卑怯だと思つている部分があるからだろう。

しかし、今、それを使ったということとは、やはり九雷は怒つて居るのだ。

蒼天が、闇い鈍色の空に変わっている。

(よくもまあ、こんなとんでもない男に挑めたもんだわ……)

沙龍は、数年前の無謀な自分に対して、苦笑するしかなかった。

彼は殺そうと思えば、誰でも殺せるのである。

大地に雷鳴が走った筋がくつきりと残され、そこかしこから白い煙が揺らめいていた。

言葉通りに、すぐ終わったようだ。

死体は三つ、いや、二つだ。

二体は、もはや個体の識別ができないほどの黒い塊になっていた。

肩を押さえて呻いている少年のすぐ横には、粉々にくだけた岩がある。九雷がわざと外したのだ。

しかも、あの振り向いた刹那に、一番質量の少なそうな標的を選んでそうした、ということだろう。

(っ、翼——!?)

沙龍は、呻くその少年の背中から、羽根のようなものが生えているのを見て、なんの冗談かと思った。

これがコスプレでなければ、彼らは『天使』ということになるではないか。

「この四梵天（注1）になんの用だ」

九雷は、赤毛の少年に向って、事務口調で言い放った。沙龍は、二、三步下

がったところで、止められている。

「何故この結界に侵入できた？」

「……」

二枚の羽根がある以外は、外見はほぼ人間と同じである。

だから、うずくまっているこの少年が、苦痛のためにそうしているのだろうと推測できるが、九雷は油断していなかった。

「答える気はない、か。では、選べ。服従か、自決か」

(お優しいことで……)

沙龍は、その様子を見守りながら嘆息した。

選べと言った所で、少年の選択肢は一つしかない。

かすかに上げた顔からは決定的な反撥の表情が見て取れる。決して『服従』は選ばない顔だ。

小兵にしては天晴れと言いたいところである。

「警告なしに射殺か。大した法治国家だな」

少年が、徐に口を開く。言葉は通じているようだ。

が、何故か少年の敵愾心丸出しの瞳は沙龍に向いていた。まるで、地獄の底から睨み付けるような、凶悪な目だ。

「先に領土侵犯をしたのはどちらだ。俺には侵入者の命を保障する義務などない」

「……」

「上に居る二人は、お前らの上官か」

「……？」

「違うようだな。では、単なる偶然か……」

九雷が聖魔剣を起動して一歩前に出た時、沙龍がそれを制止した。

「待って、元帥」

「……？」

九雷は、沙龍が止めた理由が分からない。

しかし、それを沙龍が説明する前に、少年は気を失った。

「死んだか？」

「いや、微かに生きてる」

沙龍は少年の脈を確認していたが、九雷の注意は既に上空に移されている。いつの間にか水色の空に戻っていたが、その宙に、禍々しい暗雲でもあるかのような表情だ。

「沙龍、下がってろ」

その平坦な口調に沙龍は息を呑んだ。

恐らく、九雷にとっての本番は、ここからなのだ。

ホバー機能でもついているのか、という動作で、崖から降りてきたのは、二人。

軽やかに着地して、すくっと立ち上がる所作がどこまでも美しい。

特に、白マントですっぽりと全身を覆っている人物は、体型が分からない上に仮面までつけているので、男か女かも分からないが、沙龍はその姿を揶揄するよりも先に、恐怖に似たものを感じた。

素顔を晒している方は、短髪黒髪でお役所勤めのようなスーツに黒縁眼鏡をしているが、恐らく軍人だろう。顔立ちは、明らかに東方天界の住民ではない。

「どうやら、レポーターたちはとんでもない人に喧嘩を売ってしまったようです

ね」

この惨状を見渡して、スーツの眼鏡男が誰にというのでなく言った。

周囲の岩肌は抉れ、黒く焼け焦げた跡がうねっている。

「何者だ」

九雷の声音は明らかに天界軍元帥のものだ。

「お初にお目にかかります。私の名はネビロス」

「なにをしに来た」

「さて、なんと答えれば、貴方に納得して頂けるか」

「俺は、そっちの仮面に聞いている。小者に用はない」

ネビロスと名乗った男は声を立てずに笑っただけだった。そして、チラツと後ろを見る。

その視線を受けて、白マントはひょうきんとも言える動作で肩をすくめてから、進み出た。

「大した度胸だねえ。確かにこいつは俺の従者だが、ピンで立たせたら、あんたらのお仲間の二、三人は確実に震え上がると思うんだけどな」

若い、艶のある男の声だった。

自信に満ちている。

「まあ、ここはあんたらのお膝元だ。こんなご大層なフィールドがかかって
ちや、その強気な発言も領けるか」

「……」

「で、VIPが無用心に護衛もなしで、こんなとこでなにしてたんだい？」

「質問しているのはこちらだぞ」

「俺は、そっちの姫さんに聞いてんだけどな」

そう言われて、沙龍はハツとした。

このずっしりと重くのしかかってくるような威圧感を、かつて経験したことがあるような気がする。

（この男——、強い。いや、強い、なんでもんじゃない。この感じは相当ヤバイ
……。第一級的にヤバイ……！）

もし、沙龍一人だったら、気圧されて満足に口もきけなかっただろう。

座り込んで動けなかったかもしれない。

しかし、九雷の存在が沙龍を強気にした。

「なにしてたかって……？ デート？」

「……」

「……」

「……」

その場の雰囲気を一言で塗り替えてしまった沙龍に、白マントが忍び笑いをした。

成程、そうきたか、という笑いだ。

「色男さんよ、この姫さんはあんたのものか？」

「そうだ」

「成程。じゃあ、奪うわけにはいかねえな」

「“奪う”……？」

それはどういう意味だ、と沙龍が聞こうとした時、白マントの男は軽く踊るよ
うに歩み寄り、沙龍をひよこひよことした動きで眺め回した。あからさまに品定
めしている、といった具合だ。

沙龍はその行動に、不快感を露わにした。

「ん〜ん〜？ あんた、いつからロリコンに？ 俺的にはもーちよい育ててくれた方が好みなんだが……」

「……。ちよつと待て、コラア」

沙龍は文句を言おうとしたが、白マントはその隙を与えない。

「ま、しょうがない。……で？ 貸し出しはしてんの？ この姫さん、いくら？」

「冗談ならセンスが皆無だし、本気なら完全にイカれてるな」

九雷は手にした聖魔剣で、沙龍と白マントの間を割いた。

凶悪に発光したその刃の前に、白マントも少しだけ身を引く。

「フーン、余裕だね。ま、いい。今日は様子を見に來ただけだしな」

沙龍はこの事態に、流れのまま怒るべきか、様子を見るべきなのか、迷った。

この來訪者二人は、このまま、大人しく帰ってきてくれるのだろうか？ その前に、九雷は、大人しく帰らせるつもりなのだろうか？ 注意深く状況を読み取らないと、命取りになる。

少なくとも、白マントと九雷が本気でやり合えば、どちらかは必ずやられる——、と思ったのだ。

「姫さん、ところで、アンタ、金髪碧眼の男は好きかい？」

唐突に聞いてくる白マントに、沙龍は即答した。

「嫌い」

「あ、そ……」

両肩をすくめて見せる。明らかに遊んでる仕草だ。

しかし、九雷は最初から遊んでなどいない。

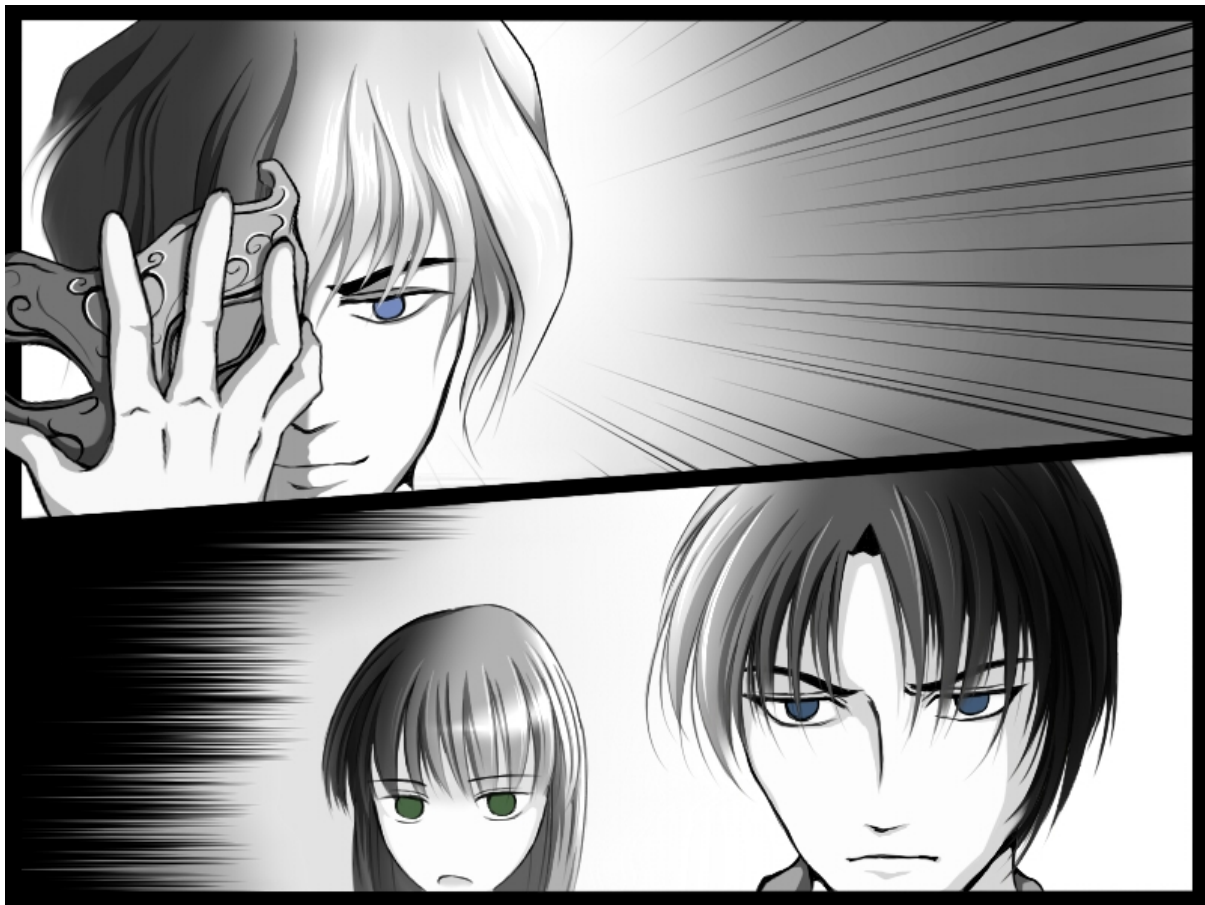
「最初の質問に答えてないようだが？ ルシファー、一体、なにをしに来た」

「なんだ。覚えてた上に、バレてたのかい。相変わらず人が悪いな」

「ル……!？」

沙龍が息を呑んだ目の前で、男が仮面を取ると、そこに見事な金髪碧眼の男が現れた。

さつきまで、ひょうきんにしか見えなかった真っ白なマントが、怖いほどマッチしている。羽根こそないが、この姿こそ天使——、のようだ。



しかし、沙龍の一般常識が正しいのなら、この金髪碧眼は今は天使じゃない。それどころか、魔界の帝王である。

「随分前のことなんで、忘れられてると思ってたんだけどな」

「今さっきまで忘れてたところだ」

「久し振りだな、少尉さん。いや、今は元帥さんか。大したモンだね。ま、俺はこうなると思ってたけどよ。あんたは昇りつめて、俺は墮天した。お互い、当然の成り行きってワケだ。ということ、知らない仲でもないわけだし、ここは酒の一杯でも貰って、昔話でも——」

「なにしに来た、と聞いている」

九雷のにもない言葉に、ルシファーが口を歪めた。

「姫さん、あんた、こんな性格悪い男が好きなのかい？」

「……」

沙龍は答えなかったが、心の中で「ああ、好きだとも」と言っておいた。それよりも、ルシファーの呼びかけがさつきから気になる。

「私は宮家でも皇家でもない。『プリンセス』の称号は持っていないんだが？」

茶化しているならやめろ、と暗に言ってみたのだが、

「あん？ そうだったか……？ 『フォン・クリストフ』は歴とした王族だったはずだが……」

「……？」

「ま、いい。じゃあ、今の名前はなんていうんだ？」

「名乗る義理が？」

途端に険悪な空気を漂わせると、九雷が宥めるような視線を投げてきた。

（分かってる。でも、こうでもしないと、平常心を保ってられない——）

沙龍は九雷に無言でそう返した。

「猊下、あまり長居もできませんが」

「うるせえ、ネビロス。話はまだ終わっちゃいねえ」

ジロリ、と睨んだルシファアの一声で、ネビロスも黙った。

「元帥さんよ。領土侵犯したのは、まあ、こつちが悪かった。さっきのレポー

ターたちにしたようにねじ伏せてくれてもいいんだが、あんたはそんなことに利は見出さないだろう。それで、だ。近々、借り物に来るから、そんな時、改めて謝

罪と礼をするってんでどうだ？」

「貴重品の貸し出しはしていないぞ」

「それなりの見返りがあっても、か？」

「どんな見返りがあっても、だ」

「返すと言っても、か？」

「なんと言っても、だ」

「ふう……、そうかい」

「ルシファー、龍が欲しいなら、愛玩用のペットを一匹くれてやる。投げたボールを拾ってくる位には賢いぞ」

それは、もしかして小龍のことではないだろうか、と沙龍は思ったが、もう口を出すつもりはなかった。

「こういうのはオリンピックのメダルと一緒にね。『ゴールド』でなけりや意味ねえんだよ」

「金粉でもかけてやれ」

「ハア、仕方ねえ。時間もねえし、とりあえず今回は引き上げるぜ。だが、一つ

忠告しておく。光モノが好きなのはなにも俺だけじゃない。『奴等』に渡るようなことになったら俺が困るんでね。その時は、俺も強硬手段に出るだろうよ」

「……」

「よく考えるんだな。俺に渡せば、少なくとも姫さんの無事は俺が保障してやれるし、ことが終われば責任持って返してやる」

「お前こそ、よく考えるんだな。お前ほどの男が、他人の力を借りてまで成すことになんの意味がある」

「四の五の言ってられるような状況でもないんでね」

「猥下——」

ネビロスが腕時計を見ながらわざとらしく急かした。

「分かってるよ、うるせえな。……じゃな。又来るぜ」

「歓迎はしないぞ」

そして、二人が来た時と同じように崖の上に消えると、沙龍は力が抜けて、思わず座り込んでしまった。

いつだったか、同じように、とても敵わないと思った男の前で膝を折ったこと

がある。

「あれが……、『ルシファー』？」

『光をもたらす者』の名を持つ、かつての最高位の天使――。

そして、地獄の王にして、全ての『魔』の頂点に立つ、悪魔――。

(注1) 四梵天……道教三十六天の中の、所謂『天界』に相当する部分。九雷は西洋世界にある『天界』と区別してこの言葉を使った。本来の読み方は不明。

3 新たな呪縛

切っておいた携帯電話の電源を入れてどこかと連絡を取りながら、九雷は未だに座り込んでいた沙龍を立たせた。

「全て封鎖しろ。例外なく全て、だ。その上で非常線を張れ。急げよ」

どうせ、抜け目ないルシファアのことだ。今更こちらが手を尽くした所で、まんまと逃げおおせるだろうが、ネズミが他に居る可能性もある。

こんなに容易く外部からの侵入を許すようでは、鉄壁を誇る天界の防衛網も一から見直した方がいいだろう、と九雷は思った。

九雷が指示を飛ばしている間、沙龍は、先ほど、自分に対して敵意をむき出しにした少年の方に歩み寄った。

力尽きて倒れているが、息はまだあるようだ。

エージェントはもう二人居たが、文字通り黒焦げになっており、哀れな姿をこの野原に晒している。

(天使……なのか、やはり)

沙龍は初めて見る種族である。

二枚の羽根がある以外は、人間とほとんど変わりはない。

血の色も、恐らく、急所も、そして、怪我の治療法も――。

沙龍が、少年の傷の具合を確かめようと、その身体を仰向けにした時、僅かに腕が動いてなにかを掴もうとした。

「死にたくないのか……？」

意識はないだろうが、言ってみた。

有益な情報を引き出せるかもしれないし、利用価値があるかもしれない、というのを言い訳にして、沙龍は応急処置を始めた。

九雷は特にそれを咎めようとはしない。

「彼等は何者なの……？」

「ネビロスと名乗った男は、『レポーター』と言っていたな。それが本来の意味通りなら、敵情視察に来ただけのスパイだろう。力量的にも、大したことはな

い」

「その視察現場に私たちが居合わせたのは……、ただの偶然？」
否定的な意味が僅かに含まれている。

別に疑っているわけではないのだが、仮に九雷の故意だとしても、沙龍は驚かないだろう。

それほど、九雷の策士ぶりというのは徹底している。

だが、今回ばかりは違うようだ。

「この一帯は、帝都の結界が及ぶギリギリのラインだからな」

「敵情視察のついでに私たちを襲おうとしたってこと？」

「俺たち、じゃない」

「つまり、私——か」

九雷ははっきりと肯定しなかったが、それは、ルシファーとの会話でも思ったことだ。

「西方の神魔が、黄龍になんの用があるんだろう？」

ストレートな疑問を口にする沙龍に、九雷は意外にも考え込む様子を見せる。

「なんの目的で——、か。問題は、それか？」

「…………え？」

「重要なのは、ルシファーはお前を攫いに来て、天使たちはお前を殺しに来た、ということだ」

やはり殺意か、と沙龍は思った。

九雷が問答無用で彼等を焼き殺したのも、その明確な殺意を感じたからだろう。

しかし、それでも、何故、という疑問は拭えない。

少年の憎悪の瞳は、任務だから、では説明できない気がするのだ。

「とすれば、脅威は、より危険なものから順に取り除くのがセオリーだな」

「…………うん」

なにも考えずに同意したが、沙龍は眉を寄せたままである。

「どうして私が『黄龍の保持者』だって知ってたんだらう？」

またしてもストレートな疑問だった。

しかし、これには、既に考えうる答えが幾つかある。

「それは、まだ、胸の内にはしまっておけ」

「……」

やはりそうか、と沙龍は思った。

『こちら』の世界に、『あちら』の世界と通じている者が居るのだ。

沙龍の顔が割れているのも、この鉄壁の結界が破られたのも、恐らくはそのせいだろう。

九雷は当然、その人物を知っている。そして、ずっと前から、その売国奴の尻尾を掴むべく動いているはずだ。

「元帥は、あの魔王様と知り合いなんだね」

「大昔の話だ。それぞれの身分が今と全く違う時代に、一度、会ったことがあるというだけの知り合いだが」

そうは言っても、あのやりとりを聞けば『ただの知り合い』とは思えない。

親密ではないにしろ、お互い一目置いているような、緊張感の漂う関係に見えるた。

「沙龍——」

「え？ ……あ」

九雷に眉間を突付かれて、沙龍は、ようやく自分が難しい顔をしていたことに気付いた。

「心配するな。俺が居る」

「……うん」

沙龍は無理矢理微笑んで、思い出したように、コルト・パイソンを差し出した。

「これ、陽輝にあげるって言ってた銃？」

「ああ、そういえば、そうだったな」

「忘れてたの？」

話題が変わったことに沙龍は少しホツとした。

確か、もう二年くらいは経つような気がするのだが、未だにその約束は実行されてないらしい。

ただ、機会がなかったただけだろう。彼等の時間の感覚は、沙龍とはまるで違うのだ。

「閣下、ご無事で——」

黒焰虎に乗ってきた軍服の男が、駆け寄ってくる。九雷の部下の一人、之信ししんである。

沙龍も何度か見たことのある顔だ。

直線的なイメージがある男で、融通の利かなそうな、太い眉をしている。

「緊急配備は完了しました。後は現場スタッフが動いてくれます。……連行するのは、この少年ですか？」

言いながら、彼は背中のベルトから手錠を取り出し、倒れている少年に取り付けた。

「ああ、頼む。身体検査は念入りにしてくれ。異民族を扱うのは、初めてか？」

「いえ、以前——、だいぶ前のことですが、雅山戦役に出たことがありますので」

「そうか。当時はどこに居た？」

「西方軍です」

「ああ、そうだったな」

まだ、四方軍が、龍王を大将としていた時代の話である。

それから、更に数名のスタッフがこの現場に現れた後は、調査と事後処理は彼らに任せた。

九雷が沙龍と共に引き上げようとした時、之信が慌てて近付いてきた。

「すみません、忘れてました。総司令部宛てにこんなものが届いていたのですが……」

之信が差し出した手紙を受け取ると、九雷は表と裏を一瞥しただけで、苦笑しながらそれを沙龍に渡した。

差出人の名がないので、検閲のために封切られているが、九雷にはその差出人が誰か分かったのだろう。

封筒の表には、豪快な字で『阿姐^{アーチエ}へ』と書かれてある。

「また聖霄^{せいしょう}からか」

これまでも、何度か白帝君から絵葉書が届いたことはあるが、封書は初めてだった。

人界仕事をしている傍らで、沙龍には不定期ながらこうして手紙を寄越すのだが、いつも大したことが書かれているわけではない。

だから、沙龍もそのつもりで手紙を取り出した。

『元気かー？ 俺はこの三日、秘境の温泉とやらに浸かって旅の疲れを癒してる
ところ。何分、鄙びたところでよー。温泉芸者の一人も居ねえんで、俺に添い寝し
てくれんのは、この旅館で飼ってるつつートラジマー一匹。泣けるっしょ？ この
手紙が届く頃には、もしかしたら阿姐が青春時代を謳歌した近辺に居るかも。ま
た気が向いたら、絵葉書でも送る。じゃあな。by 聖』
やはり、ただの短い旅行記である。

封の中には写真も入っていた。今回はこれを送るために封書になったらしい。
デブネコと仲良く写っている写真だった。

「なにやってんだか……」

沙龍は、笑っていた。

沙龍を見舞う一連の事件の裏に、絶えず見え隠れする『悪意』——。
東方天界の住人になって数年経つが、この悪意は収まることを知らない。

龍王家のクーデターの首謀者、北海龍王敖吉は、積年の恨みが重なって、沙龍を亡き者にしようとしていた。

更に遡って、新帝即位の前後に、沙龍を天界から追放しようとする宰相の策謀もあつた。

つまり、そこにあるのは、邪魔だから排除する、脅威だから滅する、といった類の『悪意』であり、これは沙龍が神獣の保持者である以上、つきまとうものなのである。

(でも、あの魔王様は、違つたな——)

水雲宮に戻つた沙龍は、長椅子に寝転びながら、そんなことを考えていた。

デートがハプニングで中止になつてしまったことに対する憤りは当然あるが、仕事に行つてしまった九雷を責めるつもりはないし、これぐらいなら、水雲宮のジムのサンドバッグに八つ当たれば済む話である。

ポテトチップを摘みながら、午後の時間を過ごしている沙龍の表情も沈んでいくわけではない。

ルシファーには、今まで沙龍を苛立たせてきた、黄龍に対する悪意というもの

がなかった。

それが、沙龍に多少の好奇心を抱かせたのだ。

西方魔界の盟主はどこかで黄龍の存在を知り、その強大な力に興味を示しただけ——と思えるのだ。

甘い目算かもしれないが、沙龍がルシファーを即座に敵と判断しなかったのは、恐らく、ルシファー自身も沙龍を敵としていなかったからだろう。

対して、天使の少年は、明らかに悪意があった。あの一瞬の、憎悪に満ちた表情が、沙龍の脳裏に蘇る。

（緑麗は、西側となにか因縁があったのか……？）

自分の身に覚えがない以上、そう考えるのが妥当だ。

しかし、九雷にそれを聞くことはできなかった。

意識的に避けているわけではないが、なにか強いきっかけがないと、緑麗の名前は二人の間には出てこない。

沙龍が気にしている気配が分かるから、九雷も自分からは話題にしないのだろう。

そこにも、暗黙の了解事項がある。

(もし——)

沙龍は、最近、その仮定を繰り返している。

(もし、私が貴方と同じ時間を生きたいと言ったら——、そして、その方法があると言ったら——、貴方はどう思うのだろう)

そんな想いに囚われ始めていた。

4 蘇生の代償

翌日、四神府の一室に九雷の姿があった。彼がここを訪れるということは、珍しい。

赤帝君の秘書官の紫凜しりんも古参のスタッフではあるが、彼女の記憶ではこの切れ者と評判の総司令官が、自分の上官を訪ねてきたのは今日が初めてだった。

「すぐに呼んで参りますわ。お待ち下さい」

恐縮して立ち上がった紫凜を軽く制して、九雷は言った。

「いや、仕事じゃない。そう急がなくてもいい。それと、できたら、真武君も呼んでくれないか」

「はい、分かりました」

紫凜に通された応接室で、九雷は先に白帝君の近況を二人に伝えた。

「進展はないということだろう。今は日本に居るようだが」

沙龍宛の手紙なら、九雷も目を通すだろうという白帝君の意図はちゃんと伝

わっている。

つまり、あの手紙は九雷への仕事の報告を兼ねているのだ。

白帝君はずっと、人界でフラフラしているはずの師父、太上道君を探している。

どうしても、太上道君の力を借りなければ出来ない仕事があるのだ。

「それと、沙龍のことなんだが……」

そう前置きをして、赤帝君の方を真っ直ぐ見た。

同席している木佐は、『またなにか始まるぞ』と思っただけである。

「最近になって気付いたことがある。時効なら、教えてくれないか？ あの時、お前が玉帝陛下になにを下命されたのかをな——」

九雷が言う『あの時』というのは、赤帝朱雀星君が甲斐馨を殺した時だというのは木佐にも分かる。

赤帝君は一瞬、顔をしかめただけで、九雷に負けない冷静さで返した。

「緑麗様の身に、なにかあったのか？」

「今のところはないが、この先、なにかあれば、俺はお前を糾弾するだろうな」

既に糾弾姿勢でなにを今更、と赤帝君は思うのだが、

「あの時、お前はなにをした？　沙龍の身体寿命を終わらせるだけなら、別にお前でもなくとも良かったはずだ」

「そこまで分かっているのなら、私が話すことはなにもないだろう」

相変わらず口を開けば険悪になるこの二人の空気には、木佐もだいたい慣れた。見えない火花を直通にさせないためには、口を挟むしかない。

「馨になにか変わったことでも？　差し支えなければ聞かせてもらえませんか」
その言い方には、木佐なりの気遣いがあった。

「刀傷だ」

「もしかして、背中なの？　それが、どうしたんです？」

「子供の頃に負った傷だと言っていたが、跡形もなくなっている」

「まさか。あの傷は、そんな簡単に消えるようなものでは……」

「沙龍も同じことを言っていた。だが、今、その痕はない。本人も不思議がっていた」

木佐は、沙龍と同居生活をしていた時に、その傷を何度も見たことがある。

隠そうともせず、夏場などは、無防備にノースリーブで家の中をウロウロしていたからだ。

幾度となく襲ってくる蒼龍会の連中とやり合った時、弟の偃月えんげつを庇った名誉の負傷だ、と冗談交じりに言っていたが、あの深い傷跡を見れば、かなり生死を彷徨ったはずだ、というのが木佐には分かった。

「泰山府君の『蘇生』のせいだろうと説明したら、本人は納得したようだが、俺にはどうも解せない。蘇生が外傷を元通りにする技だといっても、そんなに昔の傷まで治せるものか？」

「そうだ。本来なら、泰山府君といえど、そこまでは出来ない」
赤帝君がやつと口を開いた。

「つまり、黄龍の力を借りて、全ての体内時間をリセットしたというのが正解だ」

黄龍の力、即ち、原状回復という大地そのものの力である。

「しかし……？ それなら、単純に考えれば赤ん坊になってしまふような気がするんだが……？」

木佐が呈した疑問には、赤帝君は率直に答えた。

「いや、実際に時間を遡るわけじゃない。現在の姿形を保ったまま、細胞だけを原状回復させるのが蘇生という技だ。通常の『蘇生』は時間的にも物理的にもかなり限られた範囲にしか及ばないが、黄龍の力を借りれば、その効果は全てに及ぶ」

「そういうことか。しかし、何故、そこまでする必要があったんだ……？」

「例の実験のため、か？」

九雷が嘆息と共に呟く。

泰山府君は、黄龍がどのようにして冥府の最下層に現れたのか、実証したがっていたのだ。

そのために、新しい保持者の体が必要だと言っていた。

「それもある。しかし、実際には陛下のご遺志を汲んだに過ぎないのだ。私も、泰山府君も」

赤帝君は、あの時、愛刀『紅蓮』で沙龍を仮死状態にした。

その役目を課されたのは、彼が再生能力を持つ者だからである。

そして、泰山府君が沙龍の死した体を蘇生し、人として生きてきた体をゼロの状態に戻した——、ということである。

「玉帝陛下は、緑麗様一人に汚名を着せて人界に落としたこと、心を砕かれていた。人の寿命はあまりに短い。人界でその寿命を全うすることを選ぶのならよいが、緑麗様が晴れて天界に戻ってきた時は、その寿命の短さは枷にしかならぬ。だから、緑麗様自身がいずれを選ぼうとも不都合のないように、身体能力を一つ、付け加えたのだ。逝去される直前にな」

「もしかして——」

と、気付いたのは、九雷である。

「だから、今の緑麗様には、以前にはない力がある」

「……?」

木佐にはまだ分からない。

「分かりやすく言うと、変身能力のオプシヨンがついた、ということだ」

「ああ、あれか——」

ミニ黄龍の姿のことである。

「緑麗様が天界に戻って来られて以降、度々黄龍の姿を取る理由が、そこにある。今はまだご自分で制御できていないようだが、そのうちできるようになるだろう。あの可愛らしいお姿で居る間は原状回復の力が機能し続ける。つまり、身体寿命が止まるということだ」

つまり、自分の意思でその変身能力を放棄して人の寿命を甘受することもできるし、神々と同じ寿命を得たいのなら、定期的にあのミニ黄龍の姿で居ればいい、というのだ。

九雷は、かなりの時間を置いてから、やっと事態を呑み込んだようだ。

もし、それが蘇生の代償だと言うなら、笑い話にも思える。

一月に一度、二、三日の不便で済むのなら、こんな簡単なことはないではないか。

「何故、お前はそれを黙っていた？」

「別に黙っていたわけでも、口止めされていたわけでもない。貴方が聞かなかっただけだ」

赤帝君はさらっと答えた。

いつもとは逆に、九雷が眉を吊り上げる。

その水面下の攻防に、木佐は内心苦笑していたが、

（やれやれ、馨も文字通り人間離れしてきたな）

と思わずにいられなかった。

その件があつてしばらくしてから、木佐小次郎は、身体能力は変わったくせに、その他はなにも変わらない親友が、自分のオフィスにやって来て勝手に寛いでいるのを、いつもの調子で相手していた。

赤帝君は時期を見て沙龍に話すつもりだったと言っていたが、その役目は九雷に譲渡された。

木佐は、なら、自分はなにも知らない振りをしておこうと決め込んでいる。

最近はなにやら暗雲の漂う兆しもあるので、リアルタイムの話題としては、こちらのほうが都合がいい。

「……というワケだからさ、キサさんも気を付けてね」

「今度は天使と悪魔か。さすがトラブルメーカーだな。賑やかでないじゃないか」

この言い方には、とつくに毒舌を通り越してしまったような感がある。

ある意味、達観した姿といえるのかもしれない、と沙龍は思う。

元から、あまり物事に動じない若者だったが、ここに来てすわ東西対抗戦か、という事態にもこんな感想しか見せない。

「キサさん、ルシファーに会ってみ？ ちょっと感想変わるかもよ」

「元天使、現魔王だろ。僕だって、冥府の主とは知り合いだ。今更驚くか」

「悪魔連合軍の総大将だよ？ 魔王というか、大魔王じゃん。……あ、ありがとう」

二杯目のコーヒーを持ってきてくれた曹昌そうしょうとは、既に顔馴染みだ。

「曹昌、あんまり構うんじゃない」

木佐はそう言って秘書官を窘めたが、沙龍と曹昌は顔を見合わせて笑っただけである。

「ところでさー、最近なにか面白いことあった？」

新聞を読んでいる木佐は、真面目に沙龍の話聞いていない。

「毎度面白いことを引き起こしてくれる輩なら、目の前に居る」

「そーじゃなくて。なんか、ときめくようなこととか」

「馨——」

面倒臭そうに呼ばれたその声には、『邪魔だから帰れ』というニュアンスが含まれているのが沙龍には分かる。

「人のお節介焼く前に、君にはすべきことが山のようにあるだろう」

「別がないよ？」

「……」

「い、いや、ちよつとはあるかな……？」

「……」

「……」

自堕落な生活をしている沙龍に比べ、木佐は相変わらず朝五時には起きて夜は十二時前には寝るといふ規則正しい生活をしている。

ここで生活指導が始まってしまつては沙龍に勝ち目はないので、そろそろ逃げ

ようかと思ったのだが――。

「ところで、白帝君が日本に居るみたいだな？」

帰れオーラを発しているくせに、話を振ってくる。

「うん。そうらしいね。東京見物でもしてるのかな。大体、なんであの子は旅に出たんだろう？」

「……」

木佐は、新聞で顔を覆って、一瞬妙だな、と思った表情を隠した。

沙龍はこの件についてはなにも知らないのか、と驚いたのだ。

過保護な恋人からなにも聞かされてないのかもしれないが、だとしたら、なにか勘繰ってもいいはずである。少なくとも、以前の沙龍ならそういう目端は利いていた。

「あの子ってガラか？」

「だって、そんな感じだよ。私にとっては。なんか、ユエみたいだし。ふらっと旅に出ちゃうとことかさ」

「確かに、偃月君より、馨と白帝君の方が近いものを感じるな……」

「似てるってこと？」

「まあ、そういう意味だけど……」

赤帝君も、あの二人は食事の仕方が同じだ、と嘆いていたことがある。

「東京か……。少しは変わったのかな。僕等が住んでいた場所も」

木佐が、不意にそんなことを言うので、思わず聞いた。

「懐かしい……？」

「……」

「……」

沙龍の一言で、何故か二人共黙り込んでしまった。

お互い自問し、お互いが答えを出したであろう頃合を見計らって、木佐が言った。

「思ったほどでもないな……。馨は？」

「私は、場所に思い入れはないんだ」

そうだろう、と思う。

沙龍なら、どこでも生きていけそうな気もする。

しかし、「場所には」と限定した沙龍の言葉の裏にあるものが、木佐には分かる気がした。

刺客に襲われたことはちよつとした事件だったが、あれ以来、特に西方世界からのモーシオンはない。

向こうの世界ではなにやら不穏な空気が流れているようだが、向こうは向こうで勝手にやっていたらいい、と沙龍は思っていた。

九雷が教えてくれた話では、『悪魔連合軍VS天使軍』の図式は、向こうでは伝統的なものらしい。つまり、両者は競って沙龍を——というよりは、恐らく黄龍を——手中にしようとしているのではないかと推測できる。

しかし、沙龍は面倒事には関わりたくはない。ルシファーに悪意がなからうと、天使たちが自分の命を狙っているように、積極的にこの件に関わる気はなかったのだ。

水雲宮で遊んでいる分には彼等も容易に手出しはできないだろう。

だから、九雷に捕虜の少年と接触してみるか、と言われた時は少し意外に思っ

た。

てつきり、九雷も、この件には関わらせないつもりだろうと思っていたからだ。

「でも、そうゆうの、私は結構苦手なんだよな……。キサさんは上手いんだけど」

一向に口を割らない捕虜の少年は、飲まず食わずのハンストを続けているという。

「力技で聞き出すならまだしも、手懐けるってのは、私の分野じゃないよ」

「なにも聞き出せなくても、なにか分かることはあるだろう」

仕事から帰宅した九雷は、着替えながらの会話だ。少し、疲れた顔を見せている。

東西の間に締結された不可侵条約は未だに有効のはずだが、それを一方的に破った悪魔連合軍の総大将と、天使軍の鷹派に対して、こちらがどう出るのか、九雷はまだ保留にしている。

当然、先の『暗殺未遂襲撃事件』はまだ公にしていない。

それは、内通者の炙り出しに関係しているのだ。

「気乗りしないなら、無理にすることもないが……」

「でも、ハンストしてるんなら、余命いくばくつてところよね？」

「もしくは、パフォーマンスかもしれんが」

「どうということ？」

「お前に会いたいのかもしれん。会わせないなら死んでやる、というパフォーマンスだろう」

「つまり、標的をなんとしても殺したいってこと？ 捕虜になったら、殺せる手

段もないだろうに……」

「俺は、それだけじゃない気がするな」

九雷も、あの少年の沙龍に対する仇視に気付いていたようだ。

なにか、沙龍に対する特別な憎悪があるのではないか、ということである。

それを、九雷は沙龍自身に探ってみる、と言っているのだ。

「うん……、まあ、確かにそれはちよつと気になるな」

ということとで、結局引き受けることになってしまった。

「気長にやってみろ。別に一年くらい放っておいてもいい」

「……はあ」

悠久の時を持っているだけに、総じて彼等は気長だ——、と沙龍はいつも思う。

明けて翌日、とりあえずは自己流でやってみようと四神府まで出掛けたのだが、初っ端からつまづいた。

怪我がまだ完治してないはずの少年は、沙龍の顔を見るなり襲い掛かってきたのだ。

勿論、彼は丸腰である。頼りになるのはその四肢だけなのだが、拘束衣を着せられているので、襲うといっても突進する程度である。

少年は、返り討ちにあった。

ちなみに、返り討ちにしたのは沙龍ではない。沙龍に付き添って、この独房に案内してくれた紫凜である。

何故、彼が四神府の独房に監禁されているのかというと、事件を公にしていなので正規軍の収容施設に入れるわけにはいかないからだ。

「毎日この通りですわ。お怪我は？　緑麗様」

「いや、ない。ありがとう、紫凜」

一応、平静を装ってそう言ったが、大胆スリット入りのタイトスカートで少年を床に押し付け、拘束している紫凜の武闘派ぶりに圧倒された。

赤毛の少年は、まだ暴れようとしている。

「離しやがれッ、この——ッ！」

「なんか、飛龍みたい……」

拘束されても尚、戦闘意欲を失わないその目が、あの暴れん坊に重なる。

ちようど、見た目の年齢も同じくらいだ。

「殺るんなら、さっさと殺れ！　何故、俺を生かしておく!？」

「そうは言っても、生きたいと言ったのはお前だ」

「……？」

なんの話だ、という顔をしている。

が、沙龍は構わず続けた。

「少年Aよ、とりえあえず、名前を教えてください」

紫凜に押さえつけられて身動き一つ取れないのだが、少年は僅かに顔を背けて教えるもんかとその全身で拒否した。

「少年Aじゃ、色々不便だろう。お前も嫌だろうと思って聞いてるんだが」

「……」

「東洋人には発音が難しいとか？」

「……」

「本名教えちゃったら、結婚しなきゃいけない、とゆう家訓があるとか？」

「……」

「んんん、そうだな。じゃ、勝手につけよう。五郎座右衛門ってのはどうだ？」

「……………」

「じゃ、早速だが、五郎座右衛門」

「マルティエルだ……」

さすがに日本名は嫌なのか、吐き捨てるように言った。

既に沙龍のペースに嵌っている。

「マルちゃんか。よろしく、私は沙龍」

「変に略すな。それに、お前は、将神緑麗だろう!? 今更偽名を名乗るな!」

「別に偽名じゃないんだが、ま、いい。好きに呼べ」

「……」

「しかしな、マルちゃん。何故、私が緑麗だと分かった? そっちの世界ではブルマイドでも出回ってるのか? 宣材写真なんか撮った記憶はないんだがな」

「……」

「それとも、懸賞金でも掛かってんのか?」

「……」

「そもそも、なんで領土侵犯の危険を冒してまでここに来た?」

「……」

「ダメだこりや。徹底的に黙秘か」

沙龍が嘆息すると、マルティエルの背中を、脚線美で踏みつけている紫凜が頷く。

「ええ。一通りの尋問をしましたけどがなにも喋りません。薬物使用の許可を下され

ば、ある程度吐かせられますが」

「うーん……」

紫凜が言う薬物というものが、沙龍の知っているものと同じかどうかは分からないが、少なくとも、沙龍が知ってる『自白剤』は体と人格を破壊するものでしかない。

それを使うのは、やはり躊躇がある。

人道的観点から、というのもあるが、この少年の今後の使い道がまだ分からないので、使わないに越したことはないのだ。

「とりあえず、それはやめよう」

沙龍はドアを背に腕を組んだ。

「なあ、マルちゃん。私は別に西方神界の天使君たちに恨みを買った覚えはないんだが、せめて憎悪の目を向ける理由だけでも聞かせてくれるか。もし、それが間違った偏見や誤報に基くものだったら、お前の意地を張るエネルギー消費は全く無駄にしかならんだろう？」

「……」

「お前の同僚を殺したことを恨んでいるのだとしたら、それは私たちに非はないぞ」

「……なんだと？」

「誰かの命を奪おうとする者は、誰かに命を奪われる覚悟でなければならぬという、自然界の掟を習わなかったか？ 至極、簡単なルールだ。命ある者は須らく、例え食物連鎖のトップに立っていても、そのルールは適用される」

「……」

「喧嘩を売る以上、相手の力量を見極めろってことだ。それができないなら、最初から喧嘩を売るな」

「……」

「今日はこれで退散しよう。なにか話したくなったら、いつでも呼んでくれ。なにも話したくないなら、一生、ここで不自由ながら命だけは保障された生活を甘受するか、不屈の精神で脱獄をチャレンジすればいい。それぐらいの選択肢はお前にもある」

沙龍が独房を後にすると、紫凜が追いかけてきた。

「緑麗様、すぐにお茶を淹れますから、応接室へ」

「うん、有り難く頂戴する。しかし……、なんだろね、ありや？」

渡り廊下を歩きながら、世間話をした。

「え……？」

「作業員にしちや、素人くさ過ぎる。下町で小さい悪さをしていたガキが、金のために仕事を引き受けたって感じ」

「そう……ですわね。まだ場数を踏んでないのかもしれないかもかもしれません」

「それとも、そう思わせる罫かな？」

沙龍は独り言のように言っているが、紫凜は、試されているのだと気付いた。

さっきのことがあったので、沙龍は紫凜に興味を持ったようだ。

「西方神界は、確かに陰湿なやり方を好みますわ、緑麗様」

紫凜は、手の内を少しだけ見せることにした。

ただ、趣味で武道を習っているだけの秘書官——と思わせておいてもいいのだが、紫凜は前世の緑麗を見知っているので、今更、沙龍に対して余所余所しくするのもおかしい。

「向こうの世界のことを知ってるのか」

「ええ。少しは」

「陰湿、か。つまり、諜報担当のボスが陰湿なんだな？」

「そういうことですわ。女性ですから」

フツツと笑う紫凜だが、その笑いには『自分を含めて』という意味がある。

「だから、緑麗様が仰るように、『素人を装っている』という可能性は捨てきれませんわね。あの少年、自爆テロには持って来いのタイプですし」

「そうか……。しかし、元帥はあまりマルちゃんを重要視してないんだよな。私に尋問させるくらいだから」

「他のお仕事が忙しいだけじゃありません？」

「うーん、どうかな」

先に取り除くべき脅威——、と言っておきながら、九雷は軍属でもない自分に天使のマルティエルを尋問させたりしている。

なにか、そこが引つ掛かるのである。

紫凜にさんざんコーヒーとケーキ攻めにされ、気付けば夕方近くになっていた。

ついでに隣のオフィスを覗いてみると、木佐が黙々とパソコンのキーを打っている。

秘書官の曹昌が、ミスを咎められて泣きべそになっていた。

しかし、木佐のいつもの怒り方は、それほど怖いわけではない。どこまでも平坦な口調で、淡々と鋭利な言葉を浴びせられるだけだ。

怖いのは、文句なくハイパー・モードになった時である。

(ああ……、そんなに萎縮しちゃ、逆効果だったの……)

なんとなく中に入りそびれて、開け放ったままのドアから遠目に眺めている沙龍は、曹昌がびくびくしながら書類をひっくり返してしまったのを見て、苦笑した。同じ秘書官でも紫凜とは違い、こちらは万年事務仕事専門といった感じである。

忙しそうだから、邪魔はすまいと殊勝にも思った矢先、沙龍に気付いていたら

しい木佐が顔も上げずに言った。

「なんだ？ なにか用なのか？」

「……いや、なくはないんだけど、忙しそうだから帰る」

「なんでそんな変な遠慮するんだ。馨らしくない」

「って言っても、本当に忙しそうだから、出直すよ」

「僕は明日から帝都を留守にする。二、三日は戻ってこないから、話があるなら、今日しか聞かないぞ」

「あ、そうなの。でも、いいよ。別に急ぎでもないし」

「おかしいな、と沙龍は思った。

今日の木佐はやけに冷え冷えとしている。

いつもは、この冷淡な言葉の中にも親愛の情がちゃんとあるのだが、よっぽど仕事が決まっているのだろうか。

明日から鎮江楼に出向くために、帝都でやっておかなければならない急ぎの仕事を片付けているといった感じだが、余裕がなくて不機嫌になるということは、木佐に限っては無いはずである。それは沙龍が一番知っている。

沙龍が帰ろうとすると、今までこつちを見もしなかった木佐が、顔をしかめて視線をぶつけてきた。

「な、なに？」

「なら、邪魔しに来たのか？」

「……」

「重要な話なら聞くと言ってるだろう。なのに帰るってことは、重要な話じゃないってことだよな？ 邪魔しに来たってことだろ？」

沙龍は、さすがにムツとした。

「そこまで言っていないじゃん」

「大体、なんでこんな時間にここでフラフラしてるんだ。無職閑人なら閑人らしく、繁華街でも行けよ」

「……」

カチーン、ときた。

木佐が何故こんなに不機嫌なのかは分からないが、もはや、それを斟酌している段階ではない。

向こうは明らかに喧嘩を売っている。

「キサさんこそ、だったら、目障りで邪魔で鬱陶しいから、もう金輪際来るなつて言えばいいじゃん」

「言ったところで、聞かないだろう」

「……！」

沙龍は、ブツツリと切れた。

今まで、木佐と喧嘩したことは何度もある。

その度に、口では敵わないのを思い知ったはずなのだが、売り言葉に買い言葉で、ますますエスカレートして止まらない。

「なにそれ。なんで私がキサさんに八つ当たりされなきゃならないのか、全然分からないうんだけど」

「そりゃ、馬鹿だからだろ」

曹昌が、おろおろしながら二人を見守っている。

ここは、静かに隣の部屋にでも逃げるべきなのだが、ドアに沙龍が陣取っているせいで、それも叶わない。

「そんなの今更だもん」

「開き直るな。それに、そもそも喧嘩に冷静な議論を求めな」

喧々囂々——というよりは、わりと静かな応酬である。

感情的になって怒鳴った方が負け、というのは二人とも心得ているのだ。

しかし、結果は沙龍の撃沈である。口喧嘩で木佐に勝てた試しはないのだ。

（素手だって、最近じゃ、敵うかどうか……）

水雲宮への帰り道、カラスの鳴き声が聞こえてきそうな夕闇の中、沙龍はとぼとぼと歩いていった。

木佐のことを分かっているつもりで、実は分かっているんじゃないか、という一幕だったようにも思う。

沙龍は、もう歩くのが嫌になって、湖沿いの公園のベンチで一服していた。

フウ、と溜息が漏れる。

ついでに、諸行無常也——、と心の中で呟いた。

水雲宮の大きな浴槽に浸かって晩酌でもしたら、少しくらい気分が晴れるかと思ったら、そうでもなかった。

九雷はまだ帰ってきていない。

こういう時は、居ない方がいいのだ。鬱々とした状態を見せたくはない。

沙龍はさっさと寝てしまおうと思って、一旦、夜気を取り込むべく観音開きの窓を開いた。

そこで、両手は止まる。

「……よっ！」

ベランダの梁に座って、ニコニコと手を振っている男が居る。

あまりにも自然にそこに居たので、沙龍は静止状態で、この後どうすべきか、ゆっくりと考える時間があった。

「……………」

結局、そのまま、何事もなかったかのように窓を閉めた。

「おーい、そういう反応？」

ルシファアの声が、完全防弾にもなっている窓に遮断されて、小さくなった。

（ちよつと待て。なんだ、これは――）

沙龍は、まだ考えている。

自分の取るべき行動が分からないのだ。

ルシファアは、今はまだ、沙龍の中では敵ではない。

だから、咄嗟に戦闘態勢は取らなかった。いや、取れなかったのかもしれない。

い。

（えーと……、ここは私の家なんだから、追いつ返すのが普通だよな……）

なんとなくの結論が出たところで、聖魔剣を枕の下から抜き取り、背中の帯に差し込んだ。

「うわ、サミシー。全力でシカト？ 丸無視？」

ルシファアの声はまだ続いている。

もう一度窓を開けると、さつきと寸分違わぬ格好で彼はそこに居た。

「これはなんの冗談で？ ルシファー猊下」

「ん〜ん〜？ それも悪くないんだが、できたら、敬称略で呼んでくれねえか？」

「一世界のヒエラルキーのトップに立っておられる、初対面同然の殿方をファーストネームで呼ぶのは抵抗があるんですが」

「別に俺は構わねえよ？ 非公式訪問だし」

「あ、そう。じゃ、なにしに来た、ルシファー」

「あんだ、面白いなあ……」

感心したように言うルシファーは、今日も白いマントを羽織っている。

しかし、この前と違って略式に巻きつけているだけなので、マントの下は、だらしなく全部ボタンを外したシャツに黒い皮パンツというごく普通の格好であることが分かった。

「言っただろ？ 近々もう一回来るって」

「お付きの、役所勤め風の人は？」

「ああ、あいつはうるせーから置いてきた。女の子を訪ねるのにコブ付きなんて

「ご免だからな」

「女の子を訪ねたいなら、『もーちよい育った感じのお姐さん』が帝都の繁華街にいっぱい居ますが？」

「イヤン。根に持つてるのねッ？ ほら、あれはあく、元帥さんの手前、そうでも言っておかないと、カレ、怖いからあく」

オカマ口調で誤魔化すなど、どこで覚えた芸風なのだろう。

この見た目とノリだけなら、芸人として売り出せそうだ。

しかし、沙龍は一瞬たりとも気を抜いてはいない。抜けるような相手ではないのだ。

「押し売り、布教の類はお断りしている。求婚なら、ベタ惚れの婚約者が居るんで諦めてくれ。人攫いなら、全力で阻止する。呑みに来ただけなら、一杯だけ付き合おう」

固い表情でそう言うと、ルシファーがニヤリと笑った。

「ますます面白い。じゃ、酒の一杯でも貰おうかな」

沙龍は、なるべく背を見せないようにして、冷蔵庫まで缶ビールを取りに行っ

た。

これで帰ってくれるなら、安いものである。

「どうぞ」

三百五十ミリリットルの缶を豪快に一気飲みしたルシファーは、フーツと口元を拭う。

鼻筋の通った美形——には違いないのだが、工事現場に居てもおかしくはない風貌だ。

「さてと。んじや、さっきの口上に色々突っ込ませてもらおうか。まず、押し売るモノは別に持ってないんで、安心しろ。道教世界の真っ只中に来て布教活動する気もねえし、俺は女房持ちだ。重婚する気はねえ。それと、なんだっけ？ ああ、人攫いね。これは、あながち間違いでもないんだが、怖いカレシが居るのに、黙って攫う気はねえ。……とゆうことで、正解は『勧誘』だな」

「……勧誘？」

「姫さん、あんた、魔界見学ツアーに来る気はないか？」

「一泊二日の豪遊なら、考えないこともないですが」

「二日じゃちよつと短すぎるな。いつそ、俺に惚れちやっつけて着いて来るってのは？」

「……ハ、ハイ？」

「嫁さんにするのは今んところ無理だが、妾は何人居てもいい。千人斬りは疾うに達成しちまった昨今、一万人のチャレンジをしてる最中なんぞな」

「い、一万……!?!? それ、ちゃんと全員カバーし切れてるんですか、貴方は」
火雲宮の後宮にだって、そんなには居ないはずである。

一日一人相手したとしても、一年で三百六十五人しか相手にできないじゃないか、と沙龍は真面目に計算した。

「いや、中には、逃げたのも、寿命が尽きたのも居るし、俺が捨てたのも居る。トータルでってことだ」

「はあ、そうすか」

「俺との毎日は楽しいぜ？ 遊んで暮らせるだけのものは用意してやる」

「いえ、今でも充分遊んで暮らしてますから」

「じゃ、刺激的でスリリングってオプシオンも付けてやる」

「それも、なんとなく間に合ってます」

「んー、じゃあ、超イケてるナイスガイの俺様と、めくるめく愛欲を追求してみ
るってのは？」

「不倫は結構です」

ポンポンと進む会話は、端で聞いていれば弾んでいるように見えるかもしれな
い。

しかし、沙龍にとっては一瞬一瞬が真剣勝負だった。

「不倫じゃなきやいいのか？ あんたのためなら、女房と別れてもいいんだが
な」

「いや、そういう問題じゃなくて……」

「まあ、あのカレシが居ちや、他の男は目に入らねえか」

「そういうこと」

「じゃあ、あの元帥さんとセットでもいいぜ？」

「……は、はあ？」

「二人して遊びに来りやいい。俺ンところはな、基本的に移民フリーなんで、リ

トル・イタリーから、リトル・トーキョー、世界各国のミニチュア都市が全部揃ってる。当然、チャイナタウンもあるぜ。毎日、万国博覧会みたいなもんよ」
妾になれだの、観光に来いだの忙しいが、要するに、ルシファアの目的は沙龍を西方魔界に来させることのようなのだ。

「随分、熱心なお誘いですね。何故、そうまでして、大魔王様が一民間人を口説かなくちやならないんです？」

「そりや簡単だ。あんたの力が必要だからさ」

「私の——、ではなく、黄龍の、では？」

「同義語だろ？」

「微妙に違いますけどね。で、何故黄龍の力が必要なんです？」

「まあ、そこら辺は色々な」

「……」

あつさり目的を認めておきながら、何故かという部分は話さない。

ことと次第によつては、別に観光旅行に行く分には構わない、と沙龍は思ったのだが、手の内を隠している相手はやはり用心しなければならぬ。

「姫さん、あんた、なにか願いごとはないのか？ 俺に協力してくれんなら、その願いは俺が叶えてやるぜ」

「どうして神様や魔王様がたは皆同じこと言うんですかね……。仮にあったとしても、それを誰かに叶えてもらっちゃ、興奮めですよ」

「成程、神魔が一番敬遠したいタイプだな」

「そう言えば、一つ、聞きたいことはある」

「なんだい？」

「フォン・クリストフって……？」

最初の邂逅で、ルシファーが言った言葉である。

王家のはずだ、とも言った。

沙龍には、思い当たる人物が居る。

はつきりと名前や容貌を知っているわけではないが、東京の占い師はそれを

『西洋のお姫様』と言っていた。

「ああ、それか——」

「ひよっとして、私の前世の誰かのことですか」

「いい勘してるな。そうだ。何代前かは知らねえが、まだ欧州がドンパチやってた時代だな」

「欧州……」

呆然と、呟いた。

やはり、あの占い師は全くのインチキではなかったようだ。

「東欧の小さな国だったが、その皇家にな、病弱な赤ん坊が居たんだ。まだ生まれて間もないのに寿命が尽きそうだった。そこで、その両親が俺と『契約』をした。んで、俺は、赤ん坊の命を助ける代わりに、その子が潜在的に有している『力』を貰うことにしたってわけよ。契約が成立した証として、俺の名前の一部をやったんだが、その名が……」

「ルーシア・フォン・クリストフ……」

息を呑む想いで、その名を呟いた。

今まで忘れていたのに、急にフルネームで思い出したのだ。

ここに、繋がっているのか——、と、沙龍は愕然とした。

「覚えてるのか？」

「いや、名前を知ってるだけ」

「まあ、そうだよな。普通、前世のことなんて覚えちゃいない。しかしな、姫さん。重要なのはこつからだ。その時の契約はまだ果たされてない。つまり、あんたは俺に貸しがあるはずだぜ」

「な——？」

「俺もこんなせこい真似はしたくないんだが、これもマニュアルでね。かのメフィちゃんも言ってる。『私は悪魔ですから、自分の性質にしたがって行動します』（注1）——とな」

「……。『ヴェニス商人』をご存知ですか？」

「近松門左衛門だっけ？」

「シエークスパアですが……」

「ああ、そうとも言う」

「いや、言わないだろ……。ま、いいけどね……」

「で？ それがどうした？」

「『力』は契約通り、貴方にあげてもいい。どうぞ、この身体から切り取って

持って行って下さい。でも、その際に、契約書にない、他のものはなにひとつ渡さない——。この身体も、魂魄も、髪の毛の一本も」

「——」

呆れた、というよりは、ルシファーは素直に驚いた顔を見せた。

心なしか、笑っているようにも見える。

「成程。一筋縄じゃいきそうにないな。あんたみてえに強気な女は大好きなんだが——、残念だ」

そう言って、ルシファーはゆっくりと両手を挙げる。

そこで、笑みも完全に消えた。

「……?」

沙龍の疑問はすぐ解けた。

「俺も残念だ。ルシファー。お前が丸腰でないなら、この対魔用の弾丸を全弾撃ち込めるんだが」

いつの間にか、漆黒の空をバックに、九雷がルシファーの背中に銃をつきつけていた。

「……俺も馬鹿じゃないんでね。どうせ、この結界内じゃ、俺の力も大したことはない。お忍びで遊びに来ただけさ」

「歓迎しない、と言ったはずだが？」

「直々の説得は諦めるさ。俺もそうそう暇じゃない。だが——」
白いマントが、鮮やかに翻った。

「……ッ!？」

九雷は、その一瞬、仇敵の姿を見失う。

「黄龍を諦めたわけじゃない。なんとしてもご招待するぜ。我が万魔殿にな——」

——!

闇夜の中に、その姿が掻き消えた。

「……」

沙龍は、今度は、座り込まずに済んだ。

しかし、負った精神的ダメージはこの前より大きい気がする。

（私は、もしかして喧嘩を売ったことになるだろうか。己の力量も見極めずに

——)

そんな思いに駆られて、ルシファーの消えた虚空を凝視した。

「沙龍……？」

「あ、うん、大丈夫……」

「……という顔ではないがな」

その溜息交じりの言葉が、チクリと胸に刺さる。

さっきのやりとりを、九雷はどこから聞いていたのだろう。

もしかして、かなり厄介な部分から聞いていたのではないか——、と沙龍は思った。

「九雷、あの……、……」

自分がなにを言おうとしたのか分からずに、口を噤んだ。

しかし、九雷もなにも聞かない。

この沈黙が妙に居心地悪かった。

（もし——）

いつもの沙龍の仮定が体の中から湧き上がった。

何故、今それが出てくるのだろう。

（もし、私が、人の寿命以上に生きられる方法があると言ったら——）
しかし、問題はそこではない。

どうして、皆、忘れているのだろう。

甲斐馨が生き続ける限り、緑麗は決して復活しないということ——。

甲斐馨がそれを選択してしまったら、緑麗の記憶を持った魂魄は二度とあの美しい身体に還ることはできないのだということ——。

（仮初の恋人である私と、本物の恋人である緑麗と。貴方はどちらを選ぶのですか？）

その一言が、恐くて聞けない——。

（注1）ゲーテの『ファウスト』におけるメフィストフェレスのセリフ。

以下全文「私は悪魔ですから、自分の性質にしたがって行動します。けれども、もし私が人間だったら、かりに神の前で恥をかいても、むしろサタンの前では恥はかきたくないのですな」

翌日から、ルシファアのプレゼント攻撃が始まった。

これはどうしたものか、と沙龍は玄関ホールに佇んでいる。

「緑麗様、これはどうしましょう？」

開店祝いの花輪ほどもある薔薇の花束を抱えた悠花らしき——なにせ花束で顔は見えない——人物が、言った。

今朝から、次々とやって来る宅配業者の対応に追われているため、その声は疲れきっている。

「うゝゝゝむ………」

あの魔界の帝王が、こんな単純な贈り物攻勢で来るとは思わなかった。

一応、爆発物チェックから放射能漏れチェック、はたまた虫ピンチェックまで済ませてあるので、無害のはずだが、これらの品々を有り難く受け取る気はない。

「受け取り拒否ってのはできないのか？」

「業者を言い包めてあるようで、皆、逃げるように置いて帰るんです」
「やっとなしだけ、悠花の黒髪が薔薇の隙間に見えた。」

薔薇だけでなく、ドレスやケーキといった普通の女の子の好きそうな物から、麻雀牌や日本酒といった明らかに調べたであろう物まで、どんどん玄関ホールに溜まっていく。

「九雷様がお戻りになるまでに、処分致しましょうか？」

今度は、紗衣が巨大なテディベアを抱えてやって来た。

「それを今考えてたところ。どう思う？」

「そうですね……。他の男からの贈り物を見るのは、いい気分ではないと思いますが……」

朝から頻繁に宅配業者が出入りして、これだけ派手に従業員たちが右往左往しているのだから、既に、なかつたことにはできないだろう。

「証拠隠滅してもすぐバレそうだし、そうすると、逆に、変な気を回してあれこれ勘繰られちゃう気もするんだよね」

「緑麗様がこれらを迷惑がつているという素振りやを、少しだけ見せればいいかも
しれません」

「成程……。外交的にはそれでも大丈夫かな？」

沙龍は、控え目でいて実務に精通した紗衣を信用している。

それとなく、意見も聞いてみた。

「表向きの外交問題には成り得ないでしょう。向こうはお忍びですし、そもそも、このことが露見したら罪に問われるのは向こうですから」

「もしかして、元帥を挑発したいのかな……」

「それも、あると思いますね」

「でも、そんな分かりやすい挑発に乗る人かな……？」

「それは……」

と、紗衣が苦笑した。

かつて、零落した身を緑麗に拾われて水雲宮で働くようになった紗衣は、若かりし頃の九雷も知っている。

その紗衣の認識からすれば、九雷は挑発をする方であって、される方ではな

い。

「うーん、分かん。とりあえず、まだ増え続ける感じだから、できるだけ一箇所に固めて……」

と言ったところで、今度は健一の情けない声が聞こえた。

「緑麗様、今度はこんなのが」

観葉植物の巨大な鉢植えを引きずっている。

「あう、もう全部、万魔殿とやらに送り返したい気分……」

玄関ホールは、既に道を作らなければ通れないほど、ダンボールでごった返している。

忙しく動くスタッフの中で、一番の力持ちの飛龍は黙々と働いているが、それを一生懸命手伝おうとしている小龍は邪魔にしかなくていい。

小龍のふさふさの尾が、飛龍の顔面にかかるので、煩わしそうに払いのけていた。

「邪魔だ、どっか行ってろ——」

「ムキュー！」

哀れ、小龍の小さな体は吹き抜けのシャンデリアまで飛んで行ってしまった。

その夜は、特になにもなかった。

帰宅した九雷は、玄関ホールは何箇所かに固められているダンボール群を見ただが、そこに貼られていた『返品手続き中』と大きく書かれた札も同時に見たはずである。

二人の間に、ルシファアの話は出なかった。

そして、いつものように就床したのだが――。

沙龍は最上階の自分の寝室で、一人で寝た。

九雷は、階下の書斎で仕事をしていたようで、結局朝まで沙龍の寝室に現れることはなかった。

書斎にはソファもあるし、九雷が使っている個室にも当然、牀はあるので、問題は無いのだが、水雲宮に二人共居るのに別々に寝るということは今まではなかったのである。

それに、今まではどんなに忙しくても水雲宮には仕事は持ち込まなかったのに——、というのにも引つ掛かった。

避けられているのかもしれない——。

それとも、沙龍の妙な空気を感じて、自分から距離を取ったのかもしれない。妙、というのは、つまり、夢にまで見てしまうような気掛かりのことも含まれている。

(なんか、面白くないな……)

昼近くになっても沙龍は起きる気力もなく、そのまま微睡んでいた。

こういう時は、木佐を訪ねて愚痴愚痴言いたいものだが、こちらも喧嘩中である。

どの面下げて「仕事の邪魔しに来ましたよー」などと言えるだろう。

(あ、どうせ四神府には居ないか……)

木佐は、昨日から、また北の任地に行ってるはずである。

なら、奏欽や天真の所に遊びに行こうかとも思ったが、どうも今日は出掛ける気分ではない。

しかし、一日中こうして毛布と戯れていても、気分が晴れるわけではなく、昼過ぎになってやっと起き出した沙龍は、思いつきで紗衣を誘って、階下のジムで汗を流すことにした。

「私で、緑麗様のストレス発散のお相手が務まりますかどうか」

紗衣はなにも言わずとも、主人の状態をよく分かっている。

沙龍が最初に水雲宮に拉致された時も、実に行き届いた世話をしてくれた。

そんなことがあったので、最初は、九雷の部下かと思っていたのだが、後で聞いた話で、緑麗とは古い縁けいりふだと言う。

「昔は、けいりふ刑吏府（司法を担当する役所）に居ました。簡単に言うと、失敗をやらかして、追われたんです。緑麗様とはかなり珍しい場所でお会いしました」

「珍しい場所？」

その時は、いずれお話しします、と言って誤魔化されたが、その答えは今日聞けた。

「帝都にもスラムがあります。その一角の売春宿です」

「ほー……？？」

紗衣が身を落としたのか、それともそこに潜伏していただけなのかは分からないが、緑麗は客として来たわけでもあるまい。

それについても、紗衣が言いにくそうに説明してくれた。

「緑麗様は、付き添いでいらっしやってました。お連れの方に筆下ろしをさせようと思っていたようです」

「あー、なるほど……」

「そこで、私の素性に勘付いたのか、死んだことにしてやるから、その代わり、刑吏府の汚職の証拠をこっそり寄越せ、と」

「極悪人じゃないか」

沙龍は、我ながら苦笑するしかなかった。

さんざん周囲に脳天気と認識されている緑麗も、結構腹の底は黒々しているというの、沙龍には分かる。

「私にとっては、恩人ですから……」

懐かしく目を細める紗衣も、緑麗という存在があつて今ここに居るのだ、と思うと、沙龍はやはり幾ばくかの寂寥を覚えるのだった。

沙龍は疲れ果てて眠っている。

一日ぶりに寝室に現れた九雷は、それを見て少しホツとしたような顔をした。起きていたとしたら、なにかから話せばいいのか、迷うところだった。

ルシファーが現れる前後から、どこかお互いの空気にぎこちなさが漂っている。

確かに、自分は、あの西方魔界の盟主が近々アクションを起こすであろうことは予測していた。それを沙龍になにも伝えていなかった後ろめたさのようなものがある。

気安く沙龍に求婚していたルシファーに怒りも感じたが、それは愷気として片付けられるので、表層に出すべきではない。

天蓋付きのベッドの端に腰を下ろし、無防備に寝ている恋人を眺めた。丸くなって眠っている沙龍の体は、子供のように華奢だ。

保護欲というものがあるのなら、存分に注ぎたくなるような姿態だろう。

「……沙龍」

目を覚まさないのを承知で、呼びかけた。

（お前は、どうしたいんだ……？）

それは九雷のいつもの自問である。

沙龍がなにに笑い、なにに悲しむのか、自分は理解しているつもりでいる。しかし、それは推測できているという意味に過ぎない、とも自覚している。他者を理解するとは、結局そういうことだろう、と。

だから、沙龍がなにに憂い、なにを心配しているのか、九雷は推測はできて、その心を自分のものとしては理解できない。

九雷は尚、自問した。

（俺は、どうすればいい……？）

そんな風に思い詰めなければならぬほどの問題を、今、九雷は抱えている。ルシファーはなんととしても、沙龍を魔界へと攫っていくつもりだろう。当然、九雷はそれを阻止しなければならぬ。

しかし、今回ばかりは相手が悪すぎる。往年の泰山府君に匹敵する力を持つル

シフアーが本気を出せば、さすがに九雷の自信も揺らぐことになるだろう。

出来る限りの準備はしてきたが、こちらには獅子身中の虫が居る。

更に、天使軍まで出張ってきたとなれば、弱音の一つも吐きたくなるのだが

。

九雷の第一優先順位は変わらない。沙龍の命とその身の安全、である。

それを実行するにあたって、時には、本人や周りの不興を買うこともあるだろう。それぐらいは甘受できる。

では、そのことで、沙龍が離れていってしまったとしたら？ 自分はそれに耐えられるだろうか——？ 否。

かつて、緑麗が自分から離れていったことを、結局最後まで許せなかったから、今、沙龍を片時も傍から離すことなく溺愛しているのだ。

この想いは、緑麗には決して分かるまい。

「……」

沙龍の髪を撫でようとした九雷の手が一瞬止まって、サイドテーブルの上に置いてあった灰皿を掴むやいなや、窓の外に投げつけた。

この最上階の部屋の二方向の掃き出し窓は、沙龍がその開放感を好んで、開け放たれていることが多い。

「懲りない男だな……！」

その重いガラス製の灰皿が、ベランダの端に留まっていたカラスの羽根を掠り、数枚の羽根が飛び散った。

しかし、結局カラスは無傷で、またベランダに舞い降りてきたし、このカラスを殺したところでルシファアの本体は恐らく別の場所にある。

「デバガメしようと思ったのに、なんだよ、ヤンないの？」

カラスがルシファアの声で喋った。

これは、彼の分身の姿である。

「……。なにしに来た。もう諦める、と言ってなかったか？」

「説得は諦める、だろ？ 言葉が駄目なら、物で釣れっるのが俺んちの家訓だ」
九雷が次は聖魔剣を取り出したので、カラスは羽根を広げて『まあ、待て』という仕草をした。

「とりあえず、聞け。俺はなににも姫さんだけを招待するなんて、ケチなことは

言っていないぜ？ 別に四方将神全員お揃いだって構やしない。おっと、今は一人欠員だったっけ？ まあ、いい。費用は全てこっち持ちで、ご丁寧に魔界ツアーの全行程をセッティングもしてやるっつー、豪華セレブバージョンの観光旅行だ。悪い話じゃないと思うんだけどな」

「タダほど高い買い物はないと言うが？」

「今んところ、イーブンだと思うがね」

「しつこいな……」

「知ってんだろ？ 俺はしつこいぜ？ なにせ、どんなに靡きそうにない女でも、最低百年は口説いてみるっつーのが俺のモットーだ。まあ、三千年間一人の女を待ち続けた男には負けるけどな」

「……」

九雷は聖魔剣を起動したまま、ベランダに出た。カラスは動かない。

こんな小動物を殺したところでルシファー自身は痛くも痒くもないので、九雷も無駄なこととはしないはずだ、とルシファーは思っているのだろう。

しかし、九雷はこの煩い男を黙らせたいだけなのだ。

容赦なく、首を刎ねた。

カラスは短い悲鳴を上げたが、それきりで、すぐに静寂が戻る。

痛くも痒くもない——、とは言え、鋭い殺気を受けたダメージくらいは遠く離れていても感じる。

「……なんだなんだ、随分短気になったな、おい」

キヤンピングカーで寛ぐるシフアーは、足を投げ出して面白そうに笑った。

プレゼント攻撃三日目——。

このままだと水雲宮は倉庫になってしまおうし、本来の仕事が出来ないと嘆く従業員たちもそろそろ我慢の限界だ。

どこに潜伏しているのか分からないルシファーはともかくとして、運送会社を辿ればそこでストップさせることもできるだろう、と沙龍はとにかく出掛けることにした。

しかし、

「お出掛けですか？」

玄関ホールを抜けた先の門前で、荷物の爆発物チェックをしていた紗衣が、沙龍の姿を認めて声を掛けた。

しかし、沙龍は開け放したドアの手前で妙な顔をしたまま、止っている。

「緑麗様……？」

近寄ってみると、紗衣は難なくすり抜けたその空間を、沙龍は通過できないらしい。

「どういうこと？」

既に見当がついているのか、沙龍は頬に嫌悪感を走らせて唸った。

「まさか？」

紗衣は、手にしていたチェッカーを、別の一本に持ち替えて、玄関の扉の空間にかざした。

五行の氣の流れや、濃度を調べるためのものである。

紗衣のように、五行術にあまり長けていない者は、こういう機械に頼らなければならぬ。

ピーっという高い電子音が鳴った。

メーターを見ると、異常な数値を示している。

「……」

沙龍はその装置の読み方も知らなければ、紗衣が今なにを調べたのかも分かっていなかったが、体で理解していた。

「土行を阻む結界だね？」

確認するように聞くと、紗衣が神妙に頷いた。

沙龍は舌打ちしなくなった。

最初に水雲宮に拉致された時にかけられていたのと同じ結界が、今、この宮殿全体を覆っているのだ。

誰がやったのかといえ、九雷以外には居ない。沙龍も紗衣もそれを理解し、なんの目的でやったのかも分かる。

しかし――、

「……なんか、それって、どうなのよ」

苛立ちがこもった言葉である。

「一言くらい言ってくれてもよさそうなのに。いや、その前に、こんなことをする前に、他に、もつと……」

「緑麗様……、元帥閣下もきつとお考えが……」

「当たり前だ。考えもなしにこんなことやられたら、いくら私だって怒る。そうじゃなくて、私が言いたいのは！」

「お気持ちは分かりますが、今は……」

宥めようとする紗衣を両手で制し、それ以上は聞かない、と意思表示した。

「出掛けるのやめ。どうせ、私はこの結界からは出られない。上でお茶する。悠花、コーヒー」

何事か、と様子を見にきていた悠花にそう言っつて、沙龍は最上階へと戻った。しかし、従業員二人に見せた感情は見せかけである。

沙龍は、怒りよりも、なんだか妙に悲しい気分になったのだ。

悠花は、本来の仕事である『緑麗様の着付けとヘアメイク』が出来ないと文句を言っつて、小龍のたてがみを細かく三つ編みにしてストレス発散をしていた。

この少女は、人のお洒落を手伝うことが生きがいのようなだ。

普段も、沙龍が『軽装でいい』と言っつているのに、華美に飾りつけようとする。

「女性が美しく装うのは、殿方に媚を売るためではありません、緑麗様。自信を

つけ、日々を快適に過ごすためです」

「い、いや……。快適どころか、この重装備は拷問なんだけど……」

というのが、二人の間でよく交わされる会話である。

レゲエダンサーのようになってしまった小龍は、特に迷惑がるようなこともなく、今日も玄関ホールで邪魔にしなければならない手伝いをしている。

そこに、姿を現した天真は、沙龍が呼んだのだろうか。

馴染みの従業員たちになにこやかに挨拶をして、天真はエレベーターへと向かう。当然、水雲宮を包む結界に気付いただろうし、玄関ホールに積み上げられているダンボール群も見て見ぬ振りをした。

「ドクター、これなんとかして」

寝巻きにガウンを羽織っただけの沙龍は第一声、そう言った。

頼るべき人はもう天真しか居ない、という顔だ。

「あゝ、とりあえず、お茶にしましょう。お茶菓子持ってきましたから」と、甘い香りをさせた紙袋を見せる。

「呑気にお茶飲んでる場合じゃないよ」

「まあ、そう言わずに」

水雲宮に常設してある天真用のテーブルが用意され、英国風ティータイムの風景が出来上がる頃には沙龍もだいぶ落ち着いていた。

「九雷とは会ってないんですか？」

「三日くらい見てないよ。私と顔合わせるのが嫌なんじゃない？」

「……」

天真が視線を泳がせる。

「今、ただの痴話喧嘩か、やれやれ、って顔したね？」

「違うんですか？」

「違う！ いや……、半分くらいは正解かもしれないけど、違う！」

「どっちなんです……。まあ、要するに、この水雲宮から一步も出れなくて困ってる、と」

「そう」

「で、勝手にこんなことをした九雷に怒ってる、と」

「そう」

「でも、喧嘩の末の嫌がらせというわけでもないんでしょう？　大体、九雷はなんでこんなことを？」

「……他の男と接触させたくないんでしょう」

「成程……」

と、天真はそれだけで納得した。

沙龍はルシファアーのことまで説明するつもりはなかったのでそう言ったのだが、玄関ホールのあれを見れば、天真でなくとも『他の男の影』を察することはできる。

しかし、その男も大したもんだ、と天真は思った。

こそこそやるならまだしも、堂々と、婚約者が居る女性に派手に贈り物を続けるというのは、その婚約者の方を挑発しているとか考えられない。

「ドクター、前にも同じ結界を解除してくれたじゃん？　できるでしょ？」

沙龍が天真を呼んだ理由はそれである。

しかし、天真は溜息交じりに首を横に振った。

「残念ながら、私が勝手に解除するわけにもいきませんね」

「なんで？ 私は不条理にも監禁されてんのよ？」

「確かに、褒められた行為じゃありませんが……。とにかく、一度九雷と話してみなさい。こういうのは、他人が介入するとロクなことになりませんよ」

「だって、避けられてんだもん」

「もしかして、避けざるを得ないような原因を、貴女も一緒に作ってるのでは？」

「ドクター、どっちの味方なのさ」

「勿論、私は全世界の女性の味方です」

キリツと眼鏡を光らせて天真は断言するが、この件に関してはどうしても承諾してくれない。

天真を説得するのは諦めたが、沙龍はダージリンを飲みながら、他の手立てを考え始めている。

今、言われたように、確かに一度、直接対決をしなければならぬだろう。

断りも無く結界を張って、自分を水雲宮に閉じ込めたことは、この際、一万歩譲って許すとしても、その後のケアがなにもないというのは、解せない。

雲行きが怪しいからこそ閉じ込めたわけで、そのせいで多忙を極めているのだらうとも推測できるが、最愛の恋人に電話の一本も寄越さないというのは、今までの九雷ではない。

（私に糾弾されるのを恐れているとでも……？ いや、そんな繊細な人じゃない。多分、顔色一つ変えずに、必要悪だとかなんとか言うに決まってる）

沙龍はそう思った。

「せっかく広い宮殿なんですし。前と違って、自由に探検もできるでしょう？ 結構知らない施設もまだ残ってるかもしれないませんかよ？」

天真は、暗に、大人しくしている、と言っているようだ。

「まあ、いつかは隅々まで探検しようと思っただけどさ……」

水雲宮の何階になにがあるのか、沙龍はまだ把握していない。

それほど、総敷地面積は広いのだ。

「諦めるしかないの？ こうやって『護られること』に慣れて、なにかもあの人に任せて……。そんなの、私、ただの人形じゃん」

「……」

沙龍の憤りは分からないではない。

世の中、それを喜んで享受する女性も居るが、沙龍にはストレスにしかならぬのだ。

「どうして、あの人は私になにも言ってくれないんだ」

「口下手なんですよ」

天真は苦笑しながら言った。

「嘘だよ。時として凄く饒舌なのに」

天真を見送った後、改めて、いつもとは違う風景を見渡した。

吹き抜けの洒落た造りの玄関ホールなのに、今はどう見たって『搬入現場』だ。

「……あれ？」

沙龍は、雑多に積み上げられたダンボールの箱の一つに、目を止めた。

視線を横にずらすと、悠花にこき使われている飛龍が居る。

龍族のプリンスとはいえ、水雲宮に居る限り、飛龍は力仕事専門のスタッフ

だ。本人もそれを淡々とやっている。ただし、これが悠花でなく健一なら、飛龍も素直に言うことは聞くまい。

「おーい、悠花、飛龍」

「ハイ、なんでしよう？」

家事用の襷をかけた悠花が小走りにやって来る。

飛龍ものそのそと後に続いた。

「この箱だけ、伝票が剥がされてるのはどういうこと？」

沙龍は『銘酒百選』と印字されているダンボールを指した。

「あら、ホントですね。気付きませんでした」

「……」

飛龍はいつもの無表情で黙っていたが、一瞬だけ瞳が動いた。

それに気付いた沙龍が問い質すと、なんのことはない。

昨日の深夜、この倉庫になってしまった玄関ホールで九雷と一悶着があったと

いう。飛龍は水雲宮の見回り（自称）をしていたらしい。

以下、その時の会話である。

『こんな遅くになにをしている。こそ泥か、お前は』

そう言ったのは飛龍である。

九雷は、呆れた顔をした。

『居候の身でよくそういうことが言えるな。この屋敷の所有者は沙龍だが、管理権限はまだ俺にもある』

『なにをしていた？』

『お前に言っても分からないだろう』

『なんだと!？』

その後になにがあったのかは、推して知るべし、である。

飛龍の前髪の一部が焦げてるのは、九雷の雷鳴を食らったからに違いない。

「敵わないんだから、喧嘩売るなよ……」

沙龍は嘆息した。

「カンリケンゲンとやらがあればなにをしてもいいのか。あいつは緑麗に内緒で

この荷物を漁ってたんだぞ」

「いや、だからね……、あの人は多分、泥棒してたわけじゃなくて……」
何故自分が弁解しなければならぬのか。

沙龍はもう面倒臭くなったので、またしても宅配業者がやって来た方に指を差した。

「ホラ、飛龍。お仕事だよ。悠花に力仕事させんな」

「……ム」

飛龍は表情こそ不機嫌だったが、ちゃんと言われた通りに巨大な荷物を受け取っていた。

「フウ……」

剥がされた伝票の跡を見ながら、本日、何百回かめの溜息をつく。

ルシファーが足のつくようなことをするとも思えないが、九雷にはその伝票からなにか手がかりらしきものが掴めるのだろうか。

「キュワ？」

そのダンボールの上に舞い降りてきた小龍は、沙龍がじっとしているのを不思議

議に思っで見上げてきた。

「いや、なんでもないよ。大丈夫……」

そう言っ、ふと顔をあげる。

こんな時だし、木佐と仲直りしよう、と思っただ。

木佐が鎮江楼に行くと言っ、た日から、既に三日経っ、いるのだから、そろそろ帝都に戻っ、て来っ、てもおかしくない。

「小龍、お使、頼まれ、くれるか？」

「うつきゅう！」

『お使、』という言葉に反応し、た小龍は、いそいそと自分の肩にかけて、いる筒状のものを小さな両手で示し、た。これは、小龍が常時身に着けて、いるもので、メモ書き程度の手紙なら入れる、ことができる。

沙龍は、小龍にお使、いを頼む、ということはほとんどない。この小さな龍を仕事に使っ、ているのは九雷の方である。

だから、沙龍が、小龍の癖を知らなかつ、たとしてもしようがない。

「キサさんのところだよ。分かる？」

「キュウ！」

小龍は、人語を半分くらいなら理解している。

しかし、あくまでも半分であって、全部は理解できていない。

反応すべき言葉が繰り返されると、混乱してしまうのだ。

九雷はそれを心得ているので、小龍に使いを頼む時は、一度に一回、余計な言葉は言わないし、念を押したりすることもない。

「よしよし。じゃあ、これをお願い」

走り書きしたメモを小さな筒に入れる。

「配達場所を間違えるんじゃないぞ？ どこに行くか、ちゃんと分かってるな？」

「ウキユ」

「元帥のところじゃないからね？」

いつもは九雷の仕事をしているので、間違って総司令部に行ってしまうんじゃないかと思ひ、わざわざ言ったのである。

しかし、それが却って小龍を混乱させてしまった。

「きゅ……、キュウ……？」

「んじゃ、行っておいで」

「きゅー……」

しばらく、小龍の軌跡を見守った。

たった一言でいいのに。それがあれば、この状況にだって文句を言いつつ従うのに——、と沙龍は思うのだ。

この小さなスレ違いが、やがて大きな亀裂になってしまったら、どうするつもりだろう。

そして、愛だけを頼りにここに居る自分は、一体、どうすればいいんだろう。玄関ホールで、小龍を見送りながら佇んでいると、吹き抜けの上の方から健一の声がした。

「緑麗様、小籠包作ったんですが、試食して頂けますか？」

「今行く！」

ま、それは明日考えよう——。

天真が、水雲宮を辞した足で帝都の天界軍総司令部に出向いたことを、沙龍は知らない。

また、それを悟らせるような天真でもなかった。

「別に、仕事の邪魔をする気も、お説教する気も、お節介焼く気もないんですがね」

「じゃあ、なにしに来た」

九雷は、言外に帰れと言っているのだが、天真は意にも介さない。

「まあ、本来の仕事をしに来ただけですよ」

「仕事……？」

「ええ、私の患者さんなんですけどね。『コミュニケーション不足病』を患っているんで、どうにかしてあげようと」

九雷は、その言葉で、天真が沙龍と接触があつたのが分かる。

そして、自分にないを言いたいのかも。

「その前にな、天真」

「はい？」

「明らかに勝ち目はなくても、気を引くために贈った物が、捨てられていなければ、少しでも脈ありだと思えるか？」

九雷は大真面目に言っているのだ。ルシファアの行動を、彼自身も考えあぐねている。

天真はヤレヤレという顔をした。

「非常に貴方らしい言い方ですが、内容はどうも貴方らしからぬ弱音に聞こえますね」

「弱音……？」

「そうですね？ 恋人が、他の男に心変わりなどするはずがないという自信があるなら、そんな言葉は出ないと思うんですが」

「そういう意味で聞いてるんじゃないんだが……。ただの世間話だ。そういう馬鹿な男が居る。しかし、馬鹿だからこそ、俺にはその思考が理解できない」

「じゃあ、彼女の気を引くためではなく、貴方の気を引くためなんじゃないですか？」

「……なんのためにだ？」

ルシファーが九雷を面白半分に挑発しているのは確かだろう。

しかし、そうやって自分に揺さぶりをかけて、どうしようというのか。

ルシファーの本当の目的は『黄龍』のはずだ。

「なにか、仕事上の深刻な話ですか？ だったら、あんまり関わりたくないんですけどね」

それは、一般市民の感覚としては、当然だろう。

天真はただの開業医なのだ。

「その『深刻な話』のせいで、俺は不眠不休だ」

「まあ、貴方も色々忙しいのは分かるんですが……」

天真が言いかけたところへ、九雷の頭上に小龍がふわふわと降りてきた。

「キュル〜」

今日は仕事は頼んでいなかったはずだが、と九雷は思ったが、小龍が差し出す書簡入れを機械的に受け取った。

中身を取り出すと、チラシを破いたような紙に、二、三行の文字があった。

日本語で書かれているが、この程度なら九雷にも読める。日本語の読み書きはわりと最近、マスターしたのだ。

自分への悪辣な言葉が書かれていたのだが、思わず笑みが出た。

「小龍、届ける先を間違えたんじゃないのか？」

「キュ……？」

『キサさんへ。陰険魔術師に呪いの塔に閉じ込められてしまいました。茶碗蒸し持って助けに来て。馨』

メモにはそう書かれてある。

明らかに、沙龍は怒っているようだ。

九雷は一息置いてから、幼馴染みに振り返った。

「天真、もし、面倒事に進んで巻き込まれたいと言うのなら、一つ頼みたいことがある」

「人の話聞いてませんか？ 関わりたくない、と今言ったでしょう」

しかし、九雷は、最初から天真に諾否の選択を与えていない。

「行く先は天空山だ、と言つてもか？」

「……」

逃げようとした天真の背中が止まった。

一般市民が立ち入ることのできない天空山は、へきかげんくん碧霞元君が管理している。

つまり、碧霞元君があゝの山を下りない限り、一般市民である天真が、彼女に会える機会は滅多にないということだ。

「確かに、行かざるを得ませんね……」

天真は、九雷の会心の笑みを忌々しそうに見つめた。

天空山というのは、この山の唯一の住人がそう呼称しているだけであって、元々は泰山という名で知られている。天界屈指の霊峰である。

帝都のやや北に位置するこの聖山は五行の気脈の出発点になっており、一般市民の立ち入りは固く禁じられていた。

最低でも一行を極めた者でないと、この山に渦巻く高濃度の五行の奔流には太刀打ちできないからである。失神したり、最悪の場合、ショック死する恐れもある。

しかし、天空山自体は常に晴れ渡った空の中にあり、風景としては、それほど厳かなイメージはない。霞もなければ、尖った峰もない、ごく普通の山である。

見た目は一番当てにならない——というのは、この山の管理者を見ても分かる。

「おっかしーなー」

山頂に建つ黄花洞のテラスで双眼鏡を覗き込むのは、名を碧霞元君という女性である。

この洞府の主であり、現在、この聖山を管理している責任者だ。

十代半ばにしか見えない華奢な少女だが、実際には、同じ年頃に見える奏欽などよりもずっと年上だった。五行の流れの中心ともいえる聖域に居るせいで、ほとんど年を取らないのだ。

その特典——とは一概には言えないが——のために、この役職は多くの者から羨ましがられるのだが、当の本人はそれほどこの利を享受していない。転属願いすら出しているのだが、他に能力に見合う者が居ないという理由で、上層部から慰留されているというのが現状だった。

「確かに、感じたんだけどな——」

もう一度双眼鏡を覗いたが、五行の乱れた兆しはない。

まるで、さつきまで確かにあったはずの水溜りの水が、真夏の太陽に照らされて蒸発してしまったかのようなのだ。

ここ数日、何度かこういうことがあった。

「ま、こういうこともあるでしょ。ということ、折角来てくれたのになんだけど、特に見当たらないんで」

碧霞元君が言うと、使者の男はあっさり引き下がった。

「そうですか。泰山から見えないのでしたら……」

「天空山」

碧霞元君が言い直した。

彼女自身は、その名を持つ父を嫌い、そう呼んでいるのだ。

しかし、いつの世も、年老いた父親より、若々しい娘——少なくとも見た目は——の方に世間の人気は集まるもので、彼女がそう呼ぶせいでこの呼称もだいぶ浸透しつつある。

「失礼。天空山から見えないということは、なにも起こってはいないということですね」

「もしくは、私の技量の問題かもしれないけど」

「ご謙遜を」

「いや、こればかりは謙遜で言ってるじゃなくて。上には上が居るしねえ」

使者は見た目は三十代か四十代くらいのも、中背の男だった。名を榮吉えいきちという。普段は、泰山府の薄暗い事務所で書類に判子を押すだけの仕事をしている。いわゆる、中間管理職だ。五行の属性を持つ天界住民ではないので、彼にとってこの山は、ただの高山である。

榮吉にとって碧霞元君は自分の上司の娘ということになるが、父娘関係が断絶しているせいで、会ったのは今日が初めてだった。

「例えば、その『上』が居るとして。どなたなら、可能です？ 貴女の目を盗んで、この天界の結界に穴を開けることができる方は」

そんなことは不可能だ、と泰山府君は言っていた。

親馬鹿で言うわけではなく、五行の『氣』の流れを見る眼は天界随一で、千里眼だけなら天帝をも凌ぐ、と誉めちぎっていた。

加えてこの泰山は、五行の始まりの場所として、支流とも言うべきあらゆる場所を、全て見通せる。

つまり、『四行マイスター』たる碧霞元君がなにも変化が見えないと言うなら、なにも問題はないということなのだ。

碧霞元君は少し考える風を見せた。

「そういうの、言っちゃっていいのかな」

独り言である。

「というか、それを聞きに来たとか？」

「私はただの使いですから」

探るような物言いの碧霞元君に対して、栄吉はさらりと言った。

「あのオヤジ、今度は誰を冥府に引きずり込もうってか」

「ですから、私に聞かれても」

事実、栄吉は詳細は聞いていない。

ただ、泰山府君から、泰山もとい天空山に行つて、碧霞元君からなにか情報を聞き出してきてくれと頼まれただけなのである。

なにやらキナ臭い出来事が起こりつつあるのは上司の様子から分かったが、彼自身は帝都に住みながら、そこで起こっていることとは無縁の生活をしている。

泰山府というのは、性質的にも、組織的にも、外部の影響というものを全く受け付けられないので、その職員たちも世間ずれした者が多い。

「ま、いいか。私には関係ないし」

「はあ……」

この変わり身の早さは、紛れもなく親子だ、と栄吉は思った。

泰山府君自身も一ヶ月実験室にこもって、自称『今世紀最大の発明品』に夢中になっていたかと思えば、それが完成しないうちに、隣の倉庫の大掃除を始めた
りするのだ。

平の職員は、大ボスたる泰山府君の顔も知らないという者が多いが、中間管理職になると嫌でも実態が見えてくる。

「私からは『今日も晴れだった』という報告で、よろしく」

「はい、お手数をおかけしました。では、私はこれで失礼致します」

栄吉が帰ろうとした時、ワサツとした白く柔らかいものが目の前を塞いだ。

霊獣のナンカイ・ホークス君参考である。

その人相というか、獣相の悪さは、一度見たら忘れられないだろう。

栄吉も、最初にこの霊獣に黄花洞を案内された時は、怖いもの見たさでまじまじと見つめてしまったほどである。なによりも、目つきが滑稽なくらいに悪いの

だ。

「使者殿、お疲れでやんした。お帰りはもう手配済みで？ 車、回しましょうか？ いえね、回すつつつたつて、なにも傘の上で回すわけじゃありませんぜ？」

目つきの悪さに二百七十度くらい反比例したようなこの態度である。

彼としては、気の利いたギャグを言ってるつもりのようなようだが、主人の碧霞元君にはいつも「面白くないよ」と素っ気無く言われる。

「あ、お嬢。もう一人、お客さんがお見えになってますぜ。リビングの方にご案内しときやしたんで」

「リビング……？」

仕事で来た者はまず待合室に通すはずなのに、生活の場とも言える部屋に通すということは、それなりに親しい者ということである。

誰だろう、と碧霞元君は思った。

「なんだろう。今日は千客万来だなく」

天真は、少々緊張していた。

久ぶりに会うので、身なりにはかなり気を使っただけだが、碧霞元君はたとえ天真が丸刈りにしてきたとしても大した感想は言わないだろう。

下手すると、人の容姿などほとんど見てないような女性だ。

五行の奔流の中で生きている碧霞元君は、あまり視覚というものを使っていない。

だから、自分の身なりにもほとんど気を使わず、天界住民の多くの女性が髪を伸ばし、綺麗に結わえたりしているのに、碧霞元君は風呂場で自分の髪をざくざくと切ったりする。

着やすさのみを追求した着物は、胴着に袴というスタイルで落ち着いていた。

「うわー、メズラシー」

会うなり、碧霞元君はそう言った。

星の数ほど居る天真の『想い人』の中で、彼女は少し特別な存在になっている。

それを、誰に言ったこともないはずだが、さすがに九雷は気付いていたらしい。

「お久しぶりです。お元気そうですね」

天真がもし東宮を辞退しなければ、結婚するはずだった二人である。遙か昔、碧霞元君は東宮妃候補だったのだ。

「……もしかして、貴方のせい？」

「なんのことです？」

「いや、ここんところ、五行の巡りが微妙つつーか、変な感じがしてるんだよね」
ずっと立って待っていたであろう天真に、座るように促す。

天真は、碧霞元君が対面に座るのを待って、黒塗りの椅子に座った。

「……？ だとしても、五行の力を放棄した私には、気脈を乱すことなどできませんが？」

「んーんー。まあ、いつか。で？ いい知らせ？ 悪い知らせ？」
瑠璃色の大きな瞳を一ミリも動かさずに、そう聞く。

長窓から差し込む陽光が、碧霞元君の片頬を光らせていた。

「相変わらずですね。懐かしがって会いに来たとは思ってくれないますか？」

「何時の世も、男は心の恋人を追いかけ、女は現実を生きてるもんっすよ」

あっけらかんと言いつつ放つのだが、碧霞元君は、天真にとっての『心の恋人』が自分であるとは思っていない。

東宮妃候補であったのは数千年も前の話だし、そもそも『候補』であって、正式な『東宮妃』ではない。

「まあ、あまりいい知らせとは言えないので、心苦しいのですが……。実は、私も寝耳に水なんですよ」

天真は、九雷から聞いてきた話をかいつまんで説明した。

碧霞元君はそれを黙って聞いていたが、驚くような素振りは見せなかった。

「確かに、辻褄は合うよね。東王夫がその魔王様を匿ってるんだとしたら、西域付近に一瞬だけ開いた大穴も説明がつく」

この天空山から遙か遠く離れた西域の砂漠で、五行の荒技を行った者が居たのを、碧霞元君は確かに感じたのだ。

「でもさ、天真くん」

ズズつとウーロン茶を飲む碧霞元君は、元からそういう顔なのだが、興味はこれっぽっちもない、という感じだ。

「それを私が証言したとして、だよ？ 東王夫を逮捕できたとして、だよ？ それがなんの解決になるの？」

天真もそう聞かれると苦しい。

「売国奴を放置しとくわけにもいかないでしょう？」

「それは、天真くんの意見じゃないでしょ。大方、あの怖い人にでも言われて来たんじゃないの？」

「……」

天真は黙した。

碧霞元君の言うことはいつも物事の真髓をついている。

それは、彼女が自分の理路だけで物を言ってるわけではなく、この東方天界に流れる五行に身を任せているからに他ならない。

世間知らずの若き東宮にとって、こういった碧霞元君の言動は衝撃でもあった。

だから、天真にとっての『特別』になったのだろう。

「なるようにしかならないよ。今のところ、存亡の危機ってわけでもなさそうだし」

「じゃあ、火雲宮には来てくれないんですか？」

「行かないよ、面倒臭い」

「そう言うだろうな、とは思ってましたが……」

しかし、九雷に頼まれたことを反故にするわけにもいかない。

天真はなんとか妥協案を見つけようとした。

一つには、まず、碧霞元君を天空山から下山させて、表舞台に引っ張り出さなければならぬ。

「そういえば、もうすぐ蟠桃会ですね」

と、話題を変える振りをする。

「貴女が知ってる頃より、あそこも随分桃林が増えましたよ。今年是一緒に見に行きませんか？」

「私、いつも招待されてないもん」

天空山を留守にするわけにはいかないの、西王母も招待状を出すのを遠慮しているのだろう。

碧霞元君自身も、それを承知している。

「二、三日なら大丈夫でしょう？ あ、そうそう。貴女に会わせたい人も居るんですよ」

「東方軍大将なら、この前会ったよ」

「……？ いえ、その人じゃありませんが……」

天真は、何故いきなりそこに東方軍大将の名前が出てきたのか分からない。

碧霞元君は、普段は滅多に下山しないのだが、一年ほど前に東方軍大将が代替わりしたというので、会いに行ったことがあった。

それは、碧霞元君の仕事の一つである。

東方天界の五行の中心地に居る以上、最低でも四方将神と、四方軍の大將と、四海龍王とは面識がなければならぬのだ。

とすれば、まだ会ったことのない木佐小次郎にも会わなくてはならないのだが、碧霞元君の理屈では、今の木佐はかつての真武君と同一人物——、となるの

で会わなくてもよい、となる。

「じゃあ、誰に会わせたいって？」

「緑麗ですよ」

「ああ、『甲斐馨』か……」

何故か、碧霞元君はその呼称を使った。

碧霞元君は、かつての緑麗とは確かに一度会ったことがあるが、それだけである。特に親しいわけでもない。

「なんで今更緑麗に？」

「いえ、貴女にちよつと似てるんですよ。どこが、というわけでもないんですが。なんとなく——かな」

顔が似てるわけではない。

声も全く違う。

二人に共通するのは、せいぜい小学生並みの身長くらいである。

しかし、天真は最初に沙龍に会った時から、なんとなくそう思い続けていた。

「ふーん……」

強いて言うなら、こういう、ちよつとした雰囲気が似ている——という程度のものだ。

「少しは元婚約者の我俣を聞いてくれても、罰は当たりませんよ？」

「元婚約者候補、ね。まあ、天真くんが緑麗のことを気遣うのは分かるんだけどさ……」

碧霞元君は、緑麗が叛乱を起こした原因と顛末を知っている。

天真が緑麗の処刑に立ち会った件も知っているし、それが、彼の傷になっただであらうことに対しても、少なからず心配はしていた。

「今はまだ時期じゃないんだよな……」

碧霞元君は、独り言のように言った。

「時期……？」

「うん。まあ、それはいいとして。天真くんがどうしてもって言うんなら、蟠桃会に行くのは構わないよ。中日なら余計なゴミと鉢合わせることもないと思うし」

余計なゴミ——というのは、父親の泰山府君のことである。

この親子はもう数千年顔を合わせていないはずで、その仲の悪さは有名なのである。

反抗期の娘が父親に反発しているだけ、という優しい見方をすることもできるが、実際は、そんな微笑ましい話ではない。

『仲が悪い』という言葉では説明できない決定的な対立が、この父娘にはあるのだ。

「じゃあ、蟠桃会が近くなったら、迎えに来ます」

天真はそう約束して帰っていった。

水雲宮の応接室に通された之信ししんは、恐縮して腰を降ろそうとしないが、二度も椅子を勧める気になれないので沙龍は放っておいた。

しかし、彼の告げた用件については憤然と聞き返した。

「……どうということ？」

軍服を着込んだ之信とは対照的に、沙龍はガウンを羽織っただけの姿でソファに足を投げ出している。

昔はこういうことが日常だった。

『蒼龍会』に居た頃は、沙龍のこういった態度を咎める者は居なかったし、また、できる者も居なかった。

董天だけは元教官という立場でたまには諫言したが、その董天も、普段の生活態度については全く口出ししなかった。

「ですから、本日から自分が緑麗様の護衛を勤めさせて頂きますので」

「そんなこと、頼んでないよ。というか、してくれなくていい」

「上官の命令ですので」

「あんたの上官って一人しか居ないじゃん」

「御意」

つまり、九雷からの命令ということである。

このいかにも堅物で忠義者な部下に、何故そういう命令を下したのかは、分かり過ぎるほど分かるのだが、沙龍は徹底的に面白くなかった。

「ブン……。先の武闘大会の優勝者を護衛だと？」

「恐れながら、緑麗様の力量の問題ではありません。司令部の決定です」

「というか、総司令官の個人的な判断だろうが」

「御意」

公私混同と咎めたところで、そのどこが悪いと言われるのは賭けてもいい。

「仮に百万歩譲って護衛が必要だとしても、ここには飛龍も居る。仮想敵が現れる恐れがあるというのは理解しているが、国家権力の庇護を受ける謂われはな

い」

「恐れながら、自分はそのような議論が出来る立場に居ませんので」

「じゃあ、議論の出来るヤツを呼んで来い。そのふざけた命令を下した上官はどこに居る？」

「恐れながら、軍機ですのでお答えできません」

「本部じゃないのか？」

「お答えできません」

ブチツ——という効果音と共に、沙龍は飲んでいたコーヒーのカップを壁に投げ付けたい衝動をなんとか抑えた。

これでは、あまりにも一方的過ぎる。

九雷は一体どういうつもりなのか。

直接対決したくとも、その前に事態がどんどんこじれていくだけではないか。

「私に拒否権はないのか？」

「ありません。緑麗様にとっては不本意でありましょうが、ご了承頂くしかありません」

「それで？ 二十四時間張り付くってか？ すんげーありがた迷惑な話なんだけ

ど」

「自分のことはお気になさらずに。居ないものだと思って、緑麗様は普段通りにお過ごし下さい」

「お過ごしできるか。顔見知りには過ぎない赤の他人が四六時中側に居て、誰が寛げるって言うんだ。冗談じゃない」

「……」

之信も、沙龍の凄みの効いた形相を見ない振りはできない。

早々に切り札を出した。

「閣下から、これを預かっております」

之信が差し出した紙袋の中には、なにか、機嫌を取るものでも入っているに違いない。

沙龍が納得しなかったら食い物で宥めておけ、とでも言われてきたのだろう。

「なんで——」

沙龍は思わず立ち上がって、その袋の中身を凝視した。

かくして、渋々受け取った紙の箱の中には、確かに『食い物』が入っていた。

しかし、これは、どう見たって九雷に用意できるはずのないものである。

「確かに、キサさんには茶碗蒸しを持ってこいと言ったけど……。……。!?」

咄嗟に小龍の寢床になっているバスケットを見たが、当然、本人は居ない。

そういえば、昨日、お使いを頼んでから姿を見ていない。

（なんてこった——）

やはり届ける先を間違えたのだ。

しかも、一番読まれたくない人の所に、である。

（それで……。？ キサさんに作らせたってわけ……。？）

それを部下に持たせるなんて、どこまで陰湿なんだろう、と今は思う。

所詮、お前は俺の掌の上なのだ、というメッセージまで聞こえてきそうだ。

「之信、火雲宮に行くのは構わないのか？」

「失礼ながら、ご用向きは」

「赤帝君に呼ばれてる」

沙龍が放置している携帯電話にメールが入っていた。

赤帝君からの連絡なら三日くらい放置しておくのだが、今は出掛ける用事があ

ればなんでもいい。単なる気晴らしである。

「分かりました。お供致します」

水雲宮の結界は、依然張られたままだが、どうやらこのボディガードと一緒に
ら出歩いてもいいらしい。

「すみません、緑麗様。星様は、今、他行中ですわ」

四神府を訪れたら、紫凜がいつもの艶っぽい笑みで出迎えた。

しかも今日はお色気五割増しな胸の大きく開いたブラウスを着ている。

思わずその胸の深い谷間に釘付けになったが、沙龍でさえそうなるのだから、
背後の墜物之信など鼻血を出して卒倒してもおかしくない。

しかし、之信は直立して控えているだけだった。

「なにか話があるらしいんだけど、紫凜は聞いてる？」

「いえ……？」

「じゃあ、それは後でもいいや。マルちゃんの様子を見に行こう」

紫凜は軽く頷いたが、沙龍の背後にちらつと視線を飛ばした。

「……そちらは？」

そのにこやかな顔が一瞬『プロの顔』になる。

「ああ、この堅物は……」

説明してもいいのか？ という意味で之信を見上げると、僅かに首を横に振る。

やはり『特殊任務遂行中』ということとは言ってはいけないようだ。

「新しいカレシだ」

「ま。ご冗談を」

紫凜に笑みが戻る。

しかし、その『プロの二人』が交わしたピリツとした視線には、なにやら暗黙の了解があった——、ように沙龍には見えた。

「私をご指名なんだって？」

赤帝君からのメールには、捕虜の少年が『緑麗を連れて来い』と騒いでいる、ともあった。

「ええ。最初に緑麗様がいらした日以降、ハンストもやめたようで、今はだいぶ体力も回復してるようですわ。お気をつけ下さい」

豪華な手すりと柱の渡り廊下を長々と抜けた先に、無機質な鉄筋の建物がある。

捕虜はその一室の独房に監禁されている。

「一応、俺の要望は伝わっているようだな」

今日は、マルティエルの方から、声を掛けてきた。

「後ろの二人は邪魔だ」

紫凜と之信のことを言っているらしい。

沙龍は要望通り立ち退かせようとしたが、之信はなかなか動かない。

ボデイガードが仕事なので、ここで沙龍を一人にするわけにはいかないということだろう。

いいから大人しく下がってる、という沙龍の視線を受けながらも、身じろぎ一つしないので、見かねた紫凜が声を掛けた。

「……大丈夫ですわ。対天使用のフィールドを張ってありますから」

そう促してくれたおかげで、やっと墜物もしぶしぶと引き下がる。

沙龍は十畳ほどの独房を密室にして、マルティエルと数分を過ごした。

「ザフィエルとダネルの墓を立ててくれたそうだな」

赤帝君があらかじめそれを伝えていたようである。

もしくは、紫凜かもしれない。

「お前と一緒に居た、同僚二人のことか」

「そうだ。……一応、礼を言っておく。お前たちに、敵兵の遺体を弔う風習があるとは思わなかった」

素直な言葉である。

敵中であって、任務遂行も叶わず、生きる望みも失って出る言葉としては、毅然としている。

「私は指示をしただけで、実際に仕事をしたのは石工さんだ」

「……」

「それに、墓標は十字架じゃないだろうしな」

「……」

マルティエルは、しばらくまたむっすりと黙っていたが、沙龍が「話がそれだけなら帰るぞ」と言うと、また口を開いた。

「お前に聞きたいことがある」

「なんだ？」

「お前は、本当に妖魔千人斬りをした将神緑麗なのか？」

「昔の記憶はないんで、それを言われても確証を持っては答えられないんだが、そういう逸話はあるらしいな」

「他人事のように言いやがって」

「実際、他人みたいなもんだ。それに、正直言って、その話は私にはどうでもいい」

「なんだと……？」

「私が何者かっつてのは、私が決める。覚えてもいない転生前の話に、どう感想を持てっつて言うんだ」

マルティエルは、そう言い切った沙龍を、感情を抑えた目で見つめた。

彼が聞いてきた話では、将神緑麗は西方神界を裏切った、抹殺すべき存在であ

る。

本人の記憶の有る無しは関係なく、敵であることに変わりはない。

「お前は言ったな？ 何故命を狙われるのか知りたい、と。墓を立ててくれた礼代わりにそれだけは教えてやる。将神緑麗——、お前は元々、俺たちの世界に居た『テストイー』だ」

「……テストイーってなんだ？」

「被験体、という意味だ」

「おいおいおい……、誰にそんなアホーなホラ話吹き込まれた」

「何故前世を忘れているのにそう言い切れる」

「一理あるが……」

いくらなんでもこの話は突拍子過ぎる。

敵を攪乱するための作り話にしか思えなかった。

沙龍が捕虜の尋問をしている間、之信は気が気ではなかった。

大事な特殊任務を初日にミスるわけにはいかない。

細心の注意を払って、閉ざされた鉄製のドアの向こう側に集中している。話し声は聞こえないが、もし異変があれば、すぐ突入するつもりでいた。

しかし、その様子を見て、紫凜が笑った。

「緑麗様を信用してないの？ 大丈夫だと言っているのに……」

「そういう問題ではない」

「相変わらずねえ……」

その何気ない一言で、昔の知り合いという事実を、之信も認めなくてはならなくなつた。

お互い、知らぬ振りを通すこともできたのだが、紫凜の方はそういった意地はない。

「やはり、四神府に戻っていたのか、紫凜……」

「ええ。古巣ですもの」

壁に背を預けている紫凜は完全にリラックスしているが、之信は直立したまま動かない。

「朱雀星君が行方をくらましている間は、どこに居たんだ？」

「色々ですわ」

女一人で生きていくのは楽ではなかっただろう、と之信は思う。

しかも、主君を失った失意の日々であれば、尚更だ。

しかし、そんな労りを口にするような之信ではないし、他人に弱みを見せるような紫凜ではない。

「結構、楽しかったですわよ？」

そう言ったところで、沙龍が独房から出てきた。

二人の短い昔話は終わる。

「ふいふ、お腹すいた〜」

「お茶菓子がありますわ。お召しあがりになりますか？」

「この前みたいなケーキなら要らない」

「点心もご用意できますわ」

「うん、じゃ、ちよつとだけ貰おうかな。……ところで、之信」

独房のドアにガツチリと重い錠をかけていた之信は、呼ばれると直角に振り向

く。

絵に描いたような動きである。

「はい。なんででしょうか」

「元帥に連絡は取れるのか？ 今居る場所を教えろとは言わないが、私が会って話したがっていると伝えるくらいできるだろうか？」

「ですが、すぐお会いできるとは思えません」

「成程、帝都には居ないわけか」

「それはお答えできません」

沙龍は苛立ちを分かりやすくするために、わざと舌打ちをした。

「何日かかってもいい。とにかく、連絡しておけっただよ。この朴念仁」

紫凜は、聞こえない振りをしていたが、口元では苦笑していた。

紫凜が二人を見送った直後、山のような書類を抱えた赤帝君が戻って来るのが見えた。

「あら、お帰りなさいませ、星様」

歩み寄って、書類を受け取ろうとしたが、赤帝君はその半分も渡さなかった。この優しさはフェミニズムとは違うのだが、やはり嬉しいものだ。

「今のは緑麗様か？」

「はい。星様に呼ばれたと仰ってましたが……。星様がお留守だったので、捕虜の尋問をされていたんですわ。今なら、追いかければ間に合いますが……。どうなさいますか？」

「いや……。緑麗様もお忙しいだろう。また今度でいい」

「そうですか」

「隣に居たのは……。之信じゃなかったか？」

「緑麗様の護衛のようですよ。今じゃ、特務のエリートですよ」

「お前に振られて、自棄になっていた姿しか思い出せないが——、立派になったもんだな。逃がした魚は大きかったのではないか？ 紫凜」

「まあ、星様だったら、意地悪ですよわね」

しかし、大昔、付き合っていた男が、今や出世している様を見るのは、決して

嫌なことではなかった。

特に、之信はその真面目さ故に、一時、自暴自棄になっていたもので、そのまま人生転落したとなれば夢見が悪いというものだ。

未練は、最初からない。

之信と付き合っていた当時ですら、紫凜の想いは別の男に向けられていた。

「尋問の成果はあったのか？」

「私にはなんとも。星様宛てに、緑麗様から報告書を預かっておりますが」

「緑麗様をこのように『使う』のもどうかと思うのだがな」

と、赤帝君は九雷を批判するようなことを言った。

度々、赤帝君がこういうことを口にするので、紫凜には主語がなくともそれが九雷のことだと分かる。

確かに、民間人である沙龍にこういう仕事をさせるのは、九雷の公私混同である。責められても仕方がない。

しかし、紫凜は、赤帝君のこの九雷批判は全く別の感情から来ているのだと分かっていた。

「緑麗様が納得しているなら、よろしいんじゃないですか？」

「そうかもしれんが……」

赤帝君に追従する紫凜は、最近、この上官が憂いに満ちた瞳をする度に、思うのだ。

（全く——、バレバレですわ。星様）

幾つになっても、どんなに経験を積んでも、こればかりは特効薬がない。

特に、その決して実らない恋は、苦痛でしかないというのに。

相変わらず、沙龍は水雲宮に閉じ込められたままである。

之信と一度外出した以外は、特に出掛ける用事もなかったし、その必要もなかったのだ。

土行属性を持つ者のみ通り抜けることの叶わぬこの結界は、堅物ボディガードが持つ特殊能力か特殊アイテムによって一瞬だけ無効にできるのだということ。沙龍は知ったが、それを知ったところで結局は無意味である。

之信が『是』^{はい}と言わない限り、沙龍は水雲宮から出られないし、その之信は九雷の意を汲んだことしかしない。

水雲宮の建物からは一步も外へ出られないが、隅々まで探検した結果、厨房裏手の湖畔へ通じる屋外の作業エリアだけは例外と分かったので、そのエリアの小さな栈橋で釣りをすることはできた。

構造的に、屋根や天井がないだけで、ここも建物の一角ということだろう。

麦わら帽子を顔に乗せ、沙龍は釣竿をかけたまま、棧橋で昼寝をしている。たまに、料理長の建民が野菜籠を片手に脇を通りかかったりするが、恰幅のいいこの中年は主人の安眠の邪魔はしない。

ただ、少し気の毒そうな目を向けるだけである。

小龍も、沙龍のお腹の上で伸びきって一緒に昼寝をしていた。

その小龍が、「キュ？」と、頭を上げる。

「……釣れんのか？」

究極にやる気のない声が掛かった。

沙龍は半分起きていたようで、麦わら帽子のツバを上げて見ると、果たして思った通りの人物がいつもの虚ろな目で魚籠の中を見下ろしている。

くすんだドドメ色のコートに両手を突っ込んで、くわえ煙草をふかしている様は、生気のかけらもない。

「なんだ、オケラか」

公務員は、そのままブーツと立っているだけだ。隣に来て座ろうともしない。

何故こんな胡散臭そうで小汚い男を水雲宮にすんなり入れたのか紗衣を問い詰

めたいところだが、それ以上に、この男が沙龍の協力者であることを知っていたか、推察した紗衣を褒めなければなるまい。

「釣るためにやってるわけじゃないんでね」

「じゃあ、なんのために釣り糸垂らしてんだ？」

「ただ昼寝してるだけだと思われないうため」

「……。俺には、ただ昼寝してるようにしか見えないが」

「うるさいんだよ。人生を有意義に使うためには、なにかをする傍らでなにかをしているんだと自分に思い込ませることも必要なんだ。人生のトーシロが、黙ってる、ダアホ」

沙龍の機嫌はこの上なく悪い。

側を通りかかる建民や健一はその不機嫌の理由を知っているし、沙龍にやや同情をしているのでそっとしているわけだが、公務員にはそんな事情は関係ない。

ボスの機嫌がよかろうが悪かろうが、彼がここにやって来た目的は一つだし、それを終えたら帰るつもりなのだ。

「しかし、冗談じゃなかったんだな。これ、ホントにお前んち？」

背後に聳え立つ水雲宮は、公務員の感覚で言えば上海のテレビ塔（467m）ほどもある。

しかし、実際には、そこまでの高さはなく、横浜のランドマークタワー（296m）よりやや小さいくらいだ。

「そう。なかなか快適だぞ。いつでも遊びに来てくれ」

その小ぶりのランドマークタワーが一個人の家だというのだから、上海の貧民窟で育った公務員にしてみれば、信じがたい話である。

「気が向いたらな。ところで、あれ……」

と、公務員は、今度は栈橋の脇にじっと控えている筋肉質の男のことを顎で示した。

「ああ、あれは気にしないで。銅像かなんかだと思って」

実際、沙龍はそう思うことにしている。

慣れとは怖いというか有り難いもので、そうすると、たった数日程度でも気にならなくなってきたのは事実である。

上海に居た頃だって、思い返せば、常に黒服が二、三人控えていた。

之信は、必要な時以外、半径五メートル以内には近付かないと宣言しているが、これが彼の『間』だとしたら大したもんだと沙龍は思っていた。

九雷のように反則技の『縮地法』を使うわけでも、陽輝のように飛び道具を使うわけでもなく、この距離で一瞬で相手を殺せる、というのだ。

確かに、それくらいの腕がなければ、九雷もボディガードには任命しないだろう。

「VIP並だな。とうとうボディガード付きか。つか、お前には必要ないだろう。あんなん」

「並じゃなくて、VIPなんだよ。……私の預かり知らぬ所だな」

「ふーん。過保護なカレシが付けたのか」

「ここまで来ると、過保護通り過ぎて病気だ」

「……」

公務員は、泰山府の工作員として、最近の西側の不穏な空気を大体知っている。つい最近も、上司の栄吉が大ボスに呼び出され、慌ててスーツに着替えて出て

行つたのを横目で見ていた。

だから、沙龍の恋人が必要以上に心配するのも、分からないではない。

しかし、公務員にとっては、個人的な雇用関係を結んでいるこの不遜なボスは無敵の存在であるし、また、無敵でなくてはならない。

「俺には、なんでお前がそれを大人しく受け入れてんのか、よく分からん」

「私にも分からん。キサさんに言わせれば馬鹿だから分からんらしい」

「……あー、あの美人か」

木佐小次郎の真つ直ぐな鼻梁が思い出された。

公務員自身は男に興味はないが、『美人』には男も女も関係ないな、という発想はある。

人を魅了してやまない造形美というのは、確かにあるのだ。

「美人だから棘があるのは、仕方ねーんじゃねーか？」

「知らん、あんな性悪」

沙龍が一層不機嫌な顔をしたので、この不機嫌の原因はそつちか、と思つた。比重で言えば、痴話喧嘩よりも重いのかもしれない。

「玄武佑君がなに言ったか知らんが、十五で蒼龍会を掌握した奴が馬鹿なもんか」

「……」

沙龍は寝そべっていた体を起こし、公務員のやる気のなさそうなけだるい表情を覗き込んだ。

ほとんど他人に関心を見せず、他人を直接褒めることのない公務員が、そんなことを言ったのがちよつと驚きだったのだ。

すぐ近くでチュンチュンと小鳥がさえずっている。

健一が気を利かして、二人分のお茶を持ってきてくれた。

「ところで、九龍^{カオルン}。最近、暇か？」

「最近に限らず、ここんどこずつと暇だ」

「ふーん。じゃあ、ちよつと頼まれてくれよ」

「なにを？」

「アルバイト」

そう言って、公務員は懐からクレジットカードのようなものを出した。

「……なに？」

「俺の泰山府のIDカードだ」

「……待て」

急に、嫌な予感がしたので、沙龍は受け取ってしまったカードをつき返そうとしたが遅かった。

公務員は茶碗をお盆に置いて、既に背を向けている。

彼の中ではもうこれで用は済んだ、ということだろう。

「待てと言うのに、こらー！」

「大丈夫だ。お前なら、立派に俺の代わりを務められる」

後ろ手に手を振って、公務員は立ち止まる気配も見せずに行ってしまった。

公務員は説明を放棄したわけではない。

ただ、口で説明するのが面倒臭かっただけなのだろう。

部屋に戻ると、ちゃんと沙龍宛に、パソコンにメールが入っていた。

マニュアルのファイルを添付しているだけのものだが、これで、彼の謎の行動の意味が大体分かった。

泰山府の総務課に電話で確認してみると、確かにその職員は有給休暇中です、と言われた。

「……慰安旅行だと？　ふざけんな」

あそこのスタッフなんて、皆、真面目に働いてるかどうかも怪しいってのに、なにを慰安する必要があるうか。

沙龍のギスギスの神経は、そろそろ限界に達しそうである。

公務員が送りつけてきた『冥府案内の仕方』をプリントアウトして、ベッドに寝転んで眺めながら、沙龍はいちいち文句を言っている。

部屋には他に誰も居ない。ただの独り言だ。

「案内人の心得その一。仕事は寝て待て。探してまでするものではない。……あの税金泥棒共が。公僕という意味、分かってんのか？」

しよっぱなからこれである。

火雲宮での泰山府の立ち位置が見えるようだ。

「案内人の心得その二。彷徨える魂魄は、九割方、死んだことに自覚のない、死にたてホヤホヤである。ワケの分からぬうちに、正規ルートに誘導してしまおう。……病院に待機している葬儀屋商法かよ。よくこんなんでもどこからも文句が来ないな」

公務員は、あろうことか、ボスであるはずの沙龍に自分の仕事をさせようとしているらしい。

有給休暇を取っているならそんな必要もないはずなのに、一体どうということなのか。

沙龍はアルバイトなどするつもりはないのだが、公務員の意図が分からないので、仕方なくマニュアルの冒頭部分だけ読んでいる。

「そもそも、こういう公職を公務員でもなんでもない一般人にアルバイトさせていいのか？ なにかあった時、誰が責任取るんだよ」

その独り言に、返答があった。

「当然、泰山府君だろう」

「……………」

心臓が飛び出そうになったのはかろうじて喉の奥に押し込み、沙龍は目の前に掲げていた紙をそつと横にずらした。

いつの間にか帰宅していた九雷が、動かぬ表情で、そこに居る。

「ただでさえ寿命短いんだから、おどかさないで」

「それは悪かった」

「……お、帰り？」

まともに会って口をきいたのは久し振りのような気がする。

せいぜい一週間くらいしか経ってないはずなのだが、今までの蜜月ぶりを思えば、一週間は確かに長い。

これまでも九雷が仕事でしばらく来ない時はあったが、微妙に険悪な状態の一週間というのは、体感的には一年にも感じる。

はつきりと空気がおかしくなったのは、ルシファーが来た日からである。

その原因は、お互いが作ってる。どちらか一方のせいではない、と沙龍は思っていた。

「仕事を頼まれたそうだな」

「情報がお早いことで……」

言い方が嫌味っぽくなってしまったかもしれない。

しかし、九雷が次に言った言葉は、沙龍の予想を超えていた。

「お前の所に行く前に、俺の所に来たからな」

「え……？」

まずは保護者の許可を取った——ということだろうか、と思っただが、それすらも違った。

「ちなみに、慰安旅行というのは、嘘だ」

「……どうということ？」

「俺が、泰山府君に頼んだ。しばらく預かってくれ、と」

「……」

もはや、沙龍は反応もできない。

「沙龍。ルシファーは本気だ。どうあっても、お前を連れて帰りたいらしい」

「……」

何故、臨時アルバイトの話に、あの大魔王が出てくるのか。

それを考えるのすら、放棄した。

「奴が何故、黄龍の力を欲しているのかはまだ分からないが、天使軍との戦いに利用するつもりなのは明らかだ。勝つ戦争しかしない男だからな」

それは、まるで誰かのようにだ——、と沙龍は思った。

勝つ闘いしかしない。

他ならぬ、九雷のことではないか。

「だから、ルシファアを仇敵としている天使軍は、それを徹底的に邪魔する気だろう」

誰かにも言われたことがある。

どこに行っても起爆剤になってしまう黄龍の力をこの身に抱えたまま、平穏な毎日を送ろうとする方が間違っているのだ、と。

「選択肢は幾つかある。だが——」

「待って、順番に」

「沙龍、俺はお前を手放す気はない」

「そのための、臨時冥府案内人？」

「あそこに居る間は、少なくともルシファーも天使たちも手は出せない。結界に護られた帝都の、さらに次元回廊の向こうだ」

「手放さないとやっておきながら、私を隔離するの？」

「……」

「そうやって、私一人を安全な場所に閉じ込めて、貴方は一人でなにをするつもり？」

「……」

嫌な沈黙。

これでは、なにも伝わらない。

否、九雷はなにも伝えようとしてない。

「俺は、俺の信じる最善の方法を尽くすだけだ。それが、お前の最善策と一致するとは限らない」

「そうして、私を従わせるんだね。いつも、有無を言わずに。貴方は、私に人形で居ると言ってる。息をするだけの、生きているだけの人形に！」

「そうは言っていない」

「言ってるよ。もう聞きたくない」

「なら、お前は、どうしたいんだ」

「私は……」

分からない。

自分がどうしたいのか、どうすればいいのか。

いつも、願いはたった一つなのに。

その叶え方が、分からない――。

明けて翌日、沙龍は之信を伴って四神府に向かった。

しばらく会えなくなるので、聞きそびれていた赤帝君の話聞いておこうと思っただのだ。

出迎えた紫凜は、沙龍のいつもとは違う気合の入った表情を見て取り、余計なことは言わなかった。

「いらっしやいますわ。執務室へどうぞ」

「ありがとう、紫凜」

沙龍の感情を抑えた言葉には、不遜を通り越した王者の雰囲気すらある。

何故この小さな体で、二十余年という人生で、こんな器を持ってしまったのか、普通の者には理解できないだろうが、紫凜には納得できるものがあった。

やはり、魂魄の質が違うのだ、と思う。

（舐めんなよ、あの陰険野郎……）

勿論、仮面の下には、いつもの沙龍が居る。

しかし、今日は仮面でもつけていないと、そのどろどろとした怒りを抑えられないのだ。

昨夜は、九雷と派手な喧嘩をしたわけではない。彼は、ただ、自分の決定を、強引に沙龍に従わせただけである。

「この前の、緑麗様の報告書なんです」

赤帝君は、紫凜と違って、沙龍の無表情の下にあるものに気付かない。

いつも通りに接した。

「ああ、マルちゃんが言ってたとしてもない話ね」

「実は、私がお話しようと思ってたことも、その件とちよつと関係があるので
す」

「……？」

完全に人払いしてから、赤帝君はドアに結界まで張った。

かなり機密に近い話のようだ。

「話は少し飛躍するんですが、緑麗様は聖霄が西域の出身ということをご存知で

すか？」

「うん。太上道君に育てられたって話は知ってる」

「では、彼が捨て子だったということは？」

「……いや。聞いてない」

沙龍はソファに投げ出していた足を引っ込めた。

「どうやら、寛いで聞く話ではない、と思ったのだろう。」

白帝君は銀髪にグレイの瞳という異質な風貌なので、純粹な天界住民ではないということ、誰の目にも明らかである。

しかし、『捨て子』というのは影で囁かれる話であって、なかなか公称できるものではない。

本人も、親しい者にしかそれを告げていないのだ。

「まだ赤ん坊の頃に、西域の村の外れで太上道君に拾われたそうです」

「阿哥はなんでその話を？ 聖霄から聞いたの？」

「いえ、私は太上道君から聞きました。昔、弥羅宮の警備隊長をしていた時代がありました。緑麗様は軍属になったばかりの頃だったと思います」

「じゃ、相当前の話だね」

赤帝君は肯首して、自分の記憶の中に戻った。

彼は、代々、各省庁の高官を多く出身させている名門一家に育った。

当然、官僚になることを期待されていたが、次男だったこともあって、割と自由ができた。

真面目な赤帝君は、学問の面でも優等生だったが、それ以上に、小さい頃から精神修養のために始めた武道の方が成績が良かったので、父親に武門の道を勧められた。

そこで、名門ならではの縁故を頼って、弥羅宮に赴くことになった。しばらく最高神に師事して箔を付けてこい、という家長の命令である。

聖霄や敖広ごうこうとはその弥羅宮で出会ったのである。

悪ガキだった聖霄には手を焼いたが、既に一角の人物だった敖広には敬愛の念すら抱いた。

敖広が弥羅宮に来ていたのは、やはり太上道君に師事するためである。

「太上道君は男手一つで赤ん坊を育て、そのまま聖霄が成長するまで後見人と

なったのですが、養い親として、銀色の髪を持つ彼の行く末を案じていたのでしょう。聖霄の素性に関して、真実を知っている者が居ると困る——と言っていたのを覚えてます」

「ということは、少なくとも、太上道君は素性を知っていたってこと……？」

「だと思います。私にその詳細を告げることはありませんでしたが」

「フム……。なにやら秘密めいた話だな……」

「それで、私が緑麗様にお話したかったのは、ここからが本題なのですが——」

「うん……？」

「当時、緑麗様はたまに弥羅宮に遊びに来ていました。聖霄とは本当の姉弟のように仲がよくて、太上道君の話では一時期、一緒に過ごしたことがあるとか」

その弥羅宮に集まっていた四人がやがて四方将神となり、神獣の保持者となり、全員が四神府に勤めることになったのは単なる偶然か、それとも、そういう宿命のようなものがあつたのかもしれない。

「ああ、それは聞いたことがある。……もしかして、緑麗も捨て子だったのかな？」

「はっきりとは分からないのですが、その可能性はあります」

「つまり、マルちゃんが言ってた話も、まるつきり作り話じゃないってことか……」

先日、マルティエルは『将神緑麗は西方出身』とはっきり言っていた。

沙龍はそれを信じなかったし、今、赤帝君の話聞いても半信半疑なのだが、沙龍には元々、判断材料があまりない。

赤帝君の話も、昔話の一つとして聞いていた。

「しかし、聖霄と違って、緑麗様は火雲宮の公式データでは『西海龍王家の親族』となっております」

「えっ……。それ、知らなかった！」

「ご存知なかったんですか？」

「うん。全くご存知なかった。というか、じゃあ、もしかして、緑麗って、西海龍王と親戚だったの？」

「まあ、表向きはそうなるんですが、そのデータを頭から信じてる人はあまり居ないというのが現状で……。ただ、似てることは似ています。顔立ちといい、所作

といい、龍族の血が流れているのは間違いないと、誰もがそう信じるだけの説得力はありますから」

そう言えば、奏欽に会う度に、沙龍自身もどこか近いものを感じる。

顔立ち云々よりも、種族的に近いんじゃないか、ということである。

沙龍は、かつての緑麗の肉体的な部分はないにも受け継いでいないはずだが、魂魄が同じだとすれば、そう感じるものがあっても不思議はない。

更に、飛龍が緑麗に懐いていたのも、血が近いという無意識があつたからかもしれない、と思うのだ。

「……純血じゃないとしたら、ハーフかなんか？」

「それも、私には確証はありませんが、いずれにしても、聖霄も緑麗様も、なにか出生に秘密があるのは確かです。しかし、現在それを知っているであろう太上道君は行方不明ですし、敖閨殿は知っていたとしても恐らく教えてはくれないでしょう」

「うーん……」

「ただ、今回の西方神界と西方魔界の動きは、その緑麗様の出生の秘密に関係し

ているような気がしまして」

「だろうな……。他に、知ってる可能性がある人は？」

そう聞くと、赤帝君はしばらく考え、

「敖明殿があるいは」

「欽チャンのお父さんか……」

沙龍は会ったことのない人物である。

先代の南海龍王で、先代の南方軍大将である。

しかし、奏欽の話では、未だに南方軍の研究所の実権を握っているという。

「一度、欽チャンに聞いたことがあるんだけど、南方軍の研究施設で結構やばいことやってるって話も、なにか関係ある？」

「恐らく」

硬い表情で赤帝君が頷いた。

「そうか。だいぶ見えてきたな……」

「充分お気をつけ下さい。緑麗様の敵は西方神魔だけではありませんから」

「うん。話してくれてありがとう。……しかしさ、阿哥。もしかして、緑麗と聖

霄って、本当の姉弟？」

「どうでしょう。個人的には否定したい気もしますが」

「なんで？」

「いえ……。あのお馬鹿な聖霄と聡明な緑麗様が血縁というのは、どうも信じ難いというか、信じたくないというか……」

「それ、社交辞令入ってないかー？」

沙龍は笑いながら言った。

赤帝君も、今のは多少大袈裟に言ったようである。

「ですが、その……、少し意外でした。いえ、安心したと言うべきか」

「……なにが？」

「いえ、緑麗様が冷静なので」

「冷静というより、結局、人事なんだよね。私……」

「それでいいんですよ」

赤帝君がにこやかに笑うので、つられて、沙龍も微笑んだ。

最近、色んな人とギスギスしているので、今はこの赤帝君の優しさが身に染み

る。

沙龍はついでにマルティエルにも会っていくことにした。

この前彼が言っていた荒唐無稽——今のところは——な話も気になるし、そもそも、尋問はなにも成功していない。

「ところで、この前、言っていた話だがな」

「信じる気になったのか？」

無機質な部屋の堅いベッドに腰を下ろしていた少年は、けだるそうに口を開いた。

沙龍の顔を見るなり噛み付くこともないし、無視することもない。

だが、目だけは最初に見せた憎悪の色を宿したままだ。

「いや、そういう揺さぶりをかけると教わってきたのなら、それは無意味だと言っておこうと思って」

「大した自信だな。何事にも動じないと言いたいのか？」

「いや、そういう意味じゃなくて。あのな、私は実は公務員ではないんだ」

「……？」

「つまり、捕虜に関する権限はなにも持っていない、ということさ。だから、揺さぶりをかけたいなら、ここの責任者の二人に対してした方がいいぞ」

「二人？ 赤毛の背の高い男以外に、もう一人居るのか」

「まだ会ってないか。この部署のもう一人の管理者だが、キレーな顔した意地ワルオ君だ」

「……？」

「あ、そうか。マルちゃん的には、キサさんの方が攻略しやすいよな。もうちよい薄幸の美少年風だったらよかったのね。まあ、百歩譲って美少年じゃなくとも、多分、大丈夫だ。ガンバレ」

「……？」

マルティエルは、なんのことやらさっぱり分からない。

沙龍は彼の動揺を誘うために言っているのだが、この少年がその方面に関してはかなり無知だということは知らなかった。

「いや、待てよ？ 美少年だったら、喰われて捨てられて一番悲惨か。よかったな、美少年じゃなくて」

「く、喰われる……？ お前たちは、天使を喰うのかッ!？」

「アホか。文字通り取ってどうする。やられるって意味だ」

「『ヤられる』……?」

「ボケか？ つまり、イヤ〜ン、えっちなことされちゃうって意味だ。……

アレ？ 言葉、通じてる？」

「……男だろう？」

「アレ？ そういうの、そっちじゃないの？ ゲイ社会が認められてんのって、北欧だけ？」

「ど、ど、ど——同性愛というヤツか？」

「あゝ、そうも言いますネ。キサさんに関してはある『愛』はないけど……」

ニヤリと笑った沙龍は、丁度いい、軽く脅しておこう、と思った。

「そうか……、マルちゃんの花の操、東方にて破られる、か——。まあ、私は男

じゃないんでよくは分かんが……」

「……ッ!？」

「最初はさ……、すんごく……、痛いみたいよ？」

「……ッ!？」

「しかも、その喰い捨て専門の意地ワルオ君ときたら——」

マルティエルがパニックってるのをいいことに調子に乗ってベラベラ喋っていたので、沙龍は背後の人影に気付かなかった。

一瞬、ひんやりと背中が冷たくなって、言葉を切ったが、遅かった。

この世のものとは思えないほど恐ろしい形相の木佐が、この世のものとは思えないほど恐ろしいなにかを無数に背負っている。

『それら』はよく見れば蠢く蛇の形をしているのだが、つぶさに観察する余裕などない。

「キ、キサさん……、い、いつお戻りで？ ……って、いきなりハイパー・モードになってる……ッ!？ ……なんで——!？」

「だあ……それがッ！ 意地ワルオだ！ この口か——ッ！ 人の居ないところ

で悪口言ってるのは——ッ！」

「ぎええええええ！」

「いーい度胸だな？ 真面目な公僕に大量の茶碗蒸しを作らせただけじゃ飽き足らず、人のオフィスを半壊させるとは一体どうゆう了見だ、この無職遊び人があああつ！」

「きよ、今日からアルバイトだもん、無職じゃないもん！」

「問答無用——！」

「ふおれに、きひやひやんのオフィスには今日は行ってにや——」

しかし木佐は沙龍の言葉は聞いてない。

完全に目が据わっている。

「喧嘩の仕返しにテロ行為に出るとは、甲斐馨も地に落ちたな！」

左右に引っ張られた口は離してもらえたが、そのヒリヒリとした痛みなど、序の口である。

沙龍は座り込んで後ろささった。

「ま、待って——。頼む。せめて、マルちゃんの尋問を済ませてから……」

「フン、まだこんな素人に手間取っていたのか。見ている、捕虜の自主的な自白ってのは、こうやって引き出すんだ」

と、木佐はマルティエルの胸倉を掴むと、

「少年A——、まず、僕は気が短いんで、三つ数えるうちに選べ。水攻め、氷漬け、十八禁」

マルティエルは、いきなり現れた木佐に気圧されているし、氷のような殺気をまともに食らって満足に言葉も出てこない。

「いや、それ、どれを選んでも無事に済まないんじゃないや……」

沙龍は壁際にへばりついてはいたが、この密室空間で逃げ場はない。

「成程、水攻めか。任せろ。得意中の得意だ」

「いや、マルちゃん、なにも言っていないじゃ……。あ、じゃなくて、それって、私も無事じゃないか——も……」

突如として、天変地異のような大津波がこの独房を襲う。

沙龍の『私、カナヅチなんですけどー!!』という悲鳴は、その凶悪な大波に呑まれた。

「ゲホ……ッ」

どこが『自主的な自白』なのかつとも分からないが、黒帝玄武佑君の見事な手腕で少年A（推定年齢十五歳）は完全にゲロった。

調書も、完璧である。

この前、沙龍がいい加減に作成した報告書など、資源リサイクル運動の一環として、通販会社の荷物の梱包の際に、隙間を埋める素材にでもなっていることだろう。

「ゴフツ……」

「だ、大丈夫ですか？ 緑麗様」

騒ぎに駆けつけてくれた赤帝君のおかげで、なんとか水死体にならずには済んだが、これでは浜に打上げられたミニラのようなようである。

「いや、あんまり大丈夫じゃないけど……」

「赤帝君、あんまりそのミニラを甘やかさない方がいいぞ」

決然と言い渡す木佐は、どこまでも容赦がない。

「……。ホントに真武君なのか？　なんか……、別の人間が憑依してないか？」
赤帝君がそう思うのも当然だろう。

木佐は、普段は、自分の本質を多少なりとも抑えて、あまり人と衝突しないようにしているのだ。

「いや、真正正銘、キサさんです……」

というより、これがある意味、本来の木佐小次郎の姿かもしれない、と沙龍は思う。

「馨も、だ。無条件で甘やかしてくれる人の傍は、さぞかし居心地がいいだろうが、それは墮落でしかないぞ」

「……………」

こんな真髄をつく言葉を、他の誰が言えるというのだろう。

13 冥府案内の仕方

九雷は、怒ってはいなかった。

ただ、なにも語らず、その恐いほど静かなプレッシャーで従わせただけだ。かくして、沙龍は抗う術を知らず、今ここに居る。

冥府と呼ばれる、隔離された世界に――。

「コラア、その死にたて！ 寄り道すんなッ！」

九雷の醒めた態度が余計、沙龍を苛立たせたのは言うまでもない。

更に、木佐とも冷戦中とくれば、自棄気味にもなるだろう。

「お前はこつち！ 二列縦隊乱すなよ」

沙龍は、臨時に支給された死神装束を着て、鋭利な大鎌ではなく百円シヨップで買ってきたような虫取り網を持たされ、初心者にも出来るような誘導の仕事をしている。

しかし、ふわふわと漂うゴルフボール大の魂魄たちは、なかなか言うことを聞

いてくれない。そもそも、言葉を理解していないのだ。

「そこ！ 喧嘩しない！ うがあー！ そっちはイチャついてんじやない！」
はしやぎまわる幼稚園児たちのような魂魄体を、整然と導いてやるのが沙龍の仕事である。

冥府案内人と言ってもピンキリで、沙龍が今やってるような誘導係は残業もないし、まさにアルバイトにはうってつけだ。

クリーチャーや亡者が現れるようなエリアではないので、危険もない。

「……係長」

「……」

之信の声らしきものが遠くに聞こえるが、沙龍は喧嘩をする魂魄の仲裁に忙しくて、無視した。

「係長」

「……」

「貴女のことですよ、緑麗様」

之信の声が急に近付いてきたので、やっとな振り向いた。

「……なんだ？」

『係長』というのは、冥府における沙龍のコードネームである。

公務員の上司である栄吉が付けたのだが、沙龍はその呼ばれ方に慣れるつもりはない。

いい加減に付けたとしか思えないし、どうせすぐ用済みになるだろうと思っているのだ。

栄吉にしてみれば、『元将神』を格下に扱うわけにはいかないという、一応の気遣いがあるのだが、『藤堂係長』は『ボス』だから、というマニアックな説明をされても、沙龍は分からない。

部下も部下なら、上司も上司だ。

いや、彼等の言う『大ボス』が一番変だからしょうがない——、とと思っている。

「そろそろ終業のお時間です」

沙龍に張り付いている之信は、どこまでも『護衛』の任を全うする気らしい。

冥府までついて来るとは、なんとも忠義な奴である。

この場合の忠義とは、勿論、沙龍に対してではなく、この命令を下した九雷に向けられている。

「あ、そう……。お疲れさん」

「緑麗様もお疲れ様です」

ベルトコンベヤーのような装置をオフにして、本日の業務を終える。

ルートに乗れなかった魂魄たちはひとまず、待機所のような囲いの中に入れて、一晚を過ごすのだ。

公務員が以前教えてくれた話では、冥府には『廃棄工場』と『再生工場』があるという。

人界、仙界、天界の三界で死んだ者の魂魄は、そのどちらかの工場に行くことになっているのだ。

沙龍が今居る場所は、再生工場へのルート进行管理するエリアだと栄吉に説明されたが、見渡す限り暗い夜空で、このベルトコンベヤーがどこに続いているかなんて、実際には分からない。

「お前も難儀だな。エリート街道まっしぐらって最中に、こんな民間人のお守を

させられて」

支部へ引き上げる道中でそんな話を振ったら、愛想のない言葉が返ってきた。

「そうですね」

「……。おい。少しは『そんなことありません』とか言えよ。社交辞令でいいんだから」

「失礼致しました」

面白みの欠片もない。

沙龍が知っている軍人の中でも、この之信は、*“表情が動かない部門”*ではぶつちぎりのナンバーワンだろう。

冗談は徹底的に通じないし、仕事以外でも必要最低限の言葉しか発しない。

特務の軍人というのは皆こうなのだろうか、と思って本人に聞いてみたところ、

「同僚のことはよく存じません」

という答えだった。

之信が所属している特務というのは、正式名を『特殊任務作戦部隊』という。

四方軍には属さず、主に、元帥の手足になっているのだが、実際の運営は五雷、馬霊ばれいというツーン・トップに任されていた。

この両次官は仲は悪くはないのだが、トップが二人居ると、特務のメンバーの間では自然と派閥ができるものらしい。之信は馬霊寄りだった。

隻眼の馬霊も、口数が少ないことで有名だが、之信ほどではない。

支部の閑散とした事務所に戻ると、栄吉が一人でパソコン作業をしていた。

「お疲れ様です、係長。もう慣れました？」

お義理でそんなことを聞いてくるのだが、この男も所詮、泰山府職員である。

VIPを必要以上にもてなそうとする意思は最初からないようだ。

「一つ、聞きたいんだが、栄ちゃん」

沙龍はタイムカードを押しながら言った。

「はい？」

「冥府内の時間ってのは、あつたりなかつたりするわけだろう？ そんな無茶苦茶なシフトで、どうやって時給計算するんだ？」

沙龍も、今日は一日中、上海の夜景の中で仕事をしていた。

これでは体内時間も狂うし、日付や時間の感覚はなくなる。

「ああ、それなら、一応、火雲宮の絶対時間に合わせてますよ」と、栄吉は沙龍の頭上を指差す。

その天井近くの壁には、時計が二つあって、一つは冥府内時間、一つは火雲宮時間を示しているのだそうだ。

「まあ、ウチの職員で火雲宮時間を気にしてる輩は居ませんけどね」

「私は一応、外の時間で生きてるんでね。戻った時に浦島になってても困る。いちいちここに見に来なきゃいけないのも面倒だ。この火雲宮時間を示してくれる腕時計かなんかはないのか？」

「あー、それなら、誰かのデスクにあるはずです。勝手に持って行って下さい」「誰のでもいいのかよ。まあ、それじゃ遠慮なく……」

沙龍は事務所を見渡したが、どの机もゴミの山のようになっているので、うんざりした。

ひとまず一番近くにあった机を物色したが、カップラーメンの残骸や、飛龍や悠花には見せられないような雑誌が堂々と置かれていたりして、本当にここが職

場の机なのか、と疑う。

三十分かけてやっとそれらしき腕時計を見つけた。

二つの盘面があつて、それぞれに、年月日と時間が表示されるタイプだ。

それによると、沙龍がここに来てから、『外』では既に三日も経っていることが分かった。

「成程。今のところ、冥府での一日が、外での三日か。しかし、これもまた明日には狂うんだろ？」

「そうですね。早くなったり遅くなったり。だから、ここで働く者は外の時間なんか気にしないようになるんですよ」

時間には常に気を付けておこう、と沙龍は思った。

ここの職員に毒されて、のんびりアルバイトをしても、いいことはない。

宿舎に戻って、火雲宮時間を確認するとまだ夕方の六時前である。

普通の官吏なら、仕事が終わって、さあ遊びに行こう——という時間だ。

「之信、出掛けてもいいか？」

「ダメです」

「即答かよ……。冥府内ならどこへ遊びに行こうと構わないだろうが」

「遊興及び飲食施設には緑麗様をお連れするな、と厳命されております」

冥府といっても、職員用の施設というのが当然ある。

支部を中心とした小さな町になっているだけだが、そこにはちよつとした繁華街もあつた。

「修学旅行生かよ……。じゃあ、夕飯どうすりやいいんだ。お前が素晴らしく美味しい日本料理でも作ってくれるのか？」

「……どうぞ」

と、堅物ボディガードが差し出したのは、色とりどりの宅配メニューである。

「中華、和風、洋風、ファーストフードから高級料理店まで、全て揃っております。お好きなものをご注文下さい」

「……」

つまり、水雲宮での監禁生活と同じである。

いや、仕事をしなくていいという点では、水雲宮の方が百倍はマシだ。

沙龍は深く、深く溜息をついた後、とりあえず之信から奪ったそのメニューの全品、全店に電話注文をした。

「一番早く持ってこれたところは代金二倍払ってやる」

そう付け加えるのも忘れなかった。

「食事はいいとして、じゃあ、余暇はどーすんだ。強制就労の上、余暇なしなんて、服役囚じゃあるまいし」

すると、之信は予想済みという顔で、宿舎に予め運び込んでおいた幾つかの箱を示す。

その中には、ゲーム機や映写機といった、部屋の中で遊べる、考え付く限りのものが一式揃っていた。

「とりあえず、海チヨコボを育てる頃には、水雲宮に戻れるかと思えますので、それまでご辛抱下さい」

「なんだ、その海チヨコボって」

「いえ、自分もよくは知りませんが、そう言っておけ、と。馬霊次官が」

「……」

「どうやら、このゲーム機やソフトを選んだのは之信ではないらしい。」

「沙龍は、ひとまず、この暇つぶしグッズを置いて、」

「例えば、私がこの冥府生活に飽きて、なんとしても外に出せ、と騒いだら、お前はどうするんだ？」

「やや脅しを込めて聞いてみた。」

「自分は、閣下より、緑麗様を冥府の外に出すなどの厳命を受けております。これは、クラスSS特殊任務ですので、なによりも優先されます」

「つまり、最終的には力尽くか」

「緑麗様が実力行使をなさろうとすれば、そうなります」

「……フン」

「沙龍は鼻をならした。」

「命令通りに動くのは楽でいいな。しかし、それが褒められるのは一般兵だけだ。今のお前の立場で、頑なに『遵守君』で居ても、それ以上は出世しないぞ」

「……」

之信は表情こそ変わらないが、なにか言いたげだ。

沙龍は、それを読み取って、言ってやった。

「軍人は軍規を守ってなんぼ、か？　しかしな、之信。あんまり、マニュアルだ、規則だ、って正方形に物事考えてたら命取りになるぞ」

「ご忠告、感謝致します」

之信は本心からそう言ったわけではない。

言葉にこそしないが、なんだこの偉そうなVIPは——と、ずっと思っているはずである。

しかし、之信は一瞬、眩しそうに目を細めた。沙龍の言っていることは間違っていない、という意味だ。

宿舎は、当然、VIP用である。

水雲宮ほどではないが、広いバスルームも完備されているし、天蓋はついていないが、高級ホテル並みのベッドもある。

お腹がすけば好きなだけ宅配はしてもらえりし、軽い運動を伴う日々のアルバイトをしていれば、運動不足になることもない。

つまり、生きていく上での不自由はこれと言っていないのだが、『ストレスなく、楽しく』生きていく上での不自由は山ほどある——、と特上のうな重を前に沙龍は思った。

「キサさんの作った茶碗蒸しが食べたい！」

うなぎにはオプシオンで茶碗蒸し、というのが沙龍のルールである。

しかし、之信は顔色一つ変えずに言った。

「恐れながら、緑麗様の食生活における要望について百パーセントお応えせよ、とは言われておりません」

之信は、『任務』は命をかけても遂行するが、『任務でないこと』は一切しないのだ。

「深夜のテレビショッピングで欲しい物があるんだけど……」

「僭越ながら、あのよう到低俗な物は為になりません」

教育的指導——。

これも、『任務』に入っているのだろうか。

明けて二日目、死神装束の沙龍は怒りとやるせなさを溜め込んだ顔になっている。

横道にそれた魂魄を虫取り網でキャッチして引き寄せ、それをベルトコンベヤーに乗せ、一息ついた。

「……之信」

「なんででしょうか」

「お前の『任務』の中には、『被保護者の精神状態をより良い状態に保つ』というのは入っていないのか」

「恐れながら、入っておりません」

「……ッ!! もろお、限界だッ! こんな、一週間も続けてれば、充分だ!」

「冥府時間ではまだ二日ですが」

「知ったことか、そんなの! お前の『恐れながら』と『僭越ながら』はいい加減、聞き飽きたぞ!」

「申し訳ありません」

「あ〜〜、悠花の淹れてくれたコーヒー飲みたい！ 水雲宮の風呂に入りたい！ 釣り糸垂らしながら呑気に昼寝がしたい！」

「結構、お嬢様体質なんですね、緑麗様」

ボソつと言ったその言葉は、之信が初めて漏らす私的感想かもしれない。

「こんなのが『我俣お嬢』にカテゴライズされるんだとしたら、某西域の公主様なんて、どう呼べばいいんだ」

「『係長』、仕事、詰まってるようですが」

「ム……」

之信に指摘されるまでもなく、渋滞してきた魂魄体たちが、フラフラと漂い始めている。

「列からはみ出るなっちゅーのに！ そこ！」

沙龍のストレスは、こうして積み重なってゆくのだ。

「ちよつと待てよ……？」

沙龍は、自分は一生懸命虫取り網で魂魄たちを整列させているのに、脇に控える之信がなにもしていないことに今更ながらに気付いた。

「之信、お前とて今は一応、泰山府の臨時職員なんだろう？」

「そういうことになっておりますが」

この冥府内に散らばる泰山府職員の数というのは、予め決められているらしい。

だから、公務員の分と、もう一人分のIDは、今、沙龍と之信が仮に貰っているという形になっているはずである。

「じゃあ、なんで『仮の仕事』をしない？ 少しくらい、私の仕事を手伝ってくられても罰はあたらんぞ」

「恐れながら、本来の任務の方が優先されますので」

「本来の任務を、した試しがあんのか？ お前が張り付いてからこっち、私が誰かに襲われたか？」

「そうならないようにするのが、自分の最大の任務です」

「……うがっ！」

もう、忍耐力とか集中力とか、酵素パワーとか殺菌力とか、全てが切れた。

沙龍は虫取り網を放り投げ、死神用マントも脱ぎ捨てた。

「緑麗様……？」

「もう、やめた！ ストライキだ！ 大体、なんで私がこんな真面目に死神業しなきゃならん。考えてみれば、私が公務を全うする義理も義務もないんだ」

「閣下の仰ってた通りですね」

「……？ 元帥はなんて言ってたんだ」

「二、三日が限度だろう、と」

「ほーう……」

よく分かってるじゃないか、と沙龍は口を歪める思いだ。

「別にストライキをされようが、どんな我俣を仰ろうが構いません。ここで大人しくして下さっていけば」

「栄ちゃんは困るかもしれないがな」

沙龍は、しばらく地べたに寝そべって、一服していた。

恐らく自分の作り出したであろう上海の夜景が、周囲三百六十度を彩っている。

ベルトコンベヤーを止められ、行き場をなくして困いの中で漂う魂魄の光が、

そのネオンの光と重なった。

魂魄たちは明確な色は持っていないが、個体によって、かすかに赤みがかつたものや、淡い青色をしているようなものがある。

発光具合も様々で、弱々しく光るものもあれば、自己主張の強い光を放つものもあった。

上海の夜景に重なったその光は、蛍のようにも見える。

綺麗だな——、と沙龍は思った。

退屈——、と言えば大いに退屈である。

しかし、沙龍がなによりも耐えられないのは『外』の状況がなにも分からず、ただ護られているだけの自分——、である。

九雷が何故こんな方法を取ったのかも分からない。

彼の表情からは、なにも読み取れなかった。

抑えた感情、抑えた口調で、九雷自身が隠しているのだから仕方がないのだが、心が通じ合っている時はなにも言わなくても分かるものだ。

それが分からないということは、今はやはりすれ違っているのだろう。

(もー、キサさんに泣きついちゃおっかな……)

しかし、木佐とは喧嘩したままだった、ということを出した。

(あの状態のキサさんは、結構、長引くんだよな……)

そう思うと、自分の味方はもう居ないではないか、とも思う。

SOSを出せば助けしてくれるであろう仲間は居ないことはないが、そのSOSを出せない性格だから、沙龍は自力本願になったのである。

テレビゲームに飽きて、夜の散歩に出ることにした。

散歩といっても、宿舎前の石段近辺をうろろしながらブーツと夜景を眺めているだけなのだが、之信が居ないので少しは解放感がある。

之信は、定期連絡のために支部のパソコンを借りに行っているようだ。

この宿舎近辺には、泰山府君御用達の『五芒陣』がギツチリと張られているので、万が一なにかあっても大丈夫と判断したのだろう。

この陣にあつては、亡者はおろか、蟻ですら近付けないという。

「……？」

ネオンの光が一瞬、宙に揺らめいた。

彷徨う魂魄か、と思った。

魂魄ならば確保しておかないと。放置しておくで亡者になってしまう。

沙龍は虫取り網を取りに戻ろうとしたが、よく見れば、その光は魂魄ではなく、蝶の鱗粉である。

ネオンの光をかすかに反射して、一匹の蝶がたどたどしい軌跡を作っていた。なんとも場違いというか、ここが水辺か野原で、この蝶が紋白蝶なら、風光明媚といえなくもないのだが――。

（あれ……？ 蝶は五芒陣に入れるのか）

沙龍がそう思った時だった。

心許なく舞うターコイズブルーのような色をした蝶が、やや上空から線のように走った鋭い殺気の上に掻き消えた。

「……!？」

いや、消えたのではない。

喰われたのだ。

万国共通の自然界のルール、食物連鎖が適用されるのは、冥府といえど例外ではない。

上海の夜景と同じ色をしたカラスが、見事な滑空で地表に降り立ち、『ゴックン』と言わんばかりに、ダイナーを終える。

そのカラスが、沙龍を見た。

「……」

普通のカラスにしては一回り大きい。

沙龍も目を細めて、そのカラスを見つめた。

『五芒陣』という強力な結界の中に、いとも簡単に入り込んできた蝶。

そして、その蝶をあつと言う間に捕食したカラス。

明らかに、この現象はおかしい、と気付かなければならない。

しかし、沙龍は動かなかつた。

無理矢理、理由をつけるなら、『これ』はここにあってここにはないもの――。

例えば、幻影や幻覚の類だと思つたからだ。

「よっ！ 探したぜ」

「……ッ!？」

カラスが喋つた、と驚くのを乗り越して、沙龍は『何故、ここに!？』と叫びそうになつた。

「よりによつて、ここに逃げ込んでるとはねえ。元帥さんもどういうつもりなんだか……、いや、面白くなってきやがつた」

「ルシファー―猊下……?」

「あん?」

「日焼けサロンにでも行ってきたんですか」

それは沙龍の精一杯の冗談である。

カラスが乾いた笑いを見せた。

「仮の姿だ。イケメンの方じゃなくて残念だろうが、勘弁してくれ」

「さっきの……蝶は?」

「ああ。ありや、ラファエルの斥候だぜ。気付かなかったか?」

その名に、聞き覚えはない。

しかし、天使であることは間違いないだろう。

「つまり、天使にも、悪魔にも、私の居所はバレてるってことか……」

「さて、それはどうかね」

「……?」

ルシファーの謎のような返答。

「しかし、やっぱあの男、アホだぜ。冥府なんて、俺の庭みたいなものじゃねえ

か。もしかして、だから安全、とでも思ったのかね？」

カラスがヨチヨチと歩いてきて、小首を傾げる。

石段に座っていた沙龍は、今なら、背中の帯に仕込んでいる聖魔剣で一刀両断できる——、と思った。

しかし、ルシファーは沙龍のその思考を読んだ。

「そう慌てなくても、ちよいと話しに來ただけだって」

「その『お話』こそが、猊下の最大の武器でしょうに」

「え？ そんなに話上手でもないんだけどな。床上手って言われる方が嬉しいワ—」

沙龍はその冗談には付き合わなかったが、この際、とことん話してみるのかもしれない、と思った。

もうすぐ之信も戻ってくるし、カラスが不穏な動きを見せれば斬ればいいだけの話だ。

「で、話題はなにを……？」

「そうだな。『熟年離婚』についてってのは？」

「……は？」

「いや、危機なわけよ。俺ンとこ。最近、またしても浮気がバレちまつて」

「ほー……」

「俺のカミさんもなあ、新婚の頃はめちやくちや可愛いかったんだが、今じゃ、すっかり鬼嫁よ。多少の浮気は目エ瞑ってくれてたんだが、この前、堪忍袋の緒が切れたらしくてなー。まー、怖いコト怖いコト。相手のカノジョなんか、怒り狂ったカミさんに殺されかけて、ついでに俺も殺されかけたっーワケ」

「そりや、一万人斬りしようって人の奥さんなら、その怒りは当然だと思えますが」

「まあ、女の立場からすりや、そうなんだろうけどよ。あんたも男の立場になつて考えてみてくれよ。数百年通つて、やーくつとの思いで口説き落としたんだぜ？ その苦勞つての、少しは報われてもよくねえか？ しかも、俺の浮気なんて、年中行事みたいなもんだぜ。それを、おめー、今更じゃないか？ 俺ア、なんでカミさんがあんなに怒り狂ったのか、不思議でしょうがねえよ」

「奥さんが怒ったのは、『浮気』じゃなかったから、なんじゃ？」

「別に『本気』でもないんだがな」

「数百年かけて口説こうっていう意気込みなのに？　だとしたら、それは『仕事』？」

「まあ、半分はそうだな。今回ばかりは、仕事なのに、ちよいと入れ込みました俺が悪かったのかもしれないねえ」

「悪いと分かっててするんですねえ……。なんででしょうねえ……」

「それは、ホラ、体の構造の違ひよ」

開き直るカラスを前に、沙龍が苦笑する。

このタイプとは、呑み友達として出会いたかった。

本来のルシファーが狡猾な大魔王にせよ、今、ひょうきんに喋っているこのカラスはどこまでも陽の気質を持っている。

「どうもな、俺ア、『心底惚れてる男が居る女』ってのに弱いよ」

「エッ!?　振り向かない女マニア!？」

「いやいやいや、そうじゃない。つまりな、もう惚れた男のためなら命も惜しくはないっていう女を、俺の方に振り向かせる過程がたまんねーわけよ」

「ああ、そういう略奪系ですか……」

「この前口説き落としたアニーちゃんってのも、最初は『天地がひっくり返ろうとも、貴方になんかついて行きません！』って感じだったぜ。それを、俺があの手この手で、二百年くらいかけてようやく口説き落としたんだが……、今回の仕事でしばらく万魔殿には戻れないから、逃げられちまうか、それともカミさんに殺られてるかもしれねーなあ……」

「それはお気の毒に」

「うん、まあ、それは置いといて」

と、カラスの両羽が、言葉通りの仕草をする。

寄席の経験もありそうな元天使、現魔王は、やはり当初の目的を忘れてはいない。

「どうやら姫さんは違うな。『心底惚れた男』が居ても、そいつのためなら死んでもいいって献身的なタイプじゃない。『死ぬんなら、一緒に死にやがれ』っていうタイプだ」

「……」

「実はな、俺はこのタイプを口説いて成功した試しがねえ。自分で死に様決めちまってる女は、端から他の男の言うことなんか聞いてねえのよ。どうだ？ 心当たりがあるだろうか？」

「……」

「だからな？ あんたを口説くには、俺様の魅力の虜にするよりも、あくまでも『ビジネス』で話を持っていった方が良さそうだと見たが、どうだい？」

「ビジネス……？」

「そうだ。俺は『黄龍』に用がある。姫さんごと万魔殿に連れて帰ろうと思ってる。で、あんたはどうなんだい？ なにがなんでも嫌だっけんなら、その理由を教えてくれねえか？ 障害は、俺が一つずつ潰してやる」

「……」

この論理展開といい、有無を言わさぬ圧力といい、まるきり誰かのようだ――と沙龍は思った。

口調こそ違いが、この傲慢な姿勢は同じである。

あの、陰険総司令官と。

「まず、黄龍の力をなにに使うのか、何故必要なのか、どうやって使うのか、拘束期間がどれくらいなのか——、せめて、それくらいは提示してもらわないと、『是』と言えるはずがない。『それはご心配なく。全部我々に任せて下さればいいんです。ええ、ちゃんと無事に帰れますよ。五体満足の遺体で』なんてブラックジョークを実践されちゃ、たまったもんじゃないしな」

「そりゃご尤も」

「しかし、例えば、猊下が言うように『ビジネス』だとして。具体的な数字を提示されても、それは、あくまでもそちらの『予想』に過ぎない。つまり、私にとっては『ギャンブル』にしかならない」

「フム——」

「そして、自分の住んでいる世界ならまだしも、反対側の世界でギャンブルするほど、私は野心も勇気もない。……これで、答えになりました？」

「成程。よく分かったぜ。余地はありそうだ」

どこに余地があるというのか。

沙龍は、今、はつきりと断ったつもりだったのに、ルシファーはそう考えてい

ない。

「だがな、残念なことに、呑気にビジネスしてられるような状況でもないんだワ、これが。姫さんだつて薄々気付いてんだろ？ 選択肢がなくならないうちに、俺のビジネスに乗った方が賢明だと俺は思うがね」

「時間がない、ということ？ それは何故？ 貴方なら、それすらも分かっていたでしょうに」

「そうだな。分かっちゃいたが、色んな邪魔が入って、解決策を見つけないのが遅すぎたってことだ」

「……」

黒い死神用のマントを羽織った沙龍と、ルシファアの分身であるカラスが、同時に同じ方向を見た。

「残念、時間切れか。また会おうぜ」

カラスがそう言つて舞い上がったところで、之信の足音が迫る。

「緑麗様、ご無事で——!？」

「騒ぐな、之信。無事だ」

沙龍の手は、それ以上近寄るな、と言っていた。

「何者ですか？ 今のカラス」

「……」

沙龍は答えなかった。

足元に微かに浮かび上がっている『五芒陣』の輪郭を見つめている。

「緑麗様……？」

「忘れてたよ、之信」

「はい……？」

「過保護な情人の腕の中でまどろみ過ぎて、私は、自分がかつて『老板』ラオハン（ボスの意）と呼ばれていたことを、忘れていたよ、——董天！」

言い様、沙龍は背中の聖魔剣を抜き去り、之信に、いや、董天に斬りつけた。

一刀目は、頭上をわずかにそれたが、沙龍の二刀目は、董天の耳元を掠った。

しかし、背後の手すりに深く斬り込んでしまったので、それ以上は斬り下げることはできない。

止まった剣筋を確認して短く息を吐き、董天は商売人のような追従笑いを見せ

る。

「お見事です。沙龍様」

変化の術だろう。

之信の筋肉質な体は影も形もなくなり、今は董天の瘦身が沙龍の目の前にある。

「野郎……」

「ところで、いつから分かってたんです？」

「最初からと言いたいところだが、今分かった。ルシファーと接触させたのも、わざとだな？」

「……御意」

「このまま、耳をそぎ落とされなくなかったら、全部説明しろ」

「その前に、私が沙龍様の動きを止める方が早いと思いますけどね」

董天の言う通りだろう。

額を押さえられてしまえば、沙龍は恐らく動けない。

四方将神には遠く及ばないが、董天は青龍の力の一端を使えるのだ。

「フン……」

沙龍は怒気を治めて、聖魔剣を背中に戻した。

董天に屈したわけではなく、元から殺す気はないのだ。

「説明はしますが、その前に、何故分かったのか、元教官としては、是非聞いてみたいですね」

「簡単だ。宦官やゲイならまだしも、元帥が自分以外の男と私を二人きりにさせるわけがない」

「ああ、成程。九雷様の性格判断の末、ということですか。でも、それだけじゃちよつと甘いですね」

「その他にも、色々、なんとなく変だな、と思ったんだ。私にくどくど説明させんな」

ムツとした沙龍は、董天のこういう教師気質が昔から嫌いなのである。

董天とて、根っからの教師というわけでもないのだが、沙龍の教官として過ごした数年は、彼の人生の中でも密度の濃いものになっている。

「相変わらず言葉で説明するのが苦手なんです。まあ、いいでしょう」

普段の沙龍は理論よりも直感の中で生きている。それを、董天は誰よりも知っている。

しかし、『蒼龍会』でのし上がるためには、技巧的な言葉も必要だった。

沙龍が時々使う硬い言葉や言い回しは、董天に仕込まれたものなのである。

「で、なにから聞きたいんです？」

「之信ってのは何者なんだ。お前の『仮の姿』か？」

「そうです。他にも、幾つかの団体に、別の姿で所属してます」

「よく、長年、バレないな？ 出生から経歴まで、全て作り上げてるんだろ

う？」

「之信に限って言えば、実在の人物です。戦死したのを、生きていたことにしてるだけですよ」

「途中で成り代わった——ってことか。まさかお前自身が殺したんじゃないだろうな」

「任務ならしますが、之信は雅山戦役で間違いなく敵将に殺された男です」

「フン……。じゃあ、紫凜と懇ろだったのは、本物の方か？ それとも、成り代

わった後のお前の方か？」

「さすがです。そこまでバレてました？」

董天の糸のように細い眼が、さらに柔らかな線を作る。

この営業スマイルだけは沙龍もついに習得することはなかったが、しなくてよかつたとも思う。

こんな不気味な笑い方をする奴とは絶対仲良くはなれない、と沙龍は思うのだ。

「それは、私一人のことではないので、ご想像にお任せします」

やはり、早々にこんな隔離された場所からは脱出しなければなるまい。

「董天、私はもう上海の夜景なんぞ見飽きてるんだ。力尽くでもここから出て行くぞ」

しかし、之信ならなんとかなったとしても、董天を出し抜くのは難しいかもしれない。

ここから、沙龍の孤軍奮闘が始まった。

15 陽輝と小龍

しばらく、沙龍の居ない帝都を俯瞰してみよう。

九雷に西方神界の捕虜を押し付けられる形になった四方将神二人は、普段の業務をこなしながらのことなので、この件には忙殺されていると言っている。日本に居る白帝君は、幸いだったかもしれない。

一方、軍部の面々は、九雷が捕虜の件を公にしない以上、特務を除き、概ね暇である。

陽輝も、慌しい特務の動きは知っていたが、自分は首を突っ込む気にはならなかった。

身重の妻が居なければ、退屈を持って余して戦場に赴いてみるのもいいのだが、せめて赤ん坊の顔を見るまでは死ねない、と普通の男のように思っているのだ。

それだけではない。

艶事の方面でも身を慎もうと思っっている陽輝は、しばらく、馴染みの妓楼に逗

留するのにも控えていた。

奏欽は、自宅で普段通りに過ごしている。

神仙の身籠りは三年半という長い年月を要するので、しばらくは不貞の夫も真面目に働き、真面目に家に帰るといふ日々を送ることになるだろう。

何事もなければ——、という前提での話ではあるが。

水雲宮に遊びに来た陽輝は、小龍に突付かれながら、手酌で晩酌している。

「力天使長ガブリエル……、ねえ。確か、えらい胸のデカイ女だったような……」

……？」

書斎で仕事をしている九雷に、どんな人物だ、と聞かれての返答である。

九雷は、小龍が先ほど持ち帰ったファイルを閲覧している。

赤帝君が持たせたもので、捕虜の少年マルティエルが自白したという内容が記されていた。

盗聴の恐れがあるので、この件に関しての連絡は、電話やメールを徹底的に避け、こういった原始的な方法でやりとりしている。

「数十年かけて西方神界に出入りしながら、覚えている唯一の記憶がそれか」

九雷は、苦笑した。

「他に覚えるべきことでもあんのか」

「『四大天使』の一人だ。『四大元素』のうちの『水』を司る。特筆すべきは、天使軍の中では一番の鷹派だ——と、当時お前の作成した報告書の記述にある」
「そんな昔のこと、いちいち覚えてねえつての」

数千年前のことである。

確か、玉帝直々に言い渡された仕事だったが、諸国放浪しながらの遊び半分だった。

「その女がボスか？ よく口を割ったな？ 誰が尋問したんだ？」

「さあ……。赤帝自身か、他の四神府のスタッフだろうが……。いや、真武君のサインがある」

「奴さんか……。ということとは、なったのか、あの『暗黒大魔王』に……」

「さすがに、内通者の存在までは知らない、か。しかし、そうであれば、やはり天使軍はシロだな」

「なあ、九雷。あの『^{チーチャ}起家』は一体どういうつもりなんだ？」

既に、刑吏府まで東王夫の近辺捜査に動いている段階だが、陽輝は念のために符牒を使った。

「結局、沙龍を帝都から、いや、天界から追い出したいんだろう」

「それだけのために、こんな手の込んだことするかね……？ ルシファーと手を組んでまで」

「『それだけのこと』なのに、宰相や敖吉を使っても出来なかったから、西方魔界と手を組んだんだろう」

「じゃあ、ルシファーの旦那の目的は？」

「それが分かれば苦労しない……」

全体像を簡単にかいつまんで理解しようとする陽輝に、九雷は、少々辟易した。

陽輝は、こういうことは全部九雷任せにしているところがある。

少しは自分で考えろ、と言いたいところなのだが、組織関係としてはこれが一番正しい。

『大将』は、戦場を駆ける鷹であればいいのだ。

「で、お前のプランはどうなってんだ？」

小龍に噛み付かれた手を振りながら、陽輝が聞いた。

「蟠桃会で東王夫を押さえる」

「できんのか？ 西海龍王でも、二世紀かけて追った結果が、西王母付きの侍女から聞き出した自白だけだろ？ 用心深いあのジーサンのことだ。きつと何本も逃げ道用意してるぜ？」

「東王夫を押さえないと、ルシファーにいつまでも居座られるだけだ。証拠がないなら、作ればいい」

「……悪魔はどっちだ」

陽輝は、鼻で笑った。

九雷のことだから、かなり強引な手を用意してあるはずだ、と思ったのである。

「しかしなー、俺が不思議なのはよ……。緑麗が、当時、具体的に動いてもいない敵をどうやって予測し得たのか、ってことなんだよな」

「強いて言えば『勘』だろうな」

「『勘』？ 勘かよ？ また、そりゃ、不確かなものに振り回されて、西海龍王も気の毒に……」

「だが、実際、当たっただろう。理由も証拠もないのに、緑麗には分かっていたんだ。いずれ、東王夫が天界を裏切るであろうことがな」

「原理主義は分からねえ……。野心とか怨恨でもありや、分からねえまでも、納得はできるんだけどな」

動く理由は、人それぞれとはいえ、陽輝には、東王夫のやろうとしていることが命をかけてまでする仕事なのか、と思えるのだ。

例えば、黄龍を追い出した東方天界で、東王夫はなにをする気なのか、といえど、別になにをするわけでもないだろう。

ただ、本人がすつきりするだけで、その自己満足のために禁を犯して西方世界と取り引きをし、各方面と衝突するリスクを冒す、というのが陽輝には徹底的に解せない。

「敖広がな……」

九雷がその名前を出した。

「ああ。あの熱血漢がどうした……？」

「同じく、東王夫を敵視していた、というのは話したよな？」

「それは、お前が青龍の力と共に受け取った『情報』ってだけだろ？」

「そうだ。証明する手立てはない」

仮に、それが真実、敖広の記憶だと証明できたとしても、『敖広の記憶ではこうなってます』と言ったところで、司法の場ではなんの効力も持たない。

そもそも、九雷は未だに自分が『青帝青龍雷君』であることは伏せているのだ。

麒麟打倒を為しえた今は、積極的に隠す必要もないのだが、その理由は幾つかある。

一つには、龍族の誉れともされる『青龍』を、龍族ではない者が担っていると
いう事実を周囲が知れば、賛否両論もあろう、ということだ。

つまり、世間の風評が煩わしい、という、九雷の性格上のことである。

ただでさえ、元帥位というだけで要人扱いされるのに、これ以上、面倒な地位
など要らないと思っっているのだ。

そして、もう一つの理由は、今回の件に関係する。

敖広と水面下での因縁があったらしい東王夫が、敖広のその情報を受け継いだ者が居ると知れば、更に用心深くなってしまふからだ。

「敖広の東王夫評には、当然、奴の主観も入っている。どこまで信用していいのかは分からん」

「確か、その二人は『雅山戦役』で一緒だったな……?」

「ああ。叩けばなにか出てくるだろうな」

「で、叩いてみたんだろ?」

陽輝は、既に九雷が答えを得ているのを確信して言った。

「あの戦役で、百人ほどの天界軍の将兵が行方不明になっている。全員、戦死扱いで処理されているし、そう処理したのは東王夫だが、敖広はその行方不明になった者たちがラボに被験体として提供された——と確信していたようだ」

「成程……。そういうことかい。提供させたのは、恐らく敖広だな」

その辺りの事情は九雷が受け取った記憶の中にはなかった。

敖広はこの秘事を墓の下まで持っていったわけだが、図らずして『感情』だけ

は残ってしまった。

それを九雷が不審に思い、過去の戦史を調べ上げた結果、そういう事実が出てきたのである。

「まあ、今更あそこの悪事をバラしたところで、軍部も一緒に困るだけ……ってのはあるが」

「だから、高を括ってるんだろう」

「キューー！」

いい加減、小龍と陽輝の子供のようなバトルが白熱化してきたので、九雷は小さな龍を保護すべく席を立った。

尻尾を掴まれて大回転させられていた小龍は、へろへろになっている。

「お前の愛情表現は、悪ふざけが過ぎる……」

九雷に救出された小龍は、涙の滲んだ瞳で恩人を見つめ、陽輝に対しては炎の宿った目を向けた。

陽輝にしてみれば、小龍を構うのは、小さい子供の頭を——多少強引に——撫でるくらいの感覚なのだが、その愛情は一ミリも通じていない。

「お前は過保護過ぎると思うけどな。……なんで沙龍が居ねえんだ？」
陽輝はやっと、この水雲宮に居るべき人物のことを口にした。
そもそも、陽輝は、沙龍と呑みに来たのだ。

「……」

案の定、この話になると九雷は急に口を閉ざす。
しかし、陽輝が責めるように身を乗り出す前に、

「一番安全な処に隠した」

しぶしぶ答えた。

「隠したって……。お前、そういうことしてると、愛想尽かされるぞ」

「もう尽かされてるかもしれん」

「おいおい……」

二人だけで酒を呑んでなにが楽しいのか、と思う。

陽輝にとっては、黙々と杯を開ける九雷よりも、沙龍や九玄の方がよっぽど呑み友達としては貴重なのだ。

「あいつは、お前が思ってるほど、弱かねえよ。いや、お前から逃げた緑麗より

も、よっぽど骨はあると俺は思うがね」

「……」

「なんだよ？ ルシファアの旦那から護り切る自信がないのか？」
そんなことはない。

自信は、ある——、と言うだけなら、言ってもいい。

しかし、九雷はルシファアを過小評価も過大評価もしていない。

あの魔界の盟主と差しでやり合って、楽に勝てるはずがないことは充分、分かっていた。

「……」

重い沈黙だけが、九雷の心境を語っている。

しかし、沙龍に愛想を尽かされ、陽輝にまで嫌われるのは九雷も望んでいない。

手持ち無沙汰になっている陽輝に、小さなボタンのようなものを放った。

「なんだ……？ 菓莢？」

確かにそれは菓莢だったが、陽輝が初めて見るタイプのものだった。

「俺の生家に落ちていた」

「『38スペシャル弾』に似ているが、全く別物だな」

「調べさせたら、ここ数年、座天使軍の制式採用になっている銃の薬莖だそう
だ。しかも、微かに硝煙反応が拾えた。少なくとも一ヶ月以内のことだ」

「座天使……？　おいおい、ちよつと待てよ？　捕虜は力天使軍だったんだ
ろ？」

「そうだ。つまり、天使軍は一枚岩じゃないらしい」

「座天使軍の指揮官は……、ああ、あのちよつとイツちやつてるロリコンか。成
程、ガブちゃんと共同戦線張ってるってワケじゃなさそうだな」

「ああ。多分、ガブリエルの部隊と鉢合わせたんだろう」

「やれやれ、天使軍は内部分裂、悪魔共はラブコール、おまけに、獅子身中のじ
いさんは未だ内通の証拠も掴めず、か。たまんねえな」

「俺が逃げ出したい、と言った意味が分かったか」

「フン……」

逃げる気などさらさら無いくせに——、と陽輝は思った。

「分かったよ。まず、なにからすればいい？　沙龍と呑むのはそれからだ」

翌日、陽輝は小龍と共に街道を流していた。

小龍は、この五行稼動のバイクに乗るのは好きだった。

さんざん陽輝にオモチャにされているのに一緒に居たりするのは、たまにこのバイクに乗せてもらえるからだ。

自分で飛ぶよりも遥かに早いので、風になっているような一体感が気持ちいいのだらう。

小さなヘルメットを被った小龍は、飛ばされないように、陽輝の革ジャンの襟を掴んでいる。

「きゅっふるっふる……」

聞き取れないような声と音程で、鼻歌らしきものまで歌っていた。

今日、機嫌が悪いのはどちらかというところと陽輝の方である。

春めいた景色が続く街道で、天気も良いと言うのに、これから一仕事しなければ

ばならないとくれば、浮かれてはいられないのだ。

「目的は可愛いのに、やることが外道なんだよな。全く——」

「キュ……?」

小龍が丸い目を更に丸くして、陽輝の顔を覗き込む。

「なんだっておめーも、あんな陰険野郎が好きなんだよ?」

自分が嫌われるのはしようがないとしても、九雷が小龍に好かれる理由が陽輝には分からない。

「クウ」

「俺が女だったら、絶対ご免だぜ、あのタイプはよ！」

陽輝がぼやくのも当然で、九雷はそれほど、女性から言い寄られるようなことはない。

地位と容姿だけなら充分女性受けする要素はあるはずなのだが、やはりあの性格では敬遠されるのだろう。

九雷の近辺で、その仕事ぶりに骨抜きにされる部下がたまに居るが、それは圧倒的に男が多い。

「さて——、と」

天空山の峰が見えてきたところで、一旦、陽輝は愛車を停めた。

単独行動ではない。数人の部下は、同じく、天空山の裾野に待機させてある。

懐のS & W スミス ウェンソン M29を抜いて、フル装填されてあるのを確認し、ツーリング

が終わってしまったことに残念そうな顔をしている小龍をむんずと掴んで、上空へと放り投げた。

「ウギュー!？」

「上からちよつと見てきてくれ。多分、ムサイ野郎が数人、物騒なモン抱えてここそしてるはずだ」

九雷の予想ときたら、今まで外れたことがない。

いつも、どうして分かるのか不思議に思うのだが、こればかりは、頭の出来が違うという本人の弁を認めざるを得ない。

九雷は、東王夫の次の行動など手に取るように分かるようだ。

ただ、分かりやすい行動は取ってくれないので、こちらで、それをお膳立てしなければならぬ。

『針の穴の綻びすら気になる東王夫のことだ。きつと、奴は碧霞元君の行動を見守っている。碧霞元君が下山するようなら、奴が動くこともあるだろう』

九雷は、そのために幼馴染みを「使った」。

しかし、天空山をただ下山するくらいでは、足りない。

一大イベントに出席するため――、更に、それが皇室関係者の説得で、と分かれれば、東王夫も動くはずである。

『動かなければそれでもいい。碧霞元君の暗殺未遂事件を形だけ作ってきてくれ』

天真は、自分が頼まれたことに、命の危険というオプションまでついていることは知らないだろう。

気の毒に、と陽輝は苦笑するしかない。

16 四神府の内幕

火雲宮の軍事エリアにある四神府は、東西南北に一棟ずつ、さらに、その中央に長官室ともいふべき建物がある。

それぞれの棟は、それだけで野球場ほどの敷地を持っているので、四神府全体の総敷地面積はその五倍という広さになる。

黒塗りの漆喰の壁を持つ北棟は、黒帝玄武佑君のオフィスである。その北棟の一室にて。

「一体……」

木佐小次郎は、静かに怒っている。

「あ、曹ちゃん、コーヒー、もう一杯頼むワ」

「はい、ただいま」

曹昌は、しゃきしゃきと動きながら、来客に対応している。

その傍らで、上官の様子には常に気を配っていた。

「君たちときたら……」

「いや、あんた、コーヒー淹れるの上手いね。泰山府の中にも美味しい店があるんだけどよ。そのバリスタ顔負けだぜ」

「えー、いやー、そうですか？ そんな風に言われると、嬉しいですねー」
飲食業の経験はないのだが、曹昌のコーヒーは、沙龍にも評判だ。

元から凝り性なので、自力で色々調べて、豆の選び方から、挽き方、お湯の注ぎ方までこだわっている。それが、こうして実を結べば、やはり嬉しいものである。

「ここは喫茶店じゃないと、何度言ったら……」

そろそろ、上官の怒りが爆発しそうなので、曹昌はサッと公務員から離れた。

「あ、そうそう、この前貸してもらったDVDなんだが……」

しかし、公務員の方は呑気に会話を続けている。

「……分かるんだい!? この死神くずれが!!」

「……………」

恐ろしくも美しい顔を目の前に突き出されて、公務員はしり込みするどころ

か、感心したような溜息を漏らした。

確かに、これは見惚れてもおかしくはない。

しかし、ハイパー・モード寸前の上官に、曹昌は青くなっている。

ついこの間も、ガスの元栓が緩んでいたせいで給湯室を爆発させてしまったという、一大へまをやらかしたばかりなのである。

木佐のオフィスはその煽りを食らって、半分、壁がなくなってしまった。

今も、その壁は強力ガムテープで繋げられている。

「大体、曹昌！ 君がそうやって、来る客来る客、懇切丁寧にもてなすから、客じゃない奴までそれが当たり前前だと思って、凶に乗ってしまったじゃないか！」

「す、すみませ〜ん」

「いや、曹ちゃんが悪くないだろう。こいつは当然の仕事をしてるまでで……」

「で？ 一番凶に乗ってる公務員君、君は一体、なにをしに来たんだ」

公務員は、すごすごと退散する曹昌を尻目に、煙草をくわえた。

「いや、仕事しなくていい月間で、暇なんで」

「どうして暇だと僕の所に来るんだ。馨じゃあるまいし」

「まあ、……なんとなくか」

数少ない知り合いのうち、何故木佐の所に油を売りに来たのか、と言えば、やはり、なんとなく居心地がいい、ということだろう。

それ以外の説明は、公務員にはできない。

南の棟の方が、担当官は誠実で親切だし、秘書官は色気満載の美人だし、よっぽど居心地はいいはずなのに、こればかりは相性というものがあるのだろう。

「あ、そーそー、来月からしばらく俺、帝都を留守にするから、曹ちゃん、『笑傲江湖』（※中国の武侠小説。テレビドラマにもなっている）の録画頼むワ」

公務員がそんなことを言っていたので、彼が帰る時には、木佐も声を掛けた。

「気を付けてくれよ。君になにかあったら馨が悲しむ」

危険を伴うような遠出仕事だと分かったのだらう。

「そんなに大事に想ってんだったら、仲直りしてやれよ。この前、落ち込んでたぜ」

「……」

木佐は、頬杖ついていた顔を公務員に向けて、明らかに『余計なお世話』とい

う目で睨んだ。

「大体、なんで喧嘩したんだ？ あいつも今、色々大変そうで、あんただけが頼りって感じなのに」

「だからだよ」

「……？」

木佐は説明したくなかったのだが、公務員が話を聞く体勢のまま動かないので、仕方なく言った。

「前は、あんな他力本願な奴じゃなかったんだ。それが、見えて、歯痒い」
九雷と出逢ってから沙龍は、明らかに変わった。木佐は、それを心のどこかで嫌悪している。

以前の沙龍なら、一人でどこでも逞しく生きていけるような強さがあった。しかし、今の沙龍にはそれを感じない。

伴侶を得たのはいいいことなのだとも思うが、それは自分の知っている『甲斐馨』ではないのだ。

言い知れぬその苛立ちを本人にぶつけてしまったことは反省しているが、この

苛立ちは、沙龍が木佐を甘えて頼って来る限り消えないだろう。

「ふーん？ 要するに『一人でやれよ』ってことか？」

そう言われると、それも違う、と感じる。

では、なんだろう、と薄々気付いている答えは、人の話を聞いてるんだか聞いてないんだか分からないような、こんな男に言うべきではない。

「もう、いいさ。なんでも——」

面倒臭くなつて、木佐は『早く帰れ』と言外に言った。

その視線を受けて、公務員ものっそり背を向ける。

「あ、ちよつと待ってくれ」

木佐の口調は、少し芝居がかつていた。

そして、今書き終えたといった感じの、葉書大の紙片を投げてよこす。

「……なんだ？」

公務員は、『生還率は竹下政権時代の消費税率くらい』と上司に言われた任務に赴くにあたって、この四方将神が自分の身を案じてお守りでもくれたのか、と勝手に妄想をしたのだが——、

「コーヒー代の請求書」

やられた——と、公務員は思った。

お金に対する執着度は、どうやら木佐の方が上だったようだ。

一方、こちらは白塗りの壁に朱の瓦屋根を持つ、南の棟の一室である。

終業時間も過ぎ、他のスタッフはとっくに帰宅している。

しかし、誰も居ないのは分かっている。紫凜は極力、声は立てないようにした。

赤帝君がそういう密やかな感じが好きらしい。部屋も真っ暗にする。それは、昔から変わらない。

床に散乱してしまった書類は、後でもう一度プリントアウトしなければならぬ。いだろう——、そう思ったところで、一瞬、意識が飛んだ。

「大丈夫か？ 紫凜」

「え、ええ……」

しばらくは、この夜陰の中で息を整える。

最近になって、また情交を結ぶ関係になったのは、紫凜にとっては嬉しいことだったが、赤帝君にとっては愁苦でしかない。

にも関わらず、紫凜の肢体を求めろ。

悪循環だと分かっている、そこから抜け出せる術はないのだ。

(可哀想な星様……)

紫凜は、そう思っている。

だから、なにも言わず、この密やかな逢瀬を重ね、彼が望むままに一時の慰めを与えているのだ。

(上官が望む場合、こういうことをするのは下士官の仕事の一つだって大真面目に教えられたことがあるけど……)

それは、紫凜がまだ軍属になったばかりの頃で、女性士官の心得として教わった。

当時はまだ軍属の女性が少なく、紫凜のように見た目の華がある者は、戦士としてよりも、敵を籠絡するスパイとしての能力が期待された。

育成カリキュラムの中には、男性の心理や身体機能についての講座まであった。

所謂『房中術』の中の『閨房』に関する講座である。

紫凜がそこで得たスキルは、色んな場面で大いに役立った。

今でも、どこかの妓楼で雇ってもらえれば、そこそこ稼げるのではないかと、思うほどには自信がある。

勿論、閨房の技だけではなく、一通りの武術も身に付けたが、紫凜は血を見るのは好きではない。

（今ではセクハラになっちゃうのかもしれないけど。星様をお慰めするのは、やっぱり私の仕事の一つだわ）

赤帝君の端整な横顔を見ながら、紫凜はそんなことを考えていた。

「あの捕虜の少年のことだがな……」

オフィスラブには暗黙の了解が幾つかある。

情事の直後に仕事の話は野暮だ、と紫凜は自分のルールで思っているのだが、赤帝君はその辺りには疎い。

「九雷元帥は、いずれ始末するつもりだろう」

「……」

「なんとか命だけでも助けたいんだが——、どうしたもんかと思つてな」

（お優しい星様——）

紫凜は、少々皮肉っぽく思つた。

これのせいで、今まで、何度も手痛い経験をしているはずなのに、彼の苦悩と慈愛は尽きることを知らない。

「星様のなさりたいようにするのが宜しいかと思ひますわ」

紫凜は、その苦悩を聞くだけである。

赤帝君も、それを望んでいる。

「そうか……」

「今日は、お屋敷にお戻りにならないんですの？」

普段から勤勉実直な赤帝君なので、外泊が多くとも、こういった密事を疑われることはないだろうが、お屋敷の侍女たちはさぞやきもきしていることだろう——、と紫凜は思つた。

火雲宮の本殿でも、彼が登城する時は、何故か女官の数が多くなるというくらいだ。

「別に、どっちでもいいんだが……」

紫凜の白い手を取って、再び、抱き寄せる。

窓外を少し強い風が叩き、どこから飛んできたのか、薄紅色の花びらが舞っていた。

「私は……、酷い男だな……」

そんな赤帝君の独り言に、紫凜は否定の微笑みを返した。

「星様が酷い男だったら、世の男は、間違いなく全員極悪人ですわね」

想い人が決して手に入らぬと分かっているから、別の女の人肌で、心と身体の隙間を埋めようとする——、それが、そんなに酷いことだろうか。

それを当然だと思つて、女を食い物にする男も居るし、叶わぬなら強引に奪う男も居るといふのに。

紫凜の日常はいつもと変わらない。

定時に仕事を始めて、大体、定時に終業する。

最近は、上官に付き合っつて遅くなることもあるが、それでも、概ね平穏な日々を過ごしていた。

「あら……」

出先から四神府へ戻る途中、いつの間にか、城下町の梅林が満開であると気付いた。

朱雀門はまだ遙か先で、この辺りは帝都の城壁の中とはいえ、郊外を思わせる丘陵が続く道だ。

紫凜が足を止め、薄紅色の景色の中に佇んでいると、そこに澄んだ声が掛かった。

「そうしていると、梅花の精のようだな」

これが男性の声なら、ただの軟派である。紫凜も適当にあしらっただろう。しかし、その声の主は、自身も花の化身を思わせるような美女だった。

花は花でも、こちらは梅花のような可憐さや可愛らしさとは無縁の、単独で

凜々しく咲き誇る一輪の薔薇を思わせた。

「まあ、九玄様。お世辞でも、光栄ですわ」

紫凜は、にこやかな笑顔をその麗人に向ける。

たまに四神府に現れるので、九玄とは知り合いなのである。

「私はお世辞は言えない人間でな。そのせいで、損をしていることが多い」

「フフツ、それは、お世辞を言わなくても生きてこれた強い女のセリフですわ、九玄様」

九玄は仙界の特使としてたまに帝都を訪れている。

その仕事のついでとして四神府にも挨拶に寄るのだが、真武君に会いに来ているのだろう、というのは赤帝君も紫凜も理解していた。

（同じ報われない恋をしていますが、こちらは、キリツとシャキツと、新鮮なレタスのようなお方だわ）

紫凜はそう思っている。

その紫凜に言わせれば、赤帝君は『ドロドロと煮込みすぎたシチュー』となるかもしれない。

男女の違いなのだろうか。それとも、紫凜が九玄を美化し過ぎているだけかもしれない。

「九玄様は、今、お帰りですか？」

「ああ。今から崑崙に戻るころだ。沙龍も留守だったし、肩透かしを食らった」

「あら、そうでしたか」

紫凜は当然、沙龍が帝都にも水雲宮にも居ないことを知っているが、知らぬ振りをした。

「あの……、九玄様？」

「ん、なんだ？」

「私、職場に戻る途中だったんですが……、梅林はこんなに見事ですし、花の精のようだななんて言われていい気になってしまいました、なんだか、もう仕事はどうでもよくなってしまいましたわ」

急にそんなことを言い出す紫凜が、呑み友達が捕まらなかった自分を慰めてくれているのだと、九玄は気付いた。

心憎い女性である。

「お時間があれば、私たちも花見酒などいかがでしょうか？」

そろそろ夕暮れ時で、仕事を終えた男女の姿が周囲にもちらほら見える。

出店の提灯も見え始める時間である。

九玄は、その提案に喜んで乗った。

人生経験を積んだ女が二人揃えば、恋愛の話にもなる。

紫凜は、艶やかに笑いながら色んな話をした。

「私が軍属になった頃は、もう、逆ハーレム状態ですわ。流し目くれただけで、

堅物の士官候補生たちが簡単に引っ掛かりましたわよ」

給料のほとんどは美容関係に使っていたこともあるとか、女性士官の育成カリキュラムには『誑し込み』という項目がちゃんとある、とか、どこまでが本当なのか分からぬ話を九玄に聞かせる。

話術も巧みだった。

なによりも、人を安心させるような雰囲気や紫凜は持っている。

これは、母性に近いのではないか、と九玄には思えた。

「きつと、紫凜殿は私より達人だな」

「でも、結局、仕事ですわ。それに、そういうのって、数千年もやってれば飽きるものなんですの。結局、純愛に戻るんですわ」

「ほう……」

春の夜風が、九玄が飲み干した杯に、花びらを一枚落とした。

そこに、パワーを幾分落としたエンジン音が聞こえてきた。

「イイ女が居ると思って引き寄せられてみたら、九玄姐さんじゃねえか。……風流だねえ。梅林の下で花見酒かい」

九玄の目の前でバイクが停車し、車上の陽輝が声を掛ける。

「陽輝大将、貴方も一杯呑んでいかれるか？」

「じゃあ、一杯だけご相伴に預かるか。一応、まだ仕事中なんでね」

「……」

紫凜は、酔った半眼で、いきなり現れた陽輝を見つめている。

「その姉さんは……？ 見たことある顔だな？」

「ああ、紫凜殿だ。赤帝君の秘書官をしている」

「ろうもおく、初めまして、ですわ。こんな体たらくで失礼しますわ」

「ご機嫌だな。というか、もしかして、自棄酒の方か？」

「あら、確かに、そうかもしれないませんわ。なんと申しまひようか。人生の虚しさ
とゆうものを感じちやつてるところですわ」

「ああ、そうゆう時もあるよな。だが、俺の嫁さんよりは確実に人生楽しん
でると思うぜ？ 下戸だからな」

「あら、それも切ないですわね」

陽輝は苦笑しながら、杯を九玄に返して、

「ご馳走さん、変な野郎に絡まれないようにな。……ま、九玄姐さんなら大丈夫
か」

「お気遣い感謝する。陽輝大将こそ、気を付けて行かれよ。酔っ払い運転は免停
だぞ」

「これくらいならせいぜい酒気帯びだ。じゃな」

そう言って、颯爽と走り去る陽輝の背中に、紫凜は呟く。

「ワタクシ、西方軍の大將と初めてお話してしまいましたわ……」

「もう少し、どうにかするといい男になるんだけどな」

「うふふ……。でも、星様には敵いませんわあ」

「そりゃ、あの美丈夫には敵わんだろう」

九玄が笑って言った。

「い・い・え！ 違いますわよ、九玄様。星様の良さは、なんと言っても、あの鈍臭さですわ」

「……」

天下の赤帝君を『鈍臭い』と言えるのは、この秘書官だけかもしれない、と九玄は思った。

17 紫凜の悪戯

嫌な空気がこの東方天界全体を包んでいる、というのは紫凜も感じていることだった。

特に、西方神界の捕虜を監禁しているここ四神府では、その気配は嫌でも察せられる。

（総司令は、何故、あの少年をここに連れて来たのかしら……）

紫凜は、ずっとそれを考えていた。

公にしたくないのなら、特務でもいいし、彼の古巣である諜報部を頼つてもいいはずで、第一、その方が動きやすいだろうと思うのだ。

しかし、四神府も今は天界軍預かりになっているので、元帥位からの命令なら聞かなくてはならない。

（ただでさえ、四方将神は一人欠けてるつてのに、聖様が居ない今、星様と佑様だけでこの有事に当たられていうのは、人使い荒いわ）

そう思っていた紫凜が、赤帝君からとある事実を打ち明けられた時は、狼狽するほどだった。

彼女にしては、珍しい。

「そういうことだから、了承しておいてくれ」

「……何故です？ 何故、ずっと、世間には伏せておられるんです？」
九雷が『青帝青龍雷君』であるという事実である。

玉帝と麒麟を討つため——、と今、説明されたはずなのだが、紫凜が問うているのは、そういった事実の部分ではない。

「九雷元帥のことだから、不必要に賛美されるのが嫌だ、というのもあるんだろう」

赤帝君の読みは正しい。

「で、でも——。あの方には『青龍』の気配などちつとも感じられませんわ。属性そのものの『氣』がありませんもの」

「それが、彼の力でもあるということだ。普段は完璧に抑え込んでいるからな」
「そんなことが、可能なんですか？」

「少なくとも私にはできないが、彼にはできるということだろう」

「……」

紫凜は絶句した。

世界が一つ崩壊したかのようなショックを感じる。

紫凜は、当然、かつての青帝青龍広君も知っている。

簡単に継承させることのできない四方将神の力というものも、よく知っている。

(……ということは、あの総司令は、広様と同じ属性と質を持っている、ということ……?)

でなければ、継承はできなかったはずである。

しかし、大らかだった敖広と、先鋭的な九雷では、あまりにも違いすぎるのだ。

紫凜の中では、それが繋がらない。

「では、今になって私にそれを教えて下さったということとは、近々、なにか大掛かりなイベントがあるということですか？」

幾分、冷静さを取り戻した紫凜が、聞いた。

「そうだ。臨機応変に対応してくれ」

赤帝君はそうとしか言わない。

具体的になにがあるのか、というところまでは告げない。

業務上必要なら説明することもあるが、西方神界のことも西方魔界のことも、秘書官には直接関係ないので、詳細は省くのだ。

紫凜は、勘の良さでそれらの背景を察することができるが、曹昌あたりは、恐らくのんびりと事務仕事を続けているだろう。また、彼なら、それに疑問を抱くこともない。

「……分かりました。蟠桃会中、星様がお留守の時にこちらでなにかあるなら、その時はご指示を」

そう言って引き下がった紫凜は、しばらく秘書室で呆然としていた。

なにかの糸が切れてしまったのか、それとも切れていた糸がひつついたのか分からないが、なにもする気が起こらない。

色々さばかなければならない仕事があるのに、手が動かないのだ。

その時、紫凜の端末にメッセージの着信があった。

曹昌からである。

『すいません、トナーを切らしてしまっただんですけど、そちらにありますか？』

丁度いい。

足ならなんとか動くようなので、倉庫にあるはずの在庫を北の棟まで持っていこう、と紫凜は席を立った。

「あ、わざわざ持ってきてくれたんですか！ すみません！」

紫凜より見た目は若干年下の曹昌が、渡り廊下まで走って出てきた。

「最近、ミスばかりで、佑様が怖いんですよー」

そんな泣き言も言ってたが、秘書官の苦労はいずこも同じだ。

上官の機嫌を損ねないようにするのも秘書官の務めだが、常ならざる力を持つてしまった四方将神の鬱積を吐き出させるのもまた秘書官の務めではないだろうか。

そういう意味では、曹昌と木佐は上手くいつてるのではないか、と思える。

あの無愛想な木佐が、曹昌にはわりとずけずけ物を言っているのを、紫凜もよく見かける。それは、木佐の信頼の証なのだろう、と思うのだ。

木佐は、ただの知人に対しては、かなり他人行儀なのである。

(私は、機嫌を損ねないようにし過ぎなのかもしれないわ……)

紫凜は、曹昌と木佐の関係を一瞬羨ましく思った。

内省的な赤帝君は、自分の苛立ちを周囲にぶつけるようなことはしない。

長年一緒に仕事をしている自分にすら、そういう部分を見せないというのは、赤帝君の性格もあるのだが、ふと、寂しくもなる。

(あら、私、星様に怒られたいのかしら……?)

フツツと笑って、紫凜はそろそろあの愛すべき上官にお茶を持っていこう、と思つた。

手も足も、動くようである。

どちらかが動くようなら大丈夫だ、と、昔言われたことがある。

手が動かなくとも、足さえ動けば、逃げることはできる。

足が動かなくとも、手が動けば、銃の一つでも撃てる。

両方動かない時は、既にそれに気付いてないはずだから、心配すらできないはずで、だから大丈夫、という教えである。

紫凜は、中庭の満開の梅の木を見ながら、給湯室へ寄った。

赤帝君は、夕焼けの窓辺に立っていた。

この上官は、一日のうち二回、朝日と夕日を必ずこうして眺めている。

それは、自身のエネルギー供給という意味もあるのだが、紫凜には、焦がれてやまないものを見つめる姿に見える。

彼自身、火行の頂点に立って尚、求めて得られないものがあるというのは、切ない。

「出すぎたことを言うようですが、星様。今日はお早めにお屋敷にお戻り下さい」

今日は、一族の集まりがあるのを紫凜は知っている。

「……分かっている」

赤帝君は、溜息と共に答えた。

先月は、情事にかまけて、赤帝君はその集まりを欠席した。

紫凜は、それを後悔している。

もっと強く諭すべきだったが、できなかつたのである。

お互いの過去を知り、お互いの現在を知り、その上でお互いを慰めているだけの関係では、本音でぶつかることはできはしない。

「昔は、父に嘘をつくことなど、考えられもしなかつたのにな……」

赤帝君が自嘲した。

「星様——」

「すまない、今のは忘れてくれ」

忘れろと言っておきながら、同情を誘うような瞳をする。

紫凜はそこに、赤帝君の無自覚の狡猾さを感じるのだ。

「……お辛いですか？」

しかし、それが分かっているながら応えてしまう自分も、やはり狡猾なのだろう

う、と思う。

「そんなに、情けないように見えるか」

「仰って下されば、いつだって、私が——」

紫凜が、赤帝君の視界を一瞬、手で封じた。

その一瞬で、紫凜は沙龍の姿になっていた。

「し、紫凜——ッ!？」

「身代わりになるのに」

『変化の術』である。

これは仙道の秘術で、天界住民にはなかなか会得できない技と言える。しかも、天性の質に左右されるので、会得できる者も限られる。

しかし、紫凜はその質があつたようだ。

「……!」

赤帝君の表情は、明らかに拒否している。

体を引いたところを、紫凜は脚を絡めるようにして窓際に追いつめた。

「どういうつもりだ……!」

普段ならなんとか届く距離も、沙龍の身長では、背の高い赤帝君を艶を含んだ瞳で見上げるしかない。

「どういふもこういふも、『阿哥』がじれったいから、私がチャンスを作ってあげようと思って」

『変化の術』とは、こういうものである。

声も、調子も、雰囲気も、全て当人そっくりに真似てこそその秘術である。

「……よせ」

縋るようにしな垂れかかって、紫凜は、赤帝君の肩から胸にかけて、緩やかに撫でた。

「やめてくれ、紫凜……。お前は、誤解している——」

泣きそうな赤帝君は、しかし、その言葉が、行動に表れていない。

紫凜は、赤帝君の手を取って、その掌に自分の頬を触れさせた。

「私は誤解なんかしてないよ。自分の気持ちを誤解しているのは阿哥の方じゃないか」

「そんなこと——」

「嘘だね」

「……」

赤帝君はとうとうその誘惑に負けて、小さな体を抱き寄せてしまった。

何度か、夢の中では抱いたはずの体である。

いや、これも夢なのかもしれない、と赤帝君は思った。

その時、いいタイミングというか、悪いタイミングで、夢の世界が早々に暗転した。

「失礼——。出直して来る」

木佐は何事もなかったかのように開けたドアをそのまま閉めようとしたが、赤帝君は慌てて引き留めた。

「待て！ 真武君、誤解しないでくれ——」

その必死な声に、木佐も立ち止まる。

「……。いや、多分、僕は誤解してないと思うが。……馨じゃないんだろ
う？」

「ま、さすがは佑様ですわ。私のちやちな変化など、お見通しですのね♪」

紫凜は、沙龍の姿のまま、にこやかに笑った。

木佐は別に見破ったわけではない。

今、紫凜が普通に赤帝君と喋っていただけだったら、騙されていたかもしれない。

しかし、木佐がぼつちり見てしまったのは、そのまま暴走してもおかしくはないという位の、濃厚なキスシーンである。

木佐の認識下では、沙龍は、このオフィスで、赤帝君相手にそんなことをするわけがないのだ。

「お茶を淹れて参りますわ」

気まずいシーンを目撃されたというのに、紫凜は全く動ぜず、いつもの笑顔で部屋を出て行った。大人の態度と言える。

ただ、変化を解いていないので、その姿と笑顔が合っていないと言え、合っていない。

「凄いな。あれが変化の術なのか」

木佐は初めて見る、その洗練された『技』に単純に感動していた。

「重ね重ね、誤解しないで欲しいんだが。今のは、紫凜の悪戯で……」

堂々と笑顔を作った紫凜に比べて、赤帝君の方は動揺しまくっている。

なので、木佐は言ってみてやった。

「赤帝君、僕は他人のプライベートに口出す気も、口外する気もないから、安心してくれ」

「そうか、すまない。恩に着る」

「……」

「……」

「まあ、色々あるよな……」

木佐のその呟きもまた、大人のものである。

紫凜は、小走りに歩きながら、含んだ笑いを廊下に見せていた。

（うん、もう……、いいところだったのに——。でも、あれでよかったのかもしれないわね……）

あのまま続けていたら、なにかが壊れていたかもしれない、とも思う。

その時、

「……ッ!？」

突然、二の腕を強く掴まれて、反撃する隙もなく、高圧的な声が上から聞こえた。

「なんでここに居る——!？」

紫凜が驚いて絶句したのは、九雷の表情である。

九雷こそ何故ここに居るのか、ということよりも、彼がこんな切羽詰まった顔を見せたことが、驚きだった。

しかし、その顔も、すぐに冷徹な仮面の下に消された。

「いや、違うな。お前……、赤帝の秘書官か」

「まあ、これは、総司令様、お赦しを。緑麗様に成りすますなんて、不遜でしたわ」

変化を解いていなかった自分のミスである。

やはり、多少なりとも、さつき木佐に目撃されたことに動揺していたようだ。

「……なんの真似だ？」

「ただの悪ふざけですわ。申し訳ありません、すぐに——」

「いや、いい」

九雷は、変化を解こうとする紫凜を制して、二、三步離れると、改めて紫凜の全身を見た。

「……？」

このもったいぶった感じと、口の端を上げるだけの皮肉めいた笑い方がどうも苦手だ、と紫凜は思っている。

「大したものだ。俺でもすぐには分からなかった——。どこで習った？」

「最初は副都の訓練所で、その後は、本部の研修や実地で。今では、かなり自己流になっております」

「そうか。他にもできるのか？」

「見かけだけなら、老若男女、一度お会いした方ならできますわ。さすがに体の機能までは無理ですけど♪」

「……」

九雷は後半部分は聞いてなかったかのように、無反応である。冗談も通じないわ、と紫凜はうんざりした。

「あの……」

「ああ、引き留めてすまない。行っていいぞ」

「失礼しますわ」

もしかしたら、面倒なことになるかもしれない、と紫凜は思った。

ありし日の弥羅宮で、『赤帝朱雀星君』になる前の星弥せいやは、たまにやって来る金髪シヤオチエの小姐を煙たく思っていた。

黙っていたれば目を見張るほどの美人なのだが、何故か口を開くと、途端に、その美しさが掻き消えてしまうのだ。

要するに、姿のイメージと、性格がまるで合っていない——ということなのだ
が、敖広はそれを面白がっていた。

「敖閏殿が連れてきた娘だろう。あの哄笑っぷりがいいな」

そう言つて、自ら近付き、たまに一緒に遠乗りに出掛けたりしていた。

(単なる野生児ではないか)

星弥はそう思っていたので、名前を知ろうとしなかった。

彼にとって、女性とは、屋敷の奥で刺繍をしているか、たまに弥羅宮に立ち寄るキャラバンの中に居る踊り子のような存在でしかなかった。

そのキャラバンに、たまに完全武装をして男の着物を纏う、用心棒のような女も居た。

恐らく、あの小姐も、そういう生き物なのだろう、と星弥は思っていた。

ただ、彼女の持つ『土行』属性の力は突出していたので、なんとなく後々まで覚えていた——、というくらいである。

その小姐に関する事で、星弥が唯一、鮮明に覚えているのが、太上道君が聖魔剣という特殊な剣を彼女に与えて、一週間で使いこなしてみろ、と言っていたシーンである。

彼女は既に、一角の剣士でもあった。

太上道君に渡された剣は、五行術に秀でた者でないと使いこなせない。

小姐なら使いこなせるだろうと踏んだ太上道君は正しかったが、あろうことか、彼女はしばらく目隠しをして修練を行っていた。

その理由を聞かため、一度だけ、会話をしたことがある。

「ああ、見えない方が色々楽なんだ。私にとっては」

「……？ どういう意味です？」

「うーん……、そのまんまの意味なんだけど……。昔はずっとこの状態で暮らしてたから」

「目隠しをしたまま？ 何故です？」

「自分の姿を見たくなかったから」

彼女はそう答えた。

意味不明である。

しかし、星弥は、『赤帝朱雀星君』になり、四神府で緑麗と再会した時に、その言葉を理解した。

（あの美しい容姿を嫌った——、ということか）

ならば、彼女が、見た目の美しさを、自ら否定するような言動を取るようになったのも理解できる。

（私は、気付くのが遅すぎるな……）

それは、赤帝君の訓戒になる。

「まあ、よろしく頼む。左遷された身だが、職務は全うしよう」

将神着任の際に、緑麗が言った言葉だ。

「ご冗談を。この比類なき名誉を左遷と仰られるのか」

「快適な職場と、長年一緒に仕事をしてきた同僚や部下と引き離されたんだぞ？左遷でなくてなんであろう」

この、どこに判断基準があるのか全く分からないような、軍人として根本的に間違ってるのではないか、という言動が、いちいち赤帝君の癩に障った。

女性としての可憐さやいじらしさも無い。

彼女に焦がれている男たちは、一体なにを見ているのか、と全く以って理解不能だった。

子供の頃から、敷かれたレールの上を歩くことに疑問を抱くことはなかった。

家長の命令は絶対だったし、ただ慎ましく、勉学と武芸に勤しむことは楽でもあったのだ。

誰もが羨む四方将神の力と地位を得た時も、やるべきことが増えたと思っただけで、特に感慨はなかった。

敖広は、そんな赤帝君を、いつも『堅物』と笑った。

「これからは、もっと不自由になるぞ。特に、火雲宮の女官共は、お前を束縛しなくてはならないらしいからな」

「私は、女性に興味などありません！」

「それはそれで、問題なんだが……。お前みたいな堅物は、一旦、嵌ると溺れそうだな」

敖広は、いつもそう言っていた。

兄代わりとして、心配していたのだろう。

しかし、その敖広も、奔放な聖霄にはなにも言わない。

「あれは、そのうち一人で、フラフラするようになる」

と笑って言っていた。

「まあ、狂わないうちに適当に遊んでおけ。女は、お前が思うほど悪いもんでもない」

「遊ぶなどと、大体、女性に対して失礼ではありませんか」

「このストイックさがいいのかねえ……」

敖広は、しかし、だからと言って赤帝君を遊里に連れて行くほど、自身も不良ではなかった。

それを実践したのは緑麗の方である。

「私が相手してもいいんだが、実は、私もそれほど、その方面に長けてるわけではないんでな。ここはプロに任せよう」

そんな、赤帝君にとっては耳を疑うような言葉を、簡単に言う。

緑麗にしてみれば、遊郭へ誘ったのはほんの遊び心だったが、年上の女性に童貞を見抜かれ、世話を焼かれてしまった赤帝君にしてみれば、その一事は恥辱だっただろう。

それを笑い話にできるほど、彼は鷹揚にできていないのだ。

だから、緑麗のことは、ずっと苦手なままなのである。

「だったら、女として見なきゃいいじゃないか」

緑麗と常に距離を置こうとするのに、見かねた敖広が言った。

「元より、上官だ。哪咤なた太子と同じだと思えば、そう肩肘張る必要もないだろう」

「……私は、あの前任者も苦手でしたが」

そんな日々を経て、赤帝君は、南方の蛮族を掃討する命を受ける。彼にとつて、忘れられない悪夢だ。

神魔の闘いは生存競争だということを、赤帝君は頭では理解していても、自らの手を汚すことに慣れていなかった。

誰でも最初はそうだし、それは当然である。

だから、敵と遭遇して斬り伏せることはできても、とどめを刺すことに躊躇した。

『赤帝君、迷うな！ その苦痛を断ち切ってやるのが、我々の仕事だろう！』
緑麗の一喝で、赤帝君は涙を飲んで紅蓮を振るった。

四方将神とはこういうものか、と、初めて自分の力を否定しなくなった。

『お前の優しさは、時として逆の結果を生む。それは、自覚しておいた方がいい』

そうも言われた。

緑麗は正しいことを言っているのだと分かる。

しかし、赤帝君はますます緑麗を遠ざけるようになっていった。

四方将神の中でただ一人、緑麗の叛逆を阻止すべく鎮圧部隊に参戦したのは、敖広を失った悲しみを緑麗にぶつけるためだった。

戦火の中で見えた時、緑麗は言った。

「私を恨みたければ恨め。お前の嘆きは尤もだ」

「緑麗様、私には分かりません。貴女が……、敖広も、ですが、天意に背いてまで成そうとすることになんの意味があるのか……。この無用に流れた血の上に、貴女が涙一つ見せずに『そこ』に立っているのが私には分かりません！」

「……」

「弁解もなさらないのですか？ どうして、真実を語ってくれないのです！」

「赤帝君……。語れぬ理由があるのだ。だが、お前はいつか真実を知るだろう。その時に、お前はお前の真実を見つけなければいい」

この時、緑麗はなんの抵抗もせず、赤帝君に拿捕された。

そうして、その後、三千年という月日をかけて、赤帝君は眞実を知ることになる。

結局、緑麗を処刑台に送り、敖広を死に急がせたのは自分ではないかと。

その後悔だけが、今の彼を作っていると断言していい。

いつも、いつも、気付くのが遅すぎるのだ、と思う。

今までに、何度その愚行を繰り返しただろう。

いつになったら、上手に生きることができるよう――。

沙龍と玉京宮で見た時は、正直、目を疑った。

同じ魂魄の色をしているのに、まるで違う、と思った。

（緑麗様、貴女はその姿を得て『帰って来た』つもりでしょう。でも、私はそれを認めません）

赤帝君にとって、沙龍は『恐るべき将神の再来』であってはならない。

美しい姿を厭うたのなら、それもいい。

人を魅了する力も姿も、要らないのだ、と彼自身も思う。

（貴女は、普通の少女として、幸せに生きるべきだ——）

前世は関係ないという顔で、東方天界で生きることになった沙龍を見るにつれ、そう思った。

昔、緑麗を苦手としていたのは、惹かれてしまった故の裏返しだったのかもしれない。

しかし、当時はそれを認めることはできなかつたし、今も、目の前にあの姿があつたとしても心は騒がないだろう。

赤帝君が大事にしたいのは『緑麗の記憶を持っていない緑麗』なのだ。

（過去をリセットできた貴女は、もう剣など持たなくていい——）

それが、赤帝君の想いである。

「なんでお前はずっと『その姿』でいる。嫌味のつもりなのか」

一日経って、午前中見なかつた紫凜が、午後になって現れた時、赤帝君は本気

でそう聞いた。

昨日、赤帝君に迫った姿のまま、しかも、今日は着ているものが思いきり豪華である。

たまに、沙龍は必要に迫られたり、周囲の思惑を押し付けられる形で、どこかの公主のような格好をしていることがあるが、まさにそういった時の沙龍の姿――である。

紫凜が持っているとは思えないような衣装だった。

「私、総司令様より、特殊任務を仰せつかったんですわ」

紫凜はにこやかな笑顔で言った。

「なんだって……？」

「昨日、何故か終業時に総司令に呼び出されました。水雲宮まで来るように、と」

「……」

赤帝君は、嫌な予感を押さえ込んだ表情である。

「多分、総司令も緑麗様が今いらっしやらないから、お寂しいんだと思います

わ。ただ居るだけでいい、と仰るので——」

「待て、紫凜」

「今後、可能な限り、この姿で居るように、と」

「『それ』がなにを意味するか、分かっているのか——？　ただ、水雲宮で笑つてろという意味では……！」

途端に赤帝君の表情が曇って、口調を荒げる。

九雷が絡んでいると知った時から、それは容易に想像できた。

紫凜は、赤帝君のその勢いを笑顔で遮る。

「勿論、分かっておりますわ。緑麗様の影武者になれ、と仰っているのですわ。ですから、この通り、こんなお召し物まで用意して下さって♪」

「だから、それは——！」

「落ち着いて下さいませ、星様。分かっていますわ。私とて元は軍属ですもの」

今の沙龍の影武者になれということは、代わりに命を狙われる、という意味である。

それだけではない。

そのまま殺されてくれれば、敵を油断させることができる、という意味があつてもおかしくはない。

つまり、『死ぬ』と言っているようなものである。

「分かつていて、引き受けたのか……！ 何故、引き受ける前に、私に相談してくれなかった？」

「星様……、悲観的にお考え過ぎですわよ？ 私のような者にとっては、名誉なことですもの。喜んでいられるのも事実ですわ」

紫凜は、お世辞にも出自が良いとは言えなかった。

その紫凜にしてみれば、四方将神の近くで仕事ができるというのは、誇るべきことでもある。

更に四方将神の上の『将神』は、本来なら雲の上の人なのだ。

あの緑麗の身代わりが出来るのなら、これほど、名誉なことはない。

「そんなお顔をなさらないで下さい……」

赤帝君が苦渋の瞳を見せるので、紫凜は恐縮した。

「あの男が、やはり元凶か——」

九雷への罵倒が出てきそうな赤帝君を宥めて、紫凜はいつも通りの仕事の顔で告げた。

「……ということですので、しばらく、水雲宮で遊んできますわ。ここでの仕事は、他のスタッフに引き継がせましたけど……。私にしかできないお仕事については、しばらくご辛抱下さいませ」

艶やかに笑って、紫凜が冗談めかす。

しかし、やはりその笑いは、沙龍の姿には合っていなかった。

「くれぐれも……。気を付けてくれ」

とりあえず、紫凜が去ったら、九雷に抗議しに行こう。

出来れば、こんな茶番はやめさせなければならぬ。

やめさせられないまでも、少なくとも、命は保障してもらおう。

なんとしても、だ。

洒落た意匠の施された招待状を見て、木佐はもう一年経ったのか、と思った。毎年、春のこの季節に行われる、仙界主催の一大イベント『蟠桃会』の招待状である。

あまり季節感のない帝都で、悠久の時を生きている連中に囲まれていると、年月を数えることもなくなる。だから、蟠桃会は節目のイベントとして、月日を測るいいバロメーターになるのだ。

「出席のお返事で宜しいですね？」

曹昌が確認した。

「ああ、頼む」

最高神以外は欠席不可のイベントである。

四方将神と言えど、なんの理由もなく欠席することはできないのだ。

しかし、木佐は、こういった儀式に近いイベントへの出席は仕事の一環だと

思っているもので、それほど苦にしていけない。

「あの、佑様……、ちよつとお時間よろしいですか？」

軽いノックの後に顔を覗かせたのは紫凜だった。

「ああ、構わないよ」

「……」

紫凜がチラツと曹昌を見たので、木佐は気の利かない秘書官に離席を促す。

「曹昌、済まないが、コーヒーを淹れてくれないか」

「はい……」

残念そうな顔をして部屋を出て行く曹昌は、紫凜の大きく開いた胸元に未練があるだけだろう。

「……すみません、お気を遣わせて」

「いや、いいよ。聞かれたくない話なんだろう？」

昨日のオフィスラブを目撃してしまったことに対するなんらかの弁解か、口止めをしに来たのだろう、と木佐は思ったが、紫凜の話はそれほど軽いものではなかった。

沙龍の影武者になることになった、と短く告げ、そのせいで恐らく赤帝君と九雷が衝突するだろうから、それを仲裁してくれ、というのだ。

「悩んだのですけど、やはり佑様におすがりしようかと……」

「……しかし、君はそれでいいのか？」

「え？」

「こう言っちゃなんだけど、『捨石』ってことだろうか？ それを承知で、そんな任務を引き受ける理由が僕には分からない」

「いいんですわ。私が納得して引き受けたお話ですもの」

紫凜は微笑んで言ったが、その微笑の裏には、なにか固い決意が感じられる。

これは説得しても無駄だな、と木佐は思ったが、一度だけ念を押した。

「僕と赤帝君で、九雷元帥に意見することはできると思う。一度下した命令を撤回させることができるかどうかは分からないが、赤帝君一人で怒鳴り込みに行くよりは効果的だろう」

「いいえ、どうか、そんなことなさないで下さい」

「そうか……」

「お気遣いは涙が出るほど嬉しいですわ。でも、星様を鎮めていただければ、それだけで、充分ですわ」

「分かった。出来る限りのことはやってみよう」

「ありがとうございます。では——」

紫凜が出て行ってしばらくしてから、曹昌がお盆にのせたコーヒーを持って入って来る。

「えー、もう帰っちゃったんですか。紫凜さんの分も淹れたのに……」

「曹昌、アレはお前の手に負えるタイプじゃない。骨抜きにされるぞ」

「抜かれてみたい……」

そんな曹昌の呟きは、木佐の嘲笑交じりの嘆息に吹き飛ばされた。

夕暮れの火雲宮である。

木佐は、四神府から歩いて数分の天界軍総司令部までやって来た。

ここは一般の官吏は立ち入り禁止の場所だが、正門は顔パスで通してもらえ

た。

伝統的な建造物が立ち並ぶ四神府とは正反対で、近代的な鉄筋の建物である。

赤帝君があまり知らないだけで——木佐も積極的に赤帝君には言わないのだが

——、木佐と九雷は、よく二人で飲みに行ったりしている。

今日はもう帰宅したかもしれないと思って、あまり期待していなかったのだが、木佐の姿を認めて、馬霊が歩み寄ってきた。

特務の統括を任されている、隻眼の男である。

「元帥にお会いに？」

「そうですが、もう、帰宅されました？」

「いえ……」

馬霊は眼帯をしていない方の右眼をやや上に動かして、周囲の様子に気を配った。

軍人の癖だろう。

彼等は、一番安全であるはずの本拠地でも、こうして常に注意を払っているのだ。

「真武君が来たらこれを渡すように、と言われてます」

差し出されたのは手書きのメモである。

九雷の字であるのは分かった。

「……ここに来い、ということか。どうも、あの人は言葉を省略しすぎな気がするな」

木佐が苦笑しながら言うと、馬霊は同意を示すようにかすかに頷いて、
「元帥の省略癖は、相手を選びます」

とだけ言った。

つまり、分かる者にしか省略しない、という意味だ。

「ところで、昨日か、今日、赤帝君が——」

ここに来なかつたか？ と聞こうとしたのだが、それも先回りされた。

「メモの場所に行けばなにかお分かりになるかと」

ツーカーすぎるな、と木佐は更に苦笑し、この勘の良すぎる軍人に会釈してメモの場所に向かった。

その道中、陽は完全に落ちたが、火雲宮は、夜になっても絶えずあちこちに明

かりはあるので、あまり夜という感じはしない。不夜城という表現がそのまま当てはまるかのようだ。

しかし、木佐が向かったのは、火雲宮の明かりの洪水を抜けた先の城下町側で、外灯のひとつもなく、遠くから漏れる人工の光と月光のみが光源になっている、暗い場所だった。

「ここか」

メモには、二列の数字群が書かれていただけで、普通の人が見てもなんのことか分からない。

しかし、木佐にはこれが場所を示す数字であることが分かったし、端末で素早く検索して、その場所を特定することもできた。

その数字は、軍部の間だけで用いられている、帝都を地図上で縦横に分割にした際の、いわば緯度と経度なのである。

広大な敷地を持つ帝都には、地図に載っていないエリアや施設もある。ここも、その一つだろう。

無縁墓地だというのは、来てから分かった。

更に、古びた石門と、錆びた鉄製の格子戸を抜けた時に、フツと違和感を感じたので、なにかしらの結界がかかった場所であることも分かった。五行属性を持たない侵入者を阻むためのものだろう。

石門をくぐると、鬱蒼と生い茂る草木が視界を満たした。

かろうじて分かる獣道があつたので、それを慎重に進んでいく。

獣道は分派していたが、恐らく、待ち人は真っ直ぐ進んだ場所に居るだろうと思つたので、月明かりを頼りに歩いた。

（九雷元帥は、一体なにを考えているんだ——）

木佐はそれを考えあぐねている。

内外の敵から恋人を護るためとはいえ、当人の大不興を買ってまでしなければならぬようなことか、というのが、一連の九雷の行動に関する印象である。

二十分ほどかけて奥に進むと、急に拓けたエリアがあつた。

建造物も見える。屋根のない東屋のようだ。そこに人影があつた。

「……」

木佐は思わず立ち止まって、一枚の絵のような風景に息を呑む。

すらりとした背の高い軍装の男が、月光を浴びてかすかに反射する氷のような棺を見つめている姿だ。

美男というわけではないのだが、彼の全体像はいつもなにかを圧倒する力を持っている、と木佐は思う。

更に、彼が見ているものは、彼以上に美しかった。

金糸の髪を長く垂らしたその女性の肢体は、薄い絹のような単衣を着せられているだけなので、体のラインがはっきりと分かる。

どこかの好事家が作らせた等身大の人形——、といってもおかしくはないほど、理想的なモデル体型だった。

眠っているように閉じた瞳は、木佐の記憶では、緑青であつたように思う。

ただ、九雷がこの女性を見つめている姿は、あまり親友には見せたくないな、と木佐は思った。

「お待たせしました？」

九雷も気付いていただろうが、動く気配がなかったので、木佐の方から声を掛けた。

「いや、時間通りだ」

時間の約束をしたわけではないのに——、と思ったが、九雷の中では、予想していた今日の木佐の行動というのがあるのだろう。

四神府での終業時間、それから、総司令部でのやりとりにかかる時間などを計算すると、九雷の予想通りの時間となる。

木佐は、九雷の傍まで行って、同じように、ガラス製の棺の中に横たわる緑麗を見た。

前に見た時よりも幾らか親しみが持てる気がしたが、だとしても、木佐にとって緑麗はやはり甲斐馨とは別人だ。

「玉京宮の宝物殿からここに移されてたんですね」

かつて、火雲宮の羨望の的であった、この奇跡のような体がここに眠っているということとは、恐らく、最重要機密事項だろう。

石門を通った時に感じた、二重三重の結界も頷ける。

「真武君、どう思う？　これがあるせいで、天界は無用な争いばかり起きる」

「……？　緑麗さんの体が原因なんですか？」

「最大限の力を引き出すことができる『器』があるとするれば、その力を利用しようとする奴等はこれを見逃しはしまい」

そういうことか、と木佐は思った。

「西方神魔は、これに気付いていると？」

「内通者が居る以上、そう考えるのが妥当だな」

ルシファーは沙龍だけでなく、この体も狙っているはずだ、と九雷は考えているのだ。

「魔界サイドはこの体を血眼になって探しているに違いない。少なくとも、俺がルシファーならそうする」

「天使軍の方は？」

「幾つかの勢力が凌ぎを削っているが、奴等の『プライオリティ・オーダー』は変わらない。ルシファーの打倒、だ」

つまり、天使軍は、ルシファー打倒の一環として、黄龍の保持者を殺そうとしているのだ。

マルティエルの供述した内容の、背後にあるものを推測すると、そうなる。

九雷は、マルティエル自身はそう重要なことは知らされてないだろうと最初から思っている。結局、彼も捨て駒の一人だ。

彼のボスであるガブリエルが、どこまで彼に真実を話し、どんな嘘を吹き込んで暗殺者に仕立て上げたのか、という所が重要なのだ。

「……これを見て下さい」

木佐は掌よりやや大きい自分の端末を九雷に渡した。画面には、ついさっき入ってきたメッセージが表示されている。

「発信元は冥府第二階層、第七支部になってますが、恐らく馨だと思えます」
九雷は一瞬眉を寄せた。

『おやつはカステラと紅茶』

そんな短い謎の一文である。これを沙龍が寄越したと何故分かるのか。

「多分、僕にしか分からないでしょう。『裏切り者が居る、助けて』という意味なんです……」

日本に居た頃に遊び半分で作った二人の暗号なのである。

こんな場面で使うことになるのは、木佐も沙龍も思いもしなかっただろう。

「非常に言いにくいんですが、貴方が付けたボディガードのことでは？」

「ああ、やはり気付いたか」

「……!? まさか、馨を餌にして、裏切り者を釣ろうとしてるんですか？」

たまに、九雷がこういう男だということを忘れてしまう。

「いや、そうじゃない。餌は之信自身だし、釣るのは東王夫だ」

「……？」

「之信は実在の人物で、雅山で死んだ男だ。しかし、それを生きていたことにして、当時の機密を握っている——と思わせるための餌として蒔いた。しかし、用心深い東王夫はなかなか引っ掛からない」

釣れないのなら、それでもいい、と思っている九雷は、当然、別の手も用意してある。

「またそういう手の込んだことを……。じゃあ、馨に危険はないんですね？」

「お前に疑われるのは、心外だな」

苦笑する九雷は、木佐には連帯感のようなものを感じている。

が、それは、四方将神としての意識からくるものではない。

元々、九雷に、四方将神としての自負はないのだ。

仮に、多少の責務は感じていたとしても、下心の見え隠れする赤帝君と仲良くするのは論外だし、一步引いた感じの白帝君にも必要以上に近づくつもりはない。

しかし、木佐小次郎に対しては、個人的な、ある種の——奇妙な、と言わざるを得ないのだが——友情を感じていた。

それは、沙龍の存在故の友情だろう。

だが、もし沙龍が介していなくとも、なにかしらの縁があつたのではないかととも思う。

「之信を沙龍の護衛に付けたのは、奴が適任だったからだ。もしかしたら、俺やお前以上に、沙龍を護るはずだからな」

「……？ 馨は、あのボディガードと個人的になにかあつたんですか？」

この前、沙龍が四神府に来た時に、一度見かけたただだが、木佐は初めて見る

顔だったの、特に沙龍と之信の接点が見当たらない。

九雷が含んだ笑いをしたところで、普通の答えは返ってこないぞ、と木佐は思ったが、まさか董天の名前が出てくるとは思わなかった。

改めて、九雷の策士ぶりに呆れる。

「董天さんだったんですか……」

変化の術の凄さはこの前見たばかりだが、あの直角なイメージしかない之信が、曲がりくねったイメージしかない董天が化けた姿だったとは驚きだ。

木佐は、董天とはちよつとした因縁がある。

といつても、一方的に嫌われているというだけの話で、それも木佐自身には関係のない話だ。前世の真武君の方に原因があるらしい。

「あの人は……、そうですね。貴方以上に屈折してますからね」

嫌でも、あの営業用の貼り付けたような笑顔が思い出される。

東京で董天に会った時、木佐はまだ高校生だったが、その高校生にすら不気味さを感じさせるものを董天は持っていた。

「ところで、直近の『影武者』の件で、全く屈折してない人物が貴方を一発殴り

に来るんじゃないかと心配して来たんですが」

「ああ、それなら片はついた」

などと、あっさり言う。

「赤帝が大事なのは、秘書官ではなく、『秘書官を見殺しにできない自分』なのさ」

それも随分意地の悪い見方だと思ったが、九雷が『片はついた』と言うなら、それ以上は木佐も問えなかった。

そして、改めて、九雷が密会場所にここを選んだ理由を考える。

視線を、透明の棺に落とした。

「……」

透けるような白い肌をした緑麗は、この世の造形美というものを一身に浴びているようだった。

この美しい体を前にして、木佐の杞憂は、たった一つである。

「これは——、美しいだけの屍だ」

九雷が、木佐の視線を察して、呟くように言った。

そこにはなんの感情もないように見える。

「緑麗は、ことある毎にこの姿を呪っていた」

「何故です？ 誰もが羨む美貌を？」

「緑麗にとつては、生きて行く上で負担にしかならなかったんだろう……」

それは、なんとなく分かるような気がした。

木佐も『美人』と言われることに慣れてはいるが、いつも決している気分ではない。

「だから、緑麗は、今もこうして自分の厭うべき姿が残っていることを、望んではいない」

同じことを以前、玉京宮で聞いた気がする。

その時、九雷は「いっそ、無に帰した方がいい」と言っていたのではなかったか——？

「しかし、馨が『人』を選んだら……？ 馨の体で寿命を終えた魂魄は、この体に還るのでは……？」

「……」

九雷は答えなかった。

最初は、そのつもりだった。九雷は『その時』を待つつもりで、緑麗を自分の手にかけてのである。

この体に、同じ魂魄が戻ってくるのを、ずっと待つつもりだったのだ。

「嫌なことを聞きますが、貴方にとって、魂魄が同じなら、甲斐馨だろうと、緑麗さんだろうと、同じなのは……？ 馨が死んでも、貴方はまた恋人に出会える。ずるい話ですね」

沙龍はこんなことは口がさけても言えないだろう。

木佐だから言えるのである。

「……」

九雷はまだ黙したままだ。

「僕だって、貴方の溺愛ぶりを見れば、馨を大事にしていることは分かります。でも、それは、甲斐馨という一個人に対するものじゃない」

「やはり、お前にもそう見えるのか、真武君」

「人間として生まれ育ってきた僕等に、完全に、貴方たちと同じ物の見方ができ

ようはずがない。もし、馨がその辺を気にしているのだとしたら、それは、貴方が取り除いてやるべきだ」

木佐は誰もが言えないことをきっぱりと言った。

もしかしたら、それを聞くために、九雷は木佐をここに呼び寄せたのかもしれない。

「俺の一番の気掛かりはな、真武君。俺がこの『人形』に執着している——と、沙龍が思い込んでいることだ」

「……」

今度は、木佐が黙した。

確かに、緑麗の屍を見つめる九雷の瞳は、深い愛情というよりも、憂いに近いように見える。

「それを何度、違うと諭しても、本人が信じないというなら……」

「……」

「こんなものは無くていい。そうは思わないか？ 真武君」

「……」

木佐は、やっと九雷がなにをやりたいのか、理解した。
しかし、どうやって——？

木佐と九雷が密談し、赤帝君が苦悩している間、四方将神の最後の一人、白帝君はどうしているだろう。

こちらは、新宿の歌舞伎町、裏通りである。

「……ロン」

耳まで覆うような帽子を目深に被った男は、慣れた手つきで自牌を倒した。

「またかよ……」

周囲から押し殺したような感嘆の声が上がる。

先ほどから、異様な上がり方で勝ち続けているこの若者は、今や、この雀荘に居る全員の視線を釘付けにしていた。

だが、彼はイカサマをしているわけではない。

もしそうなら、対面の鉄太郎が分からないはずはないし、第一、彼の一挙手一投足は、数十の目に晒されている。

この状況でイカサマなどできょうはずがなかった。

鉄太郎は、悔しいとか、腹が立つとかいった以前に、この尋常の無さに既に呆れ返っている。

「……続けるかい？」

帽子の男が鉄太郎に聞いた。

「いや——。もういい」

何度やっても、恐らく無駄だろう。

こんなに完全な敗北を感じたのは、上海で『老師』相手に打った時以来だ。

日本から逃げて、流れ着いた上海で会った老人のことである。

鉄太郎は、今は新宿に戻ってきて堅気の商売をしているのだが、やはりたまたまこの象牙の牌に触れたくなる。

月に二、三度足を運んでいる雀荘では、力を抜いて、気楽に打っていたのだが、今日はちよつと気になる若者が居て、その風貌に興味を惹かれて、誘われるままに卓を囲んだのだ。

しかし、半分顔を隠したこの若者は圧倒的な強さで勝ち続け、『本町の鉄』と

異名を取った自分を完璧に打ちのめした。

今は、その異名を知る者はほとんど居ない。

ちなみに、『本町』は、彼が若かりし日を過ごした下町の名前で、鉄太郎というのは、彼が長年使っている偽名である。

「……今日は早いね、鉄さん」

馴染みの店長が帰ろうとする鉄太郎に声を掛けた。

一部始終を見ていたので、『ご愁傷様』という表情を浮かべている。

「ああ、若造にしてやられたよ」

鉄太郎も苦笑を返すしかない。

しかし、その苦笑はポーズで、内心ではきつとはらわたが煮えくり返るほど悔しがつてるに違いない——、と店長は思っているのだが、鉄太郎自身は本当に笑いが出るような爽快感しかなかった。

負けて気分がいい、というのもおかしいのだが、あれだけ完璧に負けを喫すればそうもなる。

だから、妙な帽子を目深に被った若者が追いかけてきた時は、なんとなく予想

通りだった。

「これ、貰いすぎだから、返すわ」

そう言つて、若者はさつき鉄太郎が支払った札束を差し出す。

大通りでこんなことをすれば、通行人の目を間違ひなく引いてしまうので、なんとかこの裏通りで捕まえたかつたのだろう。

「勝者に哀れまれちや、おしまいだ」

鉄太郎は、両手を挙げて、受け取り拒否の姿勢を表す。

「といつても、俺、旅行者だし。多分、日本円は今日で用済みだしな—」

「旅行者……？ 今日で用済みつてどういう意味だ」

「あんたを見つけることがここに來た目的なんで」

「俺を……？」

鉄太郎は、若者が帽子を脱ごうとしたので、緊張しながらそれを見守つた。

もしかしたら昔の知り合ひかなにかで、その為顔に顔を半分隠していたのか、とも思つていたのだ。が、それは違つた。

彼には、帽子ですっぽり髪を隠さなければならぬ理由があつたのだ。

薄暗い路地裏でも目立つような見事な銀髪に、鉄太郎は、成程、と思った。これでは帽子を手放せないわけだ。

今になって脱いで見せたのは、これから物を訊ねようという、彼なりの礼儀だった。

「あんたに聞きたいことがあるんで探してた。だから、情報料として、これを払うってんでどうだ？」

どう見ても二十歳そこそこにしか見えないのだが、雀荘での態度といい、堂に入り過ぎている。

色んな下層の人間も、成り上がりの人間も見てきた鉄太郎だったが、この若者には何故か気圧されてしまっていた。

「俺はあんたの師匠つてのを探してんだが、今どこに居るか知らねえか？」

白帝君は単刀直入に聞いた。

派手に一局やってみせたのだから答えてくれるだろう、という読みがある。

「『老師』のことか？」
ラオシー

鉄太郎にとって師と呼べるのは、あの老人しか居ない。

本名は知らない。

上海のうらぶれた安宿に住んでいた老人で、よく路地裏で麻雀をしていた。

昼間から酒を呑み、ほとんど麻雀の掛け金だけで暮らしているような生活ぶりだったが、不思議な魅力のある老人だった。

周囲の住民たちが『老師』（先生の意）と冗談半分に呼んでいたのは、麻雀の教えを乞う男たちが後を絶たなかったからである。

一見、貧相で、カモにされそうな風貌なのに、いざ卓を囲むと老人は負け知らずで、一体どんな左手芸（イカサマの技）を使っているんだろう、と鉄太郎も不思議に思った。

しかし、老人はイカサマは一切していない。ただ、並外れた記憶力と、洞察力があるだけなのだ。

老人は教えを乞われても、自分は運がいいだけで、教えるようなことはなにもない、と言っていたが、何故か鉄太郎には勝負事のイロハを一から教えてくれ

た。

曰く『お前さんは金儲けのためには使わんじやろうから』ということらしい。

「君も、老師の弟子か？」

「うーん、俺は、なんつうか……、孫みたいなものだ」

息子、と言ってもいいのだが、見た目の年齢的に、孫と言った方が鉄太郎は納得できるだろう。

「そうか。老師は行方不明なのか？」

「上海以降の足取りが全く掴めねえ。それで、あちこち探してるってわけよ」

「俺は十年以上会ってないぜ？　上海で別れたきりだ」

「んじや、なんか連絡とかあったか？　もしくは、風の噂を聞いたとか、どっか行きそうな場所に心当たりとかは？」

「いや、風来坊な人だったからな」

「そうだよな……」

やはり無駄足か、と白帝君は肩を落とした。

唯一の有力な手がかりだったのが、鉄太郎が知らないとなれば、他に当てはな

い。

一度、任地に戻ろうか、とも思った。随分、留守にしている気がする。

「じゃあ、最後に、もういつこだけ聞いておくが、あんたの他に、弟子とか、親しくしてた奴は居たかい？ 呑み友達とか、女……、うーん、あの歳でそれはないか」

「俺の知る限り天涯孤独のようだったが……。ああ、弟子と言えば、もう一人、居ないことはないんだが……」

鉄太郎は、十年ほど前の記憶をまざまざと思い出していた。

上海の空港で、人生初の体験をしたことは、思い出す度に顔が綻ぶ。

「どんな奴だ？」

「いや、当時は小さい女の子だったんだが……。暇潰しに気まぐれに教えてただけだからな。今は、君くらいの年だろう。今、どこに居るのかは知らないが」

「……それって、もしかして『甲斐馨』のことか？ いや、上海では『沙龍』と名乗ってたかも」

「なんだ。沙龍のことも知ってるのか」

「ああ。よく知ってる」

と、白帝君は人懐っこい笑顔を見せたが、見せない部分では、苛立つような感情もある。

（あのジジイ……、結局、阿姐の行く末が気になって、あの時期に上海に居たのか）

白帝君は、いつだったか沙龍と麻雀をした時、その打ち方が妙に太上道君を彷彿させたので、もしや、と思っていたのだ。

更に、今、鉄太郎がイメージした記憶の中のシーンが伝わってしまった、分かったことが一つあった。

「先生シーサン（ミスターの意）か。阿姐……、じゃねえ『沙龍』の初恋の人ってのは」「どっから聞いてきたんだ、そんな話。プロポーズはされたけどな」

「プ——、プロポーズう？」

脳内に沸いたイメージ、あの大泣きの顔はそういう意味か、と白帝君は驚いた。

空港のロビーのような場所で、小さな沙龍が若き鉄太郎になにかを必死に訴え

ているというシーンだ。

いくら『読心』に長けた白帝君でも、それがプロポーズの場面だと分かるはずもない。

「ああ、沙龍が十歳くらいの時にな」

「そりゃ、随分マセガキだな。見かけによらねえっ—か……」

「そうだな」

鉄太郎は懐かしそうに笑った。

結婚を餌に釣った女は過去に何人も居たし、出まかせのプロポーズなら何度もした。

しかし、そんな自分がされる側になろうとは、思いもしなかったのだ。

まして、相手は小さな女の子で、その分真剣ときている。

(あの時は宥めて逃げたが、実は結構嬉しかったんだぜ)

こんなロクでもない中年にも本気になって泣いてくれた子が居た——、という
思いは、鉄太郎の暖かな思い出になっているのだ。

「老師の話はいいのか？ あの歳だから、もう、この世にはいないって可能性も

考えたんだが」

「いや、それはない。どっかで酒と博打の日々を送ってんのは間違いないぜ」

「だといいんだが。悪いな、力になれなくて」

「いや、興味深い話が聞けた」

じゃあな、と背を向ける白帝君を、鉄太郎が呼び止めた。

「あ、待ってくれ。今、思い出したんだが、一つ、心当たりがある」

「……？」

「一度だけ、上海に老師を訪ねて来た男が居たんだ。老師は『陸』と呼んでいたが……」

「陸、ね」

「やけに汚い格好をした男だったんで、よく覚えてるんだが、その陸という男が『気が向いたらワインを飲みに来い』とか言っていた気がする」

「ほー……」

この前、中東で陸圧を見つけた時ははぐらかされたが、やはり、着々と準備はしているようだ。

『ワイン』は隠語である。

白帝君は、思わずニヤリと笑って、

(ヴァチカン——か)

帽子を被り直してその笑みを隠した。

「あまり参考にならないかもしれないかもしれんが、俺の知ってることっていったらそんなもんか」

「いや、かなり参考になった。多謝」

やはり、一旦、帝都に戻ろう、と白帝君は思った。

あまり任地を放ったらかしにしていると九雷に怒られるし、沙龍のことも心配だ。

21 冥府の攻防

水雲宮では、紫凜が二十四時間沙龍を演じることになった。

従業員を騙せないようでは替え玉として使えない、という九雷の言も尤もであるが、寝ている間すら沙龍で居ろ、というのはなかなかに厳しい。

ちなみに、この件を知っているのは、四方将神のみである。

「完璧だな」

九雷とともに水雲宮に『帰宅』した紫凜は、紗衣や悠花に対して、普段通りの沙龍を演じてみせた。

一体、どこでその口調や仕草を覚えた、と言いたくなるほどだ。

醸し出す雰囲気すらも、沙龍そのものなのである。

変化の術というのは、最高レベルまでに昇華させると、一部の記憶や感情まで盗むことができるというが、紫凜の場合まさしくその域まで達していた。

「お褒め頂き恐縮ですわ。でも、佑様には一度看破されましたの」

「真武君が？ 成程、やはり、親密度に比例するか」

しかし、紫凜は、先のシチュエーションでなければ、木佐でもなんとか騙せるかもしれない、と思っっている。

「それで、今後の予定は？」

「近々、西華で開催される蟠桃会に同行してもらおう。上手くいけば、予てからの仇敵を失脚させられる。それが誰かということは、お前なら知っているだろう」

「それは、どういう——」

紫凜は、言葉を詰まらせた。

が、九雷はことも無げに言う。

「敖広と個人的に親しかつたそうだな？」

つまり、敖広から聞いているだろう、という意味だ。

「個人的に、という表現が当てはまりますかどうか。私も四神府のスタッフとして長年勤めておりますので、忘れ去った月日の中で、若気の至りもあつたかも知れませんか」

紫凜は型通りにそう答えた。

九雷の邪推を肯定も否定もしていない、秘書官としては優秀な答え方である。実際、紫凜は直接、敖広の口からはつきりと東王夫の名を聞いたことはない。「星様から、先日、ある程度の背景は聞かされました。一秘書官として、色々と推測はできますが」

「推測ができるなら充分だ」

「『起家』ですか……？」

九雷は頷いた。

いい勘をしている、という顔だ。

「お前は特になにもしなくていいが、常に天使軍が狙っていることは忘れるな。魔界サイドと違って、こちらは本気で殺しにくる」

「はい」

「今ならまだ間に合うぞ。秘書官である以上、拒否権はないが、辞職するとういう手ならある」

辞職したところでこんな内事を知ったからには、監視付きの生活を余儀なくされるだろう。

それを承知で、九雷はそんなことを言う。

『性格が悪い』と噂されているのは本当だ、と紫凜は思った。

「いいえ、やりますわ」

紫凜は毅然と言った。

自分の仕事は誇りである。辞める時は死ぬ時だ、と紫凜は思っているのだ。

「元より、下士官の命は上官のものですもの」

「お前の言う『上官』は、俺じゃないだろう」

「……」

九雷がいちいち癪に障ることを言うので、さすがの紫凜も、にこやかな微笑みを見せることはない。

「蟠桃会までは適当に遊んでおけ。天使軍の襲撃があつた場合、可能なら全力で阻止していい。尤も、護衛もつけてはいるがな。……以上だ。なにか質問はあるか？」

「いいえ」

ドアを背にしていた九雷が頷いて背を向けたところを、紫凜は呼び止めた。

「……総司令様？　では、夜伽をさせて頂きますわ。恋人同士が一つ屋根の下で、別々に寝るなんて、不自然ですもの」

九雷への反発心から、そんな言葉が出た。

勿論、本気で言ったわけではないのだが、紫凜はそうなっても構うもんか、と思った。

普段、どこまでも嫌味で冷徹なこの男を平伏させてみたい、という女としての一面もある。

「俺と沙龍は、今、『喧嘩中』だ。水雲宮の従業員もそれを知っている」
さすがに九雷は動じなかった。仕事の続きのような口調だ。

「……では」

紫凜も怯まない。九雷の腕を取って、見上げるような秋波を送った。

「仲直りは致しませんの？」

「……」

「この姿がどこまで『本物』に近いか、お試しになっても損はないのではありませんか？」

「試す……?」

九雷が、眉をひそめた。

「……………ふん」

沙龍は、モニターが映し出すその映像を最後まで見ることはなかった。

ただ、スツと立ち上がった後、その十四インチのモニターを拳で叩き割ったので、栄吉はびびった後に「事務所の備品がく！」と叫んだ。

「りよ、緑麗様、じゃなかった、係長、落ち着いて、じゃなくて、どーしてください、もう予算ないのに！」

「やかましい。おい、栄ちゃん」

「……は、はい？」

「この映像、本物なのか？ 確かに場所は見慣れた水雲宮の応接間だし、出演者も見たことあるような人物だが」

「そりゃ、私の腕が鈍ってなければ、ですがね」

栄吉は、泰山府の職員になる前は『ウィザード』とまで呼ばれていたハッカーである。

不正アクセスなど朝飯前のその栄吉に、火雲宮のネットワークの要所要所に侵入させたのは沙龍だった。

勿論、力尽くで脅した末の、ハッキングである。

水雲宮に繋がったのはただの留守宅が気になるという程度のものであったのだが、小さなウィンドウに自分の姿が現われた時は録画映像か、と思った。

しかし、それが自分のそっくりさんで、九雷まで登場したとなれば、沙龍がモニターを叩き割ったのも仕方がないかもしれぬ。

例えば、これが、ルシファアの手の込んだ手品なら、怒る必要もないのだが――、と思った時、

「カー」

事務所の窓辺に降りて来たカラスが、一声、鳴いた。

その黒光りした目は、心なしか嗤っている――ように沙龍には見えた。

「……栄ちゃん」

「はい？」

「虫取り網……、いや、銃、寄越せ。……うらっ！ 死ねっ！ この害鳥がああ
ああ！」

栄吉のベレッタを強奪して、全弾撃ち尽くし、さらに沙龍は聖魔剣で窓枠をも破壊した。

当然、カラスは舞い上がって逃げたのだが、沙龍の破壊行動が一段落すると、また舞い降りてきた。

「カア」

「……」

半壊した事務所を見渡す栄吉はもうなにも言わない。

今、下手に文句を言ったら殺されるかもしれないのだ。

「いや、今のはもうちよい見るべきだったんじゃないの？ 元帥さん、乗り気には見えなかったし」

カラスが喋ったのも、もはや栄吉の中では驚きに値しない。

先日も、江戸っ子口調の目つきの悪い霊獣を見たばかりである。

「……素朴な疑問があるんですがね、ルシファー猊下」

沙龍は抜き身の聖魔剣を提げたまま、カラスを睨んだ。

「なんだ？」

「天使ってのは、両性具有もしくは無性だと聞いてますが」

「ああ。それか。そりゃ、人間が勝手に作ったイメージだ。仙人が霞食って生きてるってのと同じくらいのデマゴギーだぜ」

「……じゃあ、元天使な猊下は、やはり、男性なので？」

「見たいか？」

「いえ、結構」

「まあ、見せたくてもこの姿じゃな。まあ、あれよ。天使も悪魔もついてるか凹んでるか、どっちかだっただけよ」

「いっそ、無性だったら、この世の半分の犯罪はなくなると言うんですけどね……」

「うーん、それもさー、味気ないと思うぜ？ 俺のカミさんも同じようなこと言ってたが、無性生殖なんてオナニーみたいなもんじゃん、絶対、虚しいって、

それ」

沙龍の一旦停止していた怒りが再発して、カラスの面前に、凶悪な相貌が現れる。

「だったら、女に生まれてきて、浮気されてみるや、この絶倫大魔王がつ！」
「……コ、コワイよ、その顔」

今の沙龍は、ルシファーすら怯えさせる怒りの炎に燃えている。
当然、ルシファーはこの機会を見逃さないだろう。

「まあ、そらそうだよな。浮気現場目撃したら、ヒスも起こすよな」

「……」

「もういつそ、自分も浮気し返しちゃうとかどう？ まあ、なんにせよ、同情はするぜ、うんうん」

「……」

沙龍はじつとカラスの足元を見つめている。

烈火の如き憤怒は、この静止状態にもう一度溜め込まれている——、と見える。

しかし、それはルシファアの誤読であって、沙龍は、ただ待っているのだ。この不可解な沙龍の動静は、長年そばに居て、呼吸を知っている者にしか分からない。

その時、どこからともなく剣閃が走って、カラスの足元の崩れかけた窓枠が真つ二つにされた。

董天は、普段は多才な攻撃技を持っているが、之信の姿の時は、やや細身の刀を得意としているらしい。

「……どわっ!？」

すかさず、沙龍はカラスの舞い上がる動きを予想して、一瞬でその足を掴んだ。

沙龍にとって、このタイミングで董天が動いたのは当然で、礼を言うこともない。

カラスはバタバタとあがくように羽を動かすが、既にながちりと沙龍に掴まれた細い足はびくとも動かない。

「ルシファア 猊下。本体は別の場所でリラックス中でしょうけど、ビジネスの話

をしてもいいでしょうかね」

沙龍の左手で足を、右手で首を掴まれたカラスは、もはや動けない。

観念したルシファーは冷静に言った。

「歓迎だ」

「この際、テデイベアに隠しカメラを仕込んでいたのは、不問にするとしても――」

「イヤン、バレてたのね!？」

ルシファーとて、ばれるのは承知で贈った品だろう。

沙龍も気付いていながら、わざとそれを放置していたのだ。

そもそも、悠花が気に入って、捨てるに忍びないからと言って取っておいたテデイベアを、応接間のソファに鎮座させておいたのは沙龍である。

先ほどの水雲宮の映像も、そのテデイベア視点になっている。

ルシファーが覗き見するのを承知で、更にそれを自分も利用しようという腹だ。

「私にあんな映像を見せて、怒りを煽ろうというのは、あまりにお粗末じゃない

ですかね？」

「……そうか？ 単純な方法ほど、効果的って場合もあるぜ？」

「そういう、悪魔の常套手段を講じているように見せかけて、貴方は遊んでますが……、そう言えば、あのお役所勤め風の眼鏡君はなににしてんでしょね？」

「さあ、食パンでも切ってんじゃねえか？」

「いや——、なにを探してる？ と、言いましょうか？」

沙龍のその不敵な笑みを前に、カラスも同じ表情になる。

そして、カラスが微かに羽を動かそうとしたので、沙龍の背後に控えている之信と、わけが分からないまでも協力体勢の栄吉が、挙動を見せた。

「動くな、之信、栄吉！」

その沙龍の一喝で、二人とも停止する。

「成程、大したもんだ。いや、参った。どうやら、俺ア、姫さんを侮ってたようだぜ。なんで分かった？」

「そりゃ、『本物』に聞いてくれ」

沙龍はにっこりと笑って言ってやった。

「あの総司令が、『本物』の方を手元から離すわけないじゃないですか」
「そう思わせる罫かもって思ってたけどな。ま、いいさ。俺も、既に楔は打つてる」

「楔……？」

沙龍が混乱させようと思ってたことも、ルシファーにはそれほど効果はない。
い。

どころか、やはり、ルシファーの方が上手なのだ。

「俺はな、ケチなことにはしない主義なのよ。どれが本物か分からねえなら、全部連れ帰るまでだ。偽物も本物も、黄金龍も、絶世の美女の体も、全部な」

「……」

沙龍は、無意識に額を押さえていた。

ここを押さえられることは、沙龍にとっては自由を奪われることを意味する。

之信——いや、董天は、その沙龍の異変に気付いた。

沙龍の上体が、一瞬、揺れる。

「どうだい？俺と一緒に来ねえか？俺なら、姫さんを本当の意味で救ってや

れるんだがな」

「救う……!?」

なんだろう。

これは、薬物とは違う。

なにか、もつと、単純な――。

「救うって、どういう意味……!?」

「俺は、姫さんの密かな願いを知ってるし、それを叶えてやることもできる。いや、もつとはつきり言った方がいいか？ あんたは、緑麗を憎んでいるだろ？」

「……っ!？」

その言葉は、沙龍の額から脳天を直撃した。

ただの、動揺を誘うための甘言ではない。

魔界の盟主としてのルシファーが、魔力を持った言霊を操っているのだ。

しかし、いくらルシファーとはいえ、この仮のカラスの姿で、強力に呪縛するような言葉を紡げるはずがない。

その言葉が、効果的に沙龍の脳内に入り込むような細工を予めしていたのだ。

彼が「楔は打った」と言っていたのがそれである。では、いつ打ったのだらう？

「そして、昔の体なんて、いつそなくなってしまうればいいと思っている——」
董天は、まだルシファアの意図が分からないので、動けない。

「緑麗様……！」

栄吉は、沙龍の異変を感じて駆け寄ろうとするが、沙龍は額を押さえたまま、さつきと同じ仕草で制した。

「動くな——」

その声は苦しそうだ。

既に、カラスは手から離れていた。

片手を机について、片手で額を押さえたままの沙龍は、まるで催眠術にかけられたように、思考がぼやけていくのを感じている。

「なあ、考えてみるよ。今の姫さんを見ている奴が、一体、何人居るってんだ？ 誰もが昔の姿と昔の力の上に、あんたの存在を重ねてる。恋人も友も、皆、昔の縁で姫さんの傍に居るだけだろう？」

ここで、沙龍が「その通りだ」と思ってしまったえば、ルシファアの勝ちである。しかし、沙龍の精神力は並ではない。

董天はそれを知っているから、祈るような気持ちで、見守っているだけだ。

今、自分や栄吉が下手に動けば、ルシファアの思う壺である。

「今の姫さんだけを必要としている奴がどこに居る？」

「……居るさ」

「……？」

「一人、居る」

沙龍が、呻くように言った。

そうだ、一人だけ居るではないか。

緑麗とは全く無縁の、上海からの縁で傍に居る人間が――。

そう思った瞬間、思考と体を縛っていたものが、フツと外れた。

「……おっと！」

金縛りのような状態から脱した沙龍は、再びカラスの足を掴もうとしたが、今度は逃げられた。

「残念ながら、ルシファー猊下。ここで卑屈になるほど、ヤワじゃないんでね！」

さらに、取り落としていた聖魔剣の柄を足先で掬って跳ね上げ、左手に滑り込ませると、黄金色の刃を出現させ、カラスの居た場所を寸分違わずに突き刺した。

しかし、それも数枚の羽を落としただけで、逃げられる。

「もうちよいだったのに。やっぱ、手強いな」

カラスは、沙龍の背後の二人をチラッと見て、両羽根をすくめてみせた。

多勢に無勢。

「まあ、しばらくは我慢比べだ。言っておくが俺はしつこいぜー？」

「之信、栄吉、捕獲しろ——！」

沙龍が言い終える頃には、カラスは夜の空高くに舞い上がってしまった。

今後のためにも、あのカラスは確保しておこうと思ったのだが——。

「……え？」

その時、点になったカラスの黒い体が、意思を持ったかのように動く暗雲の中

に呑まれた。

「な、なに……？」

沙龍には、その暗雲が巨大な手に見えた。

『まったく、騒がしいのう……』

くぐもった声が、サラウンドで聞こえる。

「げっ、泰山府君——！」

カラスはそう言ったきりで、黒々とした巨大な手に握りつぶされてしまった。

手の形をした暗雲は、渦を巻くようにそのまま凝縮していく。

それが、やがて人型となった。

「これはまた、随分ごゆっくりのお出ましで……」

栄吉のぼやきに似た呟きの前に、この冥府の主にして創造主の、泰山府君その人が、本来の姿で現れた。

沙龍が蟠桃会で一度見たことのある小柄な老人ではなく、精悍な壮年である。

二度目に会った時は妙ちくりんな小動物の姿ではあったが、確かに、この存在感は同じだ。

「……そういうの出来るんなら、どうして最初っからやってくんないかなー」
沙龍も、半分文句のような呟きが出る。

「ウム、メロドラマがいいところだったのじゃ。無理を言うでない」
老人の姿の時よりは確実に三十年分くらいは若い、口調はいつもの通りである。

見た目の華やかさは敖閏といい勝負なのだが、敖閏にはない、どっしりとした威厳や貫禄のようなものがあつた。

「しかし、昼のドラマはちよいと生ぬるいのう……。モザイクかけてもいいから、『ラ・マン』くらいやっても罰は当たらんと思うんじゃないか……」

「で、ルシファー―猊下は？」

急かすように沙龍が言うと、

「ああ、意識体の方はさすがに逃げられたわい。コレはただのカラスじゃ」
泰山府君が放り投げたのは、目を回している一羽のカラスだった。

「ム……。タレより塩にするか……」

沙龍が冗談とも本気ともつかぬ顔で言った。

また、振り出しに戻ってしまった、という鬱積があるのだ。

木佐にはSOSを出したのに、ウンともスンとも言ってこない。

最愛のはずの恋人は、被放置プレイ中の上、自分のそっくりさんとなにやらよろしくやってる。

誘拐未遂犯は取り逃がした。

事態はなにも好転していないではないか。

「で、嬢ちゃんはこれからどうするんじやー？」

「勿論、ここから出て行きます」

「ここに居た方が安全だと思うがのう……」

「あんな誘拐未遂犯が常にウロウロしてんのに？」

「あの小倅はな、粋がつてはいるが、ここじや嬢ちゃんに直接の手出しは出来んのよ。ただ、瘴気と陰気のレベルが自分の本拠地とほぼ同じってだけで、自由に行き来はできるようじやが」

しかし、その行き来も、小動物に自分の意識を乗せなければできないわけで、結局、ルシファーはここでは物理的な力はなにも持たない、ということになる。

「それでも、奴の挑発に乗って、出て行くか？ 嬢ちゃんがここを出て行くということは、新たな敵を作ることになるかもしれないぞ？」

「どうやら、泰山府君は沙龍を戒めに来たようだ。」

「……」

沙龍は、口をへの字に曲げたまま、足元の二メートル先のあたりを見ている。

誰にも視線を合わせたくなかったからそうしているだけで、しかし、泰山府君も、董天も、栄吉も、沙龍を黙って見つめていた。

「泰山府君先生は、私を『蘇生』しておきながら、『死ね』と言う——」
絞り出すように言ったその言葉は、涙を伴っていた。

「言っとらんぞ」

「言ってるよ。結局、人形で居ろってことじゃないか、そんなの——」

「……」

董天は、人前でこんな風に泣く沙龍を見たことはなかったもので、驚きを隠せなかった。

ポロポロと涙を落とす沙龍は、小さな子供のようだ。

董天が葬式用のような真っ白いハンカチを取り出して、黙って差し出す。

沙龍はそれをひったくるようにして奪うと、ブーツと思い切り鼻をかんだ。

「荒野に放り出されたって、冥府に置き去りにされたって、元帥も、キサさんも、協力してくれなくなっちゃって……、私は一人になったって、生きることをやめるわけにはいかないんだ。それが、唯一の、私が私である証明なんだから」

言葉を続けるとますます泣けてくるので、もうなにも喋りたくないのに、なにかが溢れ出したように止まらない。

「私は『黄龍の保持者』であることをやめるわけにはいかないんだ。だから、敵は徹底的に叩き伏せなきゃいけないんだよ……」

「……」

「黄龍を否定する者も、奪おうとする者も、全員、敵だ。私に『人形で居ろ』と言う奴も、味方を装った敵だ。だから……」

泰山府君は、人界の優男とは違って、妙齡の女性の涙にほだされることはない。

だが、悠久の時を生きてきたからと言って、鈍くなる、というのは意味が違

う。

「……。やっぱ嬢ちゃん、ウチの娘に似とるのう」

「娘さんが居るの？」

「ウム。隙あらばワシを殺そうとしとるが」

「……どこも世知辛いね」

「ウム。……まあ、いいわい。九雷には嬢ちゃんを冥府から出すなと頼まれておるが、もし、嬢ちゃんがワシの目を盗んで勝手に出て行ったら、それはワシの知ったことではない」

「……」

「しかし、さつきも言ったが、それは新たな敵を作ることになるかもしれないぞ？ それは覚悟しておくんじゃない」

沙龍は、ゴシツと目をこすって頷いた。

赤や橙の提灯が点々と続いている。

その下では、既に歓談や笑い声が聞こえており、様々な男女がこの前夜祭を楽しんでいるが、鬼のような形相をした九天玄女はシャープな隊服に身を包み、手には巨大ハンマーを持って、一部の桃林を薙ぎ倒していた。

九玄が向かう先には、悲鳴や爆発音が轟いているのだが、その喧騒などどこ吹く風で、自分たちの時間を楽しんでいる神仙はやはりつわものである。

喧騒の中心に居るのは、いつだったかの蟠桃会でも暴れていた前科者である。周囲を巻き込んだ大バトルロイヤルになっているが、九玄は目を吊り上げたまま、冷静に左右に指示を飛ばした。

「セツキー、飛龍を抑えろ！ 天化、照明弾！」

「ラジヤ！」

清虚道德真君が取り出した霊符は、単純な者ほど引っ掛かりやすいという幻術

を発動させるものだ。

猪突猛進、力技しか知らない飛龍にはもってこいの技である。

かくして、呆気なくお縄頂戴となった飛龍は、前夜祭の会場の片隅に連行され、特に暴れることもなく観念している。

しかし、九玄はいつもの倍以上の巨大な般若面を背に怒っていた。

「貴様は、一体、いつになったら自制心という言葉を感じる!? TPOを考慮ッ」

「ピーティオーってなんだ？」

「T・P・O！ time！ place！ OK牧場！」

「occasion（場合）っすよ、隊長」

清虚道德真君が背後でぼそつと訂正したのを、九玄は素早くパイ責めにした。

一体、どこからクリーム満載のそのパイを持ってきたのだろうか。

「……コホン。つまりだな、時と場所を考えろ、ということだ。喧嘩をするなどは言わないが、この蟠桃会の最中はやめてくれと言っただろうが。去年も一昨年も一昨々年も、その前の年も!!」

「俺は、売られた喧嘩は全て買う。時と場所は問わない」

「だから、それを問え、と言っている！」

「……。原因は聞かないのか？」

「なに……？」

「いつもは聞くのに、何故聞かない？」

「聞いて欲しいのか。何故、こんな騒ぎになった？」

「客の中に、毛色の違う奴が居たんだ。妙な『氣』を放っていて、やたら強そうな感じがした。それで、何者かと訊ねたら、いつの間にか喧嘩になっていた」

「それで、そいつはどこに行った」

「気付いたら、居なくなっていた」

「『妙な氣』って、どういうんだ？」

「よく分からない。ただ、俺が会ったことのある誰とも違う」

九玄はしばし腕組していたが、それを解いて、鋭い声を発した。

「……。セツキー」

「はい」

クリームだらけの顔を拭きながら、清虚道德真君が同じく緊張感を携えて返事を
をする。

「不審者が居ないかどうか、パトロールを強化しろ。……速やかに」

「ラジャーっす！」

九玄とて、いつもいつも飛龍を説教しているわけではない。

『鉄拳制裁』が終われば、普通に一緒に飲み食いもする。飛龍は、基本的に現住所は九玄の屋敷になっているし、保護者関係も変わらない。

黙々と九玄の隣でスタッフ用の料理を食べる飛龍に、

「沙龍が居るのに、なんで向こうに行かないんだ？」

九玄が右奥のテーブル席を視線で指した。そこでは、沙龍が木佐や赤帝君と一緒に酒宴を楽しんでいる。

今、二人が居るのはスタッフ席とも言うべきカウンター席で、先ほどから忙しそうに、休憩中の給仕や警備員たちが入れ替わり立ち代りやって来る。

「九雷元帥も居ないようだし、私に遠慮せずに行って来い」

「九玄……、あれは緑麗じゃないぞ」

横目でそのテーブル席を見ながら、飛龍は骨付きチキンにかぶりついた。

「……？ なにを言ってるんだ？」

「俺には分かる。あの緑麗には、緑麗の匂いがしない」

「……？」

改めて、沙龍を見た。

九玄には、特に不審な点は見当たらない。

ならば、沙龍の体になんらかの変化があつて、飛龍がそれを感じ取っているのかもしれない、と九玄は思った。

ミニ黄龍への変身時期が近いのかもしれないが、果たして、それだけだろうか。

「九玄こそ、なんで向こうに行かないんだ？」

飛龍がフライドチキンの骨で指したのは、反対側の左側の座敷席である。

ちよつとしたVIP用のその席には、天真と碧霞元君、という二人の姿があつ

た。

「あの大夫は、九玄のことが好きなんじゃなかったのか？」

「……」

「やっぱり若い方がいいのか」

「……」

「都合が悪くなると聞こえないフリをす、るッ——」

ハンマーで殴られた飛龍は、そのままフライドポテトの中に突っ伏した。

夜も更けて、客室になつてゐる棟の渡り廊下を歩いていく人影を追いながら、九玄はそばの灌木に身を潜めた。

「……」

その時、ヘッドセットに振動のみのコールが入つたので、小声で応対した。

「こちらキューゲンちゃん。タダイマ、不審人物を尾行チュー。用件は速やかにどうぞー」

『隊長、呑んでますね？』

天化の声である。

「やかましい。もう勤務時間外だ。いいだろうが」

『第七班から、結界修復の痕跡発見、との報告がありました。東南東02エリアです』

「分かった。調査隊を現場に向わせる。各自武装を点検しておくよう——、にイツ？」

コソコソと通信する九玄の背中を、ツイッと撫でるものがあつたのだ。

九玄が悲鳴を上げなかつたのは、長年の訓練の賜物である。

『隊長!? 隊長、どうしたんですか!? 大丈夫ですか!?』

「……あ、ああ。心配すんな。コケただけだ」

そう言って誤魔化したのが、心臓はまだバクバクしていた。

アルコールが入っているためか、心拍数が通常よりも格段跳ね上がっている。

「なにやってるんです？」

直接耳元に聞こえたその声はこれでもかというくらい甘い声音で、これは、下

手な刺客よりも性質が悪いかもしれない。

「……お、お、お、脅かすなッ！ なに考えてんだ！ バカッ！」

ヘッドセットの音声を切って、九玄は間近の天真に小声で抗議した。

そして、天真の口説きが始まる前に、片手を天真の顔面にかざして、ひとまづは仕事を済ませる。

「付近一帯は念入りに調査しておけ。後で私も行く」

天化にそう告げて、通信を終える。

更に、追っていた人影が、部屋の中に入るのも見届けた。

それを、一緒に天真も眺めている。

「……」

「……」

「……ふう」

とりあえず、耳と目の仕事が終わって、一息ついた。

「すみません、お仕事申中だったんですね」

「……」

「大丈夫ですか？ ごめんなさい。そんなに驚くとは思わなかったのです……」

「腰が抜けた——」

「おやおや。貴女ほどの方が、一体どうしたんです？」

「いや、ちよつと、酔っ払ってるだけだ。それより、天真大夫……、今の……」
と、渡り廊下の先を指差す。

「ああ、公主がどうしたんです？」

さつきまで九玄が尾行していたのは、沙龍なのである。

なんとなく、飛龍が言っていたことが気になって、後をつけてしまったのだが、今も別に不審な動きをしていただけではない。前夜祭がお開きになったので、自分の客室に戻っただけである。

「見なかったことにしてくれるか？ 別に仕事の一環で尾けていたわけではないし……、なんと言うか、じゃあ、仕事じゃないのかというと、そうも言い切れないというか……」

「……？ それはいいんですけど……。本当に大丈夫ですか？」

「なにが？ ……お、おい」

天真がごく自然に腰に手を伸ばしたので、防御する暇がなかった。しかし、口説いてくる時とは違う目だ、とすぐに分かる。これは『医者』の顔だ。

「じつとして」

抵抗せずに身体を預けると、腰がフワツと軽くなった。

天真の手が、ついでにアルコールのせいで早まっていた血流を正してくれたよ
うだ。

「……いかがです？」

「あ、ああ、大丈夫だ。すまん」

「立てますか？」

しかし、立ち上がるとうとした九天玄女を、天真は言葉とは反対に、制した。

「いえ、やっぱり、そのまま」

「……？」

今度は、思いつ切り『男』の顔で、口付けてくる。

この忙しいまでの切り替わりについていけず、いつになく、九玄は防戦一方

だ。

「婚約者殿を放っておいて、いいのか……？」

「いつの話をしてるんです？ 大体、婚約者じゃなくて、元婚約者候補なんですけどね……」

天真は、この前、碧霞元君に言われたことを、そのまま言っているだけだ。しかし、今、口説いている最中の女性に対する言葉としては、もう少し足りないだろう。

「さあ——、焼け木杭に火が付くのも、珍しいことじゃあるまい」

フツと笑う九玄は、その天真の押し強そう弱そうな部分を笑ったのだ。

「もしかして、妬いて下さったとか？」

「どうか——。正直、自分でも分からんのだ」

それは、本当だった。

色んな恋愛を重ねてはきたが、結局、九玄にとって、いつも男というのは、人生を紛らわすものでしかない。

『本命』が振り向かない限り、そうやって、馬鹿の一つ覚えのように数百、数

千の月日を繰り返すのだ。

結局、純愛に戻る、と言った紫凜が、羨ましく感じる。

「嫉妬というものが、どういう感情だったのか、もう分からないほど、無駄に生き過ぎてるのかもしれない」

天真は、それを聞いて少し首を傾げたが、九玄のこの反応はそれほど悪くないのではないか、と思えた。

今までは、何度真剣に口説いても、のれんに腕押しのような感じだったが、今日は少し違う。

九玄が多少酔っ払っているというのもあるが、手応えを確実に感じた天真も多少浮かれている。

「嫉妬——まではいかなくとも、『自分に言い寄っておきながら、なに昔の婚約者もどきとイチャついてんだよ』って感じ？」

にこにこしながら言う天真に、九玄は凶星を突かれた気がした。

「てめー、ぶっ殺すぞ」

紫凜は、深夜遅くに九雷の客室を訪れ、型通りの報告を済ませた。

前夜祭の今日は特に何事もなかったが、明日からの蟠桃会を思うと、緊張の色は隠せない。

「もう一つ、ご報告、というより、ご相談があるのですが」

「なんだ？」

「先ほど、陛下にお会いしたのですが……」

「……成程」

九雷は、紫凜が躊躇している理由が分かった。

「情報を与えてなかったことは詫びる。もし、陛下がなにも言っていないと必要ないと思っただが。……それで、口説かれたのか？」

その直接的な言葉に、紫凜は眉をひそめた。

本来、紫凜は天帝に拝謁できる身分ではないのだ。この反応は当然と言える。

「い、いえ……。具体的にどうこうと言うことではなかったのですが、陛下が緑麗様を慕っていらっしやるのは十分に分かりましたので」

「適当に、というわけにはいかないだろうが、向こうが露骨な態度を取らない限り、軽く流してもいいと思うが？」

「ですが、陛下を騙していることになります」

「それについては気にするな。任務中の行為は、陛下に対する不敬罪にはならない。俺が罷免にならない限り、お前が罪に問われることはないはずだ」

「……ですが」

「自信がないと言うのなら、あまり部屋を出ないことだな。陛下と二人きりにならないようにすればいい」

「はい……」

こうしたビジネスライクの関係でいる限り、特に問題はないのだが、紫凜はこの前の一件以来、九雷に対する苦手意識が拭えない。

数日前の水雲宮で、紫凜が色仕掛けで九雷を落とそうとした時、彼女にとって驚くべきことが起こった。

紫凜の扮した沙龍の小さな手が九雷の肩にかかった時、

「試すまでもない。お前は沙龍じゃない」

そう言つて、手を外されたのだ。

この手を、外す男が居るとは思わなかつた。

実際に、今までは、一人も居なかつたのである。

「その手腕は、敵に対して發揮されるものだろう」

そう言われては、引き下がるしかなかつた。

この冷徹な男の中に、あの陽気で大らかだつた敖広の一部でも存在するのかわかると、許せない氣もした。

「明日、起家が動くかどうかは分からないが、充分氣をつけてくれ」

「はい。心得ております。……では、失礼しますわ」

紫凜が辞去しようとする、九雷は、一呼吸置いて、視線を寄越した。

引き止めたわけではないのだが、結果的にそうなつた。

九雷は、ただ、沙龍の姿をした紫凜の全身像を、口の端をかすかに上げて眺めているだけだ。

「あの……？」

「……今日は誘惑してこないのか？」

薄らと微笑みさえ浮かべて言う九雷の本意が、紫凜には全く分からなかった。

一度拒絶しておきながら、その言い草はなんだ、と思わずにはいられない。

「私を、からかっているらしいやんですか？ それとも……。この前のことでしたら、お詫び致しますわ。任務を徹底しようとし過ぎでした」

「そういう意味ではないんだがな」

「……」

「あの時は、沙龍が見ていたから拒絶しただけだ。いくらなんでも、情人の目の前で浮気はできない」

「え……っ!？」

「気付かなかったか？ 誰の仕業か知らないが、手の込んだことをする奴がいる」

「……」

紫凜は、探るように九雷の瞳を見つめた。

つまり、もう一度誘って来い、と言っているのだろうか？ 今なら、試してやってもいい、とでも？

(いえ、そんな甘い男ではないはずよ……)

そう思った自分の勘を信じることにした。

が、九雷の視線に射抜かれたように動けない。

「……」

九雷は、デスクに頬杖をついたままだ。

明らかに、紫凜を観察している。

「俺に必要以上に近付く理由はなんだ」

「……」

これは敵わない——、と紫凜は思った。

鈍臭い上官に長年付き従っていたせいか、こういう緊張感を忘れていたよう
だ。

「お慕いしているからですわ。……そう、思っただけだけじゃないの？」

「そこまで自惚れてはいない」

「……」

「諜報部に居たことがあるそうだな？」

「……!? それは、確かに。ですが——」
探られているのだ、とやっと気付いた。

「俺は、これ以上、赤帝に恨まれるのは歓迎しないんでな。できれば、奴の腹心の部下は無事に返したいと思っている」

歓迎はしないが、例えそうなっても構いはしない、という意味だ。

紫凜には、その言葉の恐さが分かる。

「諜報部時代の仕事は、全て完遂しております。そんなこと、調べて頂ければすぐお分かりになるかと」

「ああ、調べたが出てこなかった。だから、聞いてる」

「誓って、他意はありません。私の忠誠は星様にだけありますわ。それを総司令様はご存知ではありませんか」

「別にそれを疑っているわけじゃない。ま、いいさ。不問にしよう」
「……失礼します」

紫凜は、完全に打ちのめされた気分になった。

23 蟠桃会開催

風が渡り、花の香に満ちたこの楽園で、年に一度の盛大な酒宴が催されようとしていた。

集うのは、名だたる神仙である。

この園遊会に招待されて欠席するということは有り得なかったし、慣例上、許されてもいなかった。

が、今、その席を辞そうとする男が居る。

預けていたアーマライトを返して貰った時は、受付の係員に怪訝な顔をされたが、仙界も縦割り行政なので、それぞれの官吏はそれぞれの仕事しかない。

しかし、それを見咎めた警備スタッフはしつこかった。

「……うるせーな、出欠は取ったんだ。義理は果たしただろ？」

陽輝は、追い続ける警備員の一人にそう言って、すたすた歩いていく。

肩の上の小龍は、陽輝と同じ「うるせーな」という表情をしていた。

「ですが、五分だけ開会式典に出席して帝都にお戻りになるなんて前代未聞で……」

「俺は、そういうの大好きでね。最初に常識破る奴になるのは、大歓迎だ」

警備員は、更に抗議をしようとしていたが、陽輝に追従していた祥倫に宥められた。

祥倫はこういうことに慣れているので、手際も鮮やかである。

どんな手を使ったのか、警備員を追い返すことに成功した祥倫が、陽輝の後を追いかけてくる。

「……宜しいのですか？」

「構わねえよ。俺が蟠桃会を欠席したって、天ちゃんに迷惑かかるわけでもねえし」

四方軍の大將は主賓には入らないので、問題ないだろうというのが、陽輝の理屈だ。

「私が言ってるのは、奏欽様のことですが」

と、祥倫が低い声で言った時はギクリ、とした。

「……あ？ 奏がどうしたって？」

「というか、あちらに……」

陽輝が視線を泳がせると、華やかな正装に身を包んだ奏欽が、見事な桃花を背景にこちらを見ていた。……というよりも、すごい形相で睨んでいた。

蟠桃会の開会式典は、今、メイン会場で行われている真っ最中であるが、ここはその会場の裏門に当たるエリアで、人影もほとんど見えない。

「び、美人が花の中で怒ってるってのは、絵になりますね〜」

「やべえ……、祥倫、後、任せてもいいか？」

「無理です。というか、私では殺られます」

普段の奏欽は可憐な美姫であるが、一旦、龍王モードが発動されれば、陽輝も無傷では済まない。

況や、西方軍大将付きの副官に過ぎない祥倫では瞬殺されるだろう。

「……陽輝？ ……どこに行くの？」

奏欽の声音が、怖い。

くすぶった炎が既に端々に現れていた。

やはり『火行マイスター』の龍王は伊達ではない。

「で、では私は仕事がありますので——」

「待て、俺を一人にするな」

と、陽輝が言い終わらぬうちに、役立たずの副官は遁走した。

かくして、ここに、夫婦喧嘩が始まる。

「蟠桃会を抜け出して、どこに行くつもり……？」

黒々とした暗黒の炎が、今にも、一斉に噴出しそうである。

「え？ 抜け出してないだろ？ 別にどこにも行かないぜ？」

「じゃあ、ソレはなに」

奏欽は陽輝が肩にしているアーマライトを指した。

本来、こういった銃刀の類は蟠桃会の開催中は、受付で預けることになっている。

「あ、コレか？ いや、俺はコレがないと落ち着かないって言うか。もう体の一部って言うか。こう、適度な重みが肩に乗ってないと、歩くバランスが取れないって言うか」

「……」

奏欽は、両肩の上にふんわりと掛けていた羽衣を鷲掴んで、ビシッと目の前に横一文字にしてみせた。

本来は、雅な装飾品であるはずの羽衣なのだが、奏欽はこれを襷としても使うし、夫婦喧嘩の際には首を絞める道具としても用いる。

奏欽の一捻りで、薄紅色の羽衣がシュルッと動き、陽輝の肩から、そのアサルトライフルを絡め取った。

「……言わなかったかしら？ 初日と最終日だけは夫婦同伴でちゃんと出席しないと、外交上、色々面倒なことがあるって」

「あゝ、聞いた……気はする……かな？」

その話は、くどいくらいに念を押されたし、その度に「ああ、分かってるって」と生返事をしたのも覚えてる。

ゴクリと唾を飲んだ陽輝は、とりあえず抵抗はしないことにした。

身重の妻の体を慮って、というのもあるし、そもそも身重じゃなくとも女性に手を上げるのは言語道断と思っっている陽輝なのである。

しかし、仕事には理解があるはずの奏欽が、今日に限って何故こんなに怒っているのか、陽輝には分からない。

「悪い、ちよつと仕事があつてな。帝都に戻らなきゃならねんだ」

「……」

こういう時の女性というのは、どうしても迫力があるのか。

決して視線を反らさない奏欽に、陽輝は降参のポーズだ。

「ホ、ホントだって」

「仕事だから許されるとか、仕事じゃないから許されないとか、そういう話じゃないのよ……？」

「じゃあ、なんなんだ？」

「……」

スウツと息を吸い込んだ奏欽が、その後、わざとらしく思い出したように言った。

「そうそう、蟠桃会が終わったら、旅行しようって約束、したわよね？」

「エ？ あ、ああ、覚えてる。ちゃんと準備してるぜ？」

「そう……。コレかしら？」

と、奏欽は『オーロラを見ながら氷山の氷でウイスキーを飲もう』四泊五日浪漫の旅』と銘打ったパンフレットと、二枚のチケットを見せた。

「……ッ？」

どこから手に入れたのだろう。

確か、それは職場の机の引き出しの中にしまっておいたはずなのに。

「あら？ でも、おかしいわね……。私が行こうと言ったのは『南の島温泉巡りの旅』だったと思うんだけど……」

「エ？ いや、いや、ほら、お前、今の時期、温泉行っただけでしょうがねえだろ？勝手に変更して悪かったが、お前がどうしても温泉行きたいってんなら、今からでも——」

奏欽の怒りが頂点に達し、パンフレットを左右に引き裂いた。

「わ、待ってって……。こんなところで、それはナシ！ な？」

「問答無用……ッ!!」

警備スタッフから連絡を受けて、九天玄女が駆け付けた時には、既にことは終

わっていた。

「ハア……」

天を仰いで、今度こそ溜息が出た。

荒事に慣れているとはいえ、蟠桃会は本来そういった荒事が決して起こってはいけないイベントだ。

それなのに、昨日と今日、たて続けて二度も出くわすとは、もうどうしてくれる、という感じだ。

「……よお、九玄姐さん」

よれよれボロボロの陽輝なのだが、軽く片手を上げて、いつものように挨拶した。

「犬も食わないヤツか」

「すみません、九玄さん、ちよつと地形が変わってしまいました」

辺りは、不運にもマグニチュード七・八の直下型大地震が起こった後、不幸にして局所的な竜巻が通り過ぎ、さらに偶然、地对空ミサイルを撃ち込まれた跡のような惨状になっている。

「“ちよつと”……？」

九玄の眩きは、仲睦まじく怪我の治療をしている二人には聞こえていないようだ。

「お二方、少しは自重されよ。喧嘩するほど仲がいいとは言うが」

「悪い、この現場は、奏の“ホラちゃん”と元通り係”が……」

陽輝が言う間にも、どこから湧いてきたのか、数人の黒子たちが現れて、黙々と現場を片付け始めている。

龍王配下の精鋭部隊を、こういう使い方しているのは奏欽だけだろう。

なんにせよ、この夫婦は平和である。

九玄はもう一度わざとらしく溜息をついて現場を去った。

昨夜から色々あって、九玄はあまり寝ていない。その疲労と緊張感が、陽輝にも伝わった。

(仙界側にも、なにかあったな……)

あまりのんびりとはしてられない。

天真と碧霞元君に、この前のことをあれこれ追求されるのを避けたかったとい

うのもあるが、今、秦帝を始めとする要人たちは全員この西華に来ていて、帝都は空っぽ同然なのである。

西華Ⅱ帝都間は、普通なら数日かかる道程だが、フル稼働のバイクと反則技を使えば、数時間で着けるだろう。

「で、行かせてくれんだろ？」

「分かってるわよ。……でも、気を付けてね。この歳で未亡人なんて、ご免ですから」

冗談半分に言っているが、奏欽も薄々気付いているらしい。

「小龍、陽輝を頼んだわよ」

「逆だろ、ソレ……」

「きゆるう〜」

小龍は、奏欽の撫でる手に頭をすりつけた。『もっと撫でて』という仕草である。これは、陽輝に対する態度とは百八十度違う。

かといって、陽輝と小龍が本当に仲が悪いのかというと、そうとも言い切れないのだ。

その微妙な関係のコンビを見送りつつ、

（そういえば、沙龍さんがここに居るのに、なんであの子は陽輝についていったのかしら……？）

奏欽はふとそう思ったが、仕事に使うつもりなのだろう、とあまり気にしなかった。

既に、包囲網はできあがっている。

半分騙された形で前夜祭から参加させられた碧霞元君は、最初はぶつぶつ怒っていたが、無事開会式典が終わり、敖閏専用の離れに招待された頃にはだいぶ機嫌も直っていた。

老若に関わらず、女性の扱いは恐らく、天界一の敖閏である。女性の機嫌を取るのは特技の一つと言っている。

変わり者として有名な碧霞元君も、この龍王には、ある種の畏敬を抱いている。それは、五行の質から分かる、碧霞元君なりの評である。

「天真くんに騙されたんだよ。尤も、彼も、あの怖い人に騙されたんだけどね」
何故、滅多に来ない蟠桃会に来る気になったのかと訊ねられて、碧霞元君はそう答えた。

敖閏は、縁側の手すりに半分体を預けて微笑んでいる。

しばらく見ない間に、碧霞元君はまた少し小さくなったのではないか、と思っ
た。

「“怖い人”？ ああ、九雷君のことか。……君が恐れるような人は、ここには
居ないような気もするけどね」

「あの人は、表と裏が一致しないから」

敖閏は、それを『腹の底が読めない奴』という意味に取ったが、逆である。
読めるから『怖い人』となるのだ。

碧霞元君は九雷と個人的に面識があるわけではない。

ただ、そういう感じ方をしているのだ。

碧霞元君は、九雷を『木行』を担う人物として、自分の感じる五行の流れの中
に存在させている。

だから、『青帝青龍雷君』であることは本能的に知っているのだが、知らない振りをしている。会いたくないからだ。

「でも、来てよかったかも。桃林は綺麗」

碧霞元君は、縁側から見える満開の桃の花のことを言った。

その言い方にはちっとも感動の色は見えないが、感動していないわけではなく、ただ大袈裟に抑揚つけて表現するのが嫌いなのである。

「女の子にとっては、それだけかもしれないけど、男にとってはこの花の中で、さらに美しい花たちを見ることが出来るから、眼福だね」

桃林を愛でることが出来るように計算して建てられた離れ屋敷なので、敖閏も、ここは気に入っている。

西華には、こういう離れ屋敷が幾つもある。蟠桃会の客用に造られたものだが、この離れは、敖閏専用にかなり豪華にカスタマイズされていた。

「碧霞ちゃん、それで、協力してくれるの？」

乾いた微風を受けて、敖閏が肩に掛けていた薄布が揺れた。女物のようである。

恐らく、この屋敷のどこかに美しい公主が居るのだろう。

いや、蟠桃会初日なので、居るのは正夫人かもしれない。こういったイベント事では、既婚者は夫婦同伴が暗黙のうちに要求されるのだ。

「ここまで来て、駄々こねるつもりもないんだけど、一つだけ聞かせて。あの人を逮捕したとして、なにが変わるの？ それとも、なにも変わらないの？」

あの人というのは、勿論、東王夫のことである。

あとは、碧霞元君の心一つで、法的に拘束することができる段階になっていた。

「『その人』に殺されそうになった人の言葉とは思えないね」

「自分の理想実現のために、どうしても邪魔な人が居れば、そりゃ殺しだってするでしょ」

と、他人事のように言う。

天空山の下山と同時に謎の集団に襲われたことは、確かに碧霞元君の勘気に触れる事件だったが、そういう感情とは全く関係のない部分で、碧霞元君は聞いているのだ。

更に、彼女が敖閏に問うているのは善悪ではない。『現象』である。

「なにが変わるかと言えば、一人の女の子の不遇を助けることができる余地がある、としか言えないね」

「甲斐馨か……」

「君に嘘についても、バレるからね。正直に言うと、僕の原動力は僕個人の『情』だよ。世間の正義じゃない。彼は許されざることをした。それは、僕個人にとって、という意味でね。それだけさ」

敖閏のその答えを聞いて、碧霞元君は「うん」と軽く頷いた。

それ以外の答えだったら、彼女は黙って席を立つただろう。

「……ところで、西王母はシロなの？」

「グレーじゃないかな。場所の提供をしたという意味では、れっきとした共犯かもしれないけどね」

敖閏は、それを二年前の蟠桃会で、西王母付きの侍女から聞き出すことに成功した。勿論、寢所で、である。

天界の神々が、仙界の領土に大手を振って出入りすることができるのは、年に

一度の蟠桃会開催中のみだった。更に、西王母の教育が徹底しているのか、西華の侍女たちは特に口が堅いということでも有名である。

にも関わらず、敖閏はその年、侍女の一人を口説き落とすことになった。敖閏でなければできなかつただろう。そのために数日滞在を延ばすことになったが、それは龍王の気まぐれとして黙認された。

しかし、その侍女は、その次の年には姿を見なかった。

敖閏との艶事が西王母の知るところとなり、暇を出された——、ということになつてはいたが、恐らく彼女はもうこの世には居まい。

「喧嘩別れしたのはずの元旦那に、そこまで協力するって、どういう心境？」

「男女の心の壁は、当人たちにしか分からないよ」

「ああ、私の一番苦手な分野か……」

「君も、もっと恋愛すればいいのに」

敖閏は手にした扇を広げて、微笑む。

なんなら自分が相手になるよ、とも言いかけたが、今日はさすがに正室が来ているので慎んだ。

「このサイズだと、男心も分からなくなるし、不感症にもなるんだよ」
碧霞元君が無表情でそう言うので、敖閏は今度は声に出して笑った。

蟠桃会が行われている西華から東行し、金鑾斗闕を過ぎた辺りに天界と仙界の境界線がある。

その一帯は、天仙界の結界が競合する、いわば、デッド・ゾーンだった。

なにも無い砂漠地帯だが、今はこの一帯を管理している白帝君が不在のせいで砂嵐が吹き荒れている。

それを絶好の隠れ蓑として、ルシファーはここを一時的な拠点としていた。キャンピングカーの一室で、ルシファーはいつになく真剣な表情のまま押し黙っている。

「猊下——」

ネビロスが声を掛けても、鬱陶しそうにこちらを見るだけで返事をしない。

幾つかの意識を遠くに飛ばしている最中なのだろうと分かったので、ネビロスはそのまま待った。

しばらくしてから、ルシファーが座っていたソファの手摺に足を投げ出す。

「なんだ？　くだらねえ用事だったらぶっ殺すぞ」

普段、本体を残して意識を飛ばすくらい、ルシファーにとってはわけもないが、この結界内での行動には負担が掛かり過ぎる。

しかも、各所での攻略があまり上手くないようで、不機嫌なこと、この上ない。

「フルー將軍から連絡がありました。保持者が西華に現れたそうです」

「なんだと……？」

「但し、影武者の可能性あり、とのことですよ」

やはりそう来たか、とルシファーは思った。

「いかがいたしましたでしょうか」

「……」

ルシファーは、いつも「自分ならこうする」という観点でしか物事を考えていない。

もし、それで敵に出し抜かれることがあれば、圧倒的な力で押し潰すだけだ。

それが今までのルシファアのやり方である。

九雷は、そんなルシファアにとっては一番嫌な相手だと言える。

彼の思考を理解しようとは思わないし、したくもないのだが、考えざるを得ないのだ。ここでは自分の『圧倒的な力』が通じないからである。

こういう時のために智将と呼べる部下も揃えているのだが、今回は隠密行動なので連れて来ていない。

「迷ってる暇はねえな……」

ルシファアは決断した。

「『器』の優先順位は最後でいい。帝都がカラになってる今が絶好の機会だが、どうせ、ヤツが陰湿な罫を巡らせてるはずだ」

「御意」

「『保持者』の方は、真贋はひとまず置いておくとしてだな……。この際、どつちが本物だろうと構わねえ。冥府に居る方には楔を打ってる。だから、ヤツが手元に置いてる方、パーティーに参加してる方に絞る」

「御意」

「……ギョイギョイうるせーんだよ。それ以外言えねえのか、このAI搭載型食パンスライサーが！」

この機嫌の悪さは、時間がないということと、なのに計画が順調に進まないという所にある。が、もつと言え、それは九雷に対する憤りでもあった。

ルシファアの東方天界における行動全てに待ったをかけている人物は、勿論、九雷であり、結局、ルシファアは今はこの男と一対一で闘っているようなものなのだが、それが、上手く行かない。

攻める側と守る側という違いはある。アウエーとホームという違いもある。

しかし、総合的に見て、やはり、九雷の方が将としては勝っているのだろうか——、と、ルシファアはそこにこだわってしまう。

それをネビロスは苦い思いで見ている。全てを欲しいがままにしている奔放な主君には、特定の敵にこだわって欲しくないのである。

「あー、ヤダヤダ、ヤツと我慢比べしなきゃなんねえなんて」

「結構楽しんでるくせに……」

「なにか言ったか、ネビロス」

「いえ、独り言です」

「おい、ネビロス。『お祭』の招待状の一つくらい、用意してあるんだろうな？」

「勿論です」

「俺は花見をしに行く。お前は、サリエルを連れて帝都の方に行け」

「御——、分かりました」

そろそろ日も暮れようかという頃、桃林の中に、沙龍と赤帝君の姿があつた。

紫凜の扮する沙龍である。

まだ酒宴は始まったばかりだが、初日の挨拶回りを終えて、自室へ戻ろうとしているようだ。

「大したものですよ。天真大夫ですら騙してしまふんですから」

「陛下も騙されたみたいぞ。もう、恐いものなどないな」

紫凜は半分自棄で言った。

上官から敬語を使われるという奇妙な体験もさることながら、こんな大舞台で一世一代の芝居を演じなければならぬとは、緊張を通り越して自棄にもなる。

「……大丈夫ですか？」

「なにが？」

「お疲れのようなので」

「……」

弱音を吐くつもりなどないのに、この上官はこういう馬鹿なことを言い出す。

（ここで、大丈夫じゃないと言ったらどうするつもりなのかしら……。全く、人の心の機微というのが分かってないんだから）

怒りに似た思いでそう思った。

（心配せずとも、意地でもやってみせますわ）

疑惑の目を向ける九雷の手前、この仕事はなんとしてもやり遂げてみせるという思いが紫凜にはある。

しかし、冷静に考えてみれば、そういう意欲を引き出すのが九雷の本当の狙いなのだとしたら、大した男だとも思う。

「九雷元帥は、よくして下さいってるのですか？」

「それは、どういう意味で？」

「言葉通りの意味です」

「……星様」

思わず、紫凜はそう呼びかけてしまった。しかし、周りに人影がないのは確認した。

「私……、あの方は苦手ですわ。このままだと、嫌いになりそうですわ」

「……」

「でも、嫌いになりたくはないのですわ」

「紫凜……」

赤帝君が悲しそうな目をするので、紫凜は苦笑して取り繕った。

「でも、御安心下さい。仕事上の上官としては最高の方ですわ。セクハラされたりもしてませんわ」

「……」

その時、赤帝君が『紅蓮』の柄に手をかけて、立ち止まった。

「緑麗様、あの男——」

最重要人物に指定されている男が、桃林の中に一人で立っている。

しかも、明らかにこちらを見て、行く手を立ちふさがっているのだ。

この展開は、赤帝君も紫凜も、予想していなかった。

いや、してはいたのだが、いきなり最終段階である。

「おやあゝ？ 隣に居る男がいつもと違うじゃねえか。浮気か？」

ルシファアは、民族衣装のようなターバンを巻いていて、極力、目立つ金髪を隠していた。

「放つとけ。喧嘩中なんだ」

紫凜は、素っ気なく答えた。

しかし、圧倒される光彩に、本当は立っているのがやっつである。

「ふーん……？」

「貴様、何者だ。官と姓を名乗られよ」

赤帝君は、鋭い口調で問う。

しかし、ルシファアは腕組をしたまま、目尻を下げている。

「ンなこと言ったって、出鱈目名乗っても斬られるし、正直に名乗っても斬られんだろ？ ま、なにしに来たのかってのなら言えるけどな」

「では、なにしに来た」

「勿論、その姫さんをお誘いにな。どうだい？ そんな男放っておいて、俺とドライブでも」

「金髪碧眼は嫌いだと言ったはずだが？」

紫凜も身構えた。銃刀の類はなにも持っていない。体術は得意な方だが、それが通用する相手とは思えない。

「ん、そうだな。じゃあ、後ろの男は？ 一応、黒髪なんだが」

「……ッ!？」

紫凜と赤帝君が同時に振り向いた時、そこには、別の若い男が立っていた。

ルシファーに向けている『紅蓮』は、こちらに向けるべきだろうか。挟撃されたら、紫凜を護り切れるかどうか分からない。

「フルー、男の方を頼む」

ルシファーがその黒髪の若い男に声を掛けた。

「イエツサ」

「油断するなよ。優男に見えるが、朱雀様だ。そいつの炎をまともに食らったら、多分、俺でも焼け死ぬ」

「ほう……、私をご存知か。ルシファー」

「これでも、魔界の情報網は確かなんだぜ。ま、不公平なんで、一応、そいつのプロフィールも教えておいてやる。フルー・ルテイ。将軍だ。全然仕事をしないサボリ魔だが」

「えー、ちゃんとしてますよ」

「ちなみに、この童顔で、しよっちゅう高校生に間違えられるのが悩みの種だ」
「猥下ってばー、あんまり時間ないんすから」

「んじや、始めるか」

ルシファーがそう言った時、一瞬で、桃林の一角に炎が上がった。

先に仕掛けた赤帝君は、その炎の幕で若き将軍を足止めするつもりだったのだが、無駄だった。

突如として凶悪な突風が吹き、その炎を押し返してきたからである。

「なに……ッ!?」

ここ数百年、いや、数千年、自分の技がこうも簡単に阻止されてしまったことなどない。

例えば、最高神クラスなら阻止もできるだろうが、それでも、赤帝君の『火行マイスター』としての自負は強い。

「あち、あち、あちッ！」

フルー・ルティは、飛び火を食らって逃げ惑っていた。

ということは、炎を押し戻した風は、彼のものではない。

（風を操り、御すことの出来る存在——？ 誰だ、それは……!?）

五行の世界において、明確に『風』という要素を司る者は居ない。

各々のマイスターたちが、技の余波として風を起こすことはあっても、空気の流れ自体を制御することはできないのだ。

赤帝君が『風を操る敵』を探す前に、意志を持ったかのように迫る竜巻が、炎を巻き込んで、赤帝君を襲った。

「星様——ッ!!」

今までノーミスを誇った紫凜が、なにかしら失敗をしたことがあるとしたら、この時叫んだ一言だったかもしれない。

「——ッ!？」

ルシファアは瞬時に状況を判断して、同じ竜巻に襲われそうになった紫凜を抱き上げ、マントを翻す。

それが防御壁の代わりになった。

「このロリコン野郎が、すっこんでろ！」

ルシファアが怒鳴った先は、辺り一帯では一番高い、桃木の上である。

そこには、鼻歌でも歌っているかのような、楽しそうな顔の男が居た。

軽くウェーブのかかった亜麻色の髪をたなびかせ、シャープなラインのスーツを見事に着こなしている。

「ルシファア、おヒサッ」

ルシファアよりも少し若く見えたが、ほぼ同年で、座天使軍の長を務めるラファエルという男だ。

更に、彼は『四大天使』の一角を担っている。

轟々と燃えさかる炎の海の上で高みの見物をしているラファエルは、悪魔勢はルシファーとフルー將軍しか居ないのをしつかり確認していた。

「あ、その子？ 例の『テストイー』」

ルシファーの腕の中の紫凜は、気絶しているのか、眠らされているのか、その体はぐったりとして動かない。血の気の失せた白い顔が、ラファエルには人間で言うところの十五歳くらいにしか見えなかった。

「なかなか可愛いのに……、勿体ない。こういう無慈悲な仕事って、やだよねえ」

「おめーは、幼稚園児オンリーだろうが。この姫さんはな、こう見えても怖エカレシがなんだよ！ 失せな！」

「いやあ、そうもいかないのがお役所仕事の辛いところでして」
ラファエルの操る突風が、今度はルシファーを襲う。

しかし、その時、周囲の炎が踊るように動いた。

「あれ？ 生きてるのかな？」

ラファエルが眩いた。

「自分の炎で焼け死ぬはずはねえだろが」

ルシファアは、案の定、燃え盛る桃林の中に赤帝君の姿を認めて、舌打ちした。

黄色と赤の火の海の中で、黒々とした炎をその体にまわりつかせた赤帝君は悪鬼と見紛うほどである。

「お前らの好きにはさせん……！」

風に押し戻されていた炎が、今度はルシファアとラファエルをそれぞれ襲った。

ラファエルはそれを軽く手で払いのけるようにしたが、ルシファアは片手が使えない上に、地上に居るので分が悪い。

（チツ、こいつは地獄の業火より性質悪いぜ！）

防御の役割をしてくれるこのマントも限界だ。

「睨下ろ！」

フルー・ルテイが、炎の下から這い出てくるようにして、ルシファアの元へ来た。

「アフロになっても童顔だな、てめーは！ 持ってる！」

苛つきながら、紫凜の体をフルー・ルテイに放った。

ラファエルと赤帝君の二人を相手にしなければならぬのは計算外だ。

このまま早いところトンズラしたいところである。

しかし、

「チツ、やっぱり、来やがったぜ……」

夕闇を焦がす炎の中に、黒く飛翔するものがある。

それが『厄介な敵』であると直感したルシファアは、できれば使いたくないと思っていた水晶玉を取り出した。

「フルー！ 撤退する！ 準備しろ！」

そして、水晶玉を叩き割り、地面に六芒星の方陣が浮かび上がるのを待った。

せいぜい半径数メートルだが、その陣の中では本来の力が使える。

黒焰虎から飛び降りた九雷は、後方で激しいぶつかり合いをする赤帝君とラ

ファエルの姿を確認した。ならば、自分が相手をするのは、予定通り、魔界の盟主の方だ。

陣の発動と、九雷の長剣が躍ったのが同時だった。

「ルシファー！」

この一刀をルシファーが素手で受けられたのは、やはり、六芒陣のおかげだ。

「おっと……、お怒りはご尤もだが、形勢逆転だぜ、元帥さん！ ……フルー！」

「すみません！ もう少し！」

六芒陣の端っこでハンディ・コンピューターを操作するフルー・ルティは、焦りながらも最後のキーを押した。

「諦めろ、ルシファー！ どのみちお前に黄龍は使えん！」

「……そりゃ、どうかな？」

ルシファーがにつこり笑って、足元の六芒星を見る。

「フルー！」

「もうちよい……、ハイ、行けます！」

すると、六芒陣がドーム状に強烈に光って、九雷はその光量と波動をまともに受け、陣の外に弾き飛ばされてしまった。

「おめーがモタモタしってから、遅くなっちまっただろうが！」

「お怒りは後でいかようにも！ 引きます！」

「つーわけでよ、元帥さん、この姫さんは借りてくわ。暫く夜が寂しいだろうが我慢してくれや」

「……それは、どうかな」

先ほどのルシファーと同じ台詞で、九雷が口の端を上げる。

「なに……？ まさか……」

ルシファーは、フルー・ルテイが確保している『保持者』を見た。

(こつちが影武者か!?)

しかし、今のは九雷の負け惜しみかもしれない。

それを、確認する術はない。

「チツ……」

ルシファーの忌々しい表情を残して、六芒陣のドームの中身がそっくり消えた。空間ごと転位したのだ。

帝都は、昏い闇の中にあつた。

『闇に相応しい場所』というのは暗号なのだが、その意味をネビロスはやっと理解した。つまり、ここは墓地なのである。

眠っているのが英霊なのか罪人なのかは分からないが、それは彼等にとってはどうでもいいことだった。

サリエルが無造作に設置されているそのガラス製の棺に目を奪われている間、ネビロスは黙々と仕事を始めた。

これを棺ごと持ち帰らなければならない。

ルシファーが使ったのと同じ水晶玉を持っているが、これは一度限りの切り札である。出来れば使いたくないが、そうも言っていないだろう。

「おいおい、入場料払ったのか？ いや、その前に観光ビザ持ってんのかよ」
闇の中にそんな声がした。

「……ッ!？」

暗闇の中に影が二つ動いた。

ネビロスがその人影を目視できたのは、一瞬だった。動こうとした時には、銃声がした。

威嚇なのか、それともこの暗闇で外れただけなのか、銃弾は脇腹のあたりを掠っただけだったが、ネビロスのその一瞬の虚をついて若い男が一人、ネビロスの目の前にアサルトライフルを構えている。

「罨か……！」

一見、傭兵のような無国籍風の野戦服を着ているが、れっきとした正規兵である。

しかも、胸のあたりにはネビロスと同じ少将を意味する徽章がつけられている。

西方軍大将の副官を務めている、由基という小柄な男である。

「動くな」

由基は短く言ったが、これは、最初に聞こえた声とは違う。

棺からやや離れて立っていたサリエルの背中には、固い感触がつきつけられていた。

「あ、それとも、ここで永眠したいってクチか？ だったら、永代供養料よこしな」

さつきからふざけた挑発をしているのは、このサリエルにハンドガンをつきつけている陽輝である。

咄嗟に判断して、厄介なネビロスの方を部下に任せ、自分は楽をしようという魂胆だった。

「誰だ……？」

呻くように言ったサリエルに答えたのは、ネビロスだった。

「西方軍大将、陽明恵輝道貞神君——」

読み上げるような、無機質な口調。

ネビロスの頭の中には、東方天界の要職にある人物の顔と名前くらいはある。

「その長い名前、嫌いなんだがな」。特に『神君』の前が、チェリー君みたいで」

「銃器の扱いにかけては一流の叩き上げ軍人。但し、行動理念に問題あり」

その説明に、陽輝はもとより、由基も可笑しそうに鼻を鳴らした。

「よく調べてますね。しかし、もう一つくらい足りないと思います。『玄人女が好き』ってのも加えておいて下さい」

「いや、確かに好きだけどよ……。嫁さんに聞かれたらどーすんだよ」

二人の軍人は、ネビロスとサリエルをそれぞれ拘束したまま、完全に遊んでい
るような口調である。

「……何故だ？」

ネビロスの短い言葉は、何故露見したのかという意味だ。

「俺もな、毎度毎度、不思議なんだが、こうもピタリと当たると、なんでって理
解しようとも思わねえな。あんたらの行動はウチの性悪司令官にはバレバレらし
い」

「……」

「さて、どうする？ 下っ端」

陽輝はネビロスの方に言ったつもりだった。

絵的には、陽輝対サリエル、由基対ネビロスだが、実際の間答は、陽輝とネビ
ロスの間でなされている。

「陽輝大将、この『器』を爆破されたくなければ、引いて頂けないでしょうか」
ネビロスがガラス製の棺に視線を向けて言った。

「——!？」

爆発物を設置する時間は与えなかったはずだが、と陽輝は思った。しかし、ネビロスのほったりとも思えない。

「いかが致しますか？」

この場の支配権が、一時的にネビロスに移る。

「お前等こそいいのか？ 『それ』が欲しくて探してたんだろうが。手ぶらで帰ったら、ご主人から怒られるんじゃないか？」

「ご返答は？」

陽輝の時間稼ぎのような言葉は無視して、ネビロスが事務的に言った。
だが、こんな脅迫に屈するような陽輝でもない。

「俺ア、構わねえよ？」

「……なんですって？」

「『それ』はな、今となつちやただの藁人形だぜ。美人だ美人だ言われてきたが

な、俺はちつともそう思わねえし」

「……」

ネビロスは、成程、あのデータに嘘はない、と思った。

目の前の由基は微動だにしないし、ちよつとでも動く素振りを見せれば、威力のありそうなあのライフルに蜂の巣にされるだろう。

「……」

「……」

しばし、沈黙が流れた。

「なあ、一つ、大事なこと、忘れてねえか？」

陽輝がこの場を再び支配する。

「……?」

「お前等は『元天使』だろうが、こっちは『神』なんだよ。最初っから、格が違うってことだ。……由基、撃て！」

ネビロスの挙動に移りそうな呼吸を読んで陽輝は叫んだのだが、背中を向けていたサリエルが、急に真横から銃で撃ち抜かれたかのように倒れた。

「……!？」

陽輝は発砲していない。

なにか、全く別のところからの邪魔が入ったのだ。

天井のない東屋に降り立ったのは、羽を持った数名だった。

(天使軍……!?)

陽輝も由基も、一瞬、闇夜にくつきりと白く光る彼等の装束に目を奪われる。

ネビロスはその隙に水晶玉を叩き割って、遁走した。残されたサリエルの死体は、陽輝とその天使軍の間に横たわっている。

「見た顔だな……」

眩いた陽輝は今度は、その天使軍のリーダーらしき女性に銃を向けたが、威力からすれば彼等が各々構えているバズーカ砲の方が上だろう。

女性はなにも持っていないが、背後に控えた六名を指一本で動かせるはずだ。

「『器』は我々が頂戴する。抵抗すれば、射殺する。大人しく従うのであれば、奪還後、速やかに退散しよう」

部下を従えた天使の女性は、教師のような口調で言い放った。

金髪はシャープに切り揃えられているが、凹凸のはっきりした体つきといい、棺の中の緑麗といい勝負である。

「どいつもこいつも、なんで『これ』を欲しがるかね。ただの人形だつてのに」
陽輝は、部下に一瞬だけ視線を投げて、自分の銃を降ろした。

由基はその視線を受けて、東屋の柱に縛り付けていた少年にライフルを向ける。

「この少年がどうなってもいいのか？」

予め、ガブリエルが現れることを想定して、四神府の独房からマルティエルを連れてきたのだ。

マルティエルは、声を出せないように口を塞がれているが、頭になっている瞳は、一瞬だけ哀願の色を見せた。

「……」

金髪のカブリエルは、そちらを一瞥しただけで、冷たい表情のままである。

「好きにしろ。うちのエージェントではない」

そう言い切ったカブリエルは、実際、マルティエルと会ったことはない。

社長と平社員の間には個人的な面識はないのだ。

「成程……。それじゃしようがねえ」

そう言って陽輝は持っていたS & Wを投げ捨てた。由基は不満の色を少し見せたが、しぶしぶ上官に倣う。

ガブリエルはそれを見て一度頷くと、背後に合図をした。

そうして、天使軍総勢七名は、あつという間に緑麗の体を奪っていったのだ。

それを見守り、ガブリエルを見送った陽輝は、してやられたという表情ではない。
い。

「『奪還』ねえ……」

陽輝が誰にもなく呟いた。

東王夫の逮捕劇は、する方もされる方も鮮やかだった。

蟠桃会の初日の夜の宴会が始まろうとする時間、西海龍王敖閏は、龍王配下の私設軍を引き連れて会場に現れた。

これには、招待客たちも度肝を抜かれた。こんな宴席の場に、一体何事だ、と抗議する者も居た。

龍王はその官位の特殊性故に特例として自軍を持つことを許されているが、あくまでもこの私設軍の存在は『外敵掃討用』として認識されている。だから、間違っても内部粛清として用いられるはずはない、と誰しもが思っていたのだ。

しかし、敖閏の厳しい表情と、隣に居た碧霞元君の手振りだけで、彼等はその私設軍の通行を容認してしまった。

「これは、どういった風の吹き回しかな？」

老齡の東王夫は、敖閏に冷ややかな視線を投げた。

「元上官殿に長年ご挨拶もせず失礼をしておりますから」

「勝手に軍を辞めた元部下に、そのような挨拶を受ける謂われはないが？」

「いえ、今日は受けて頂きます」

「まさか、君がこんな暴挙に出るとはな。……つまり、証拠が揃ったということか」

公衆の面前でのことである。

さすがに敖閏も「そうです。貴方がこの東方天界を西方魔界に売り渡した証拠です」とは言わなかったが、周囲の招待客たちはどよめいていた。

「敖閏殿、酔っ払っていらっしやるのですか？ 悪ふざけにしては、少々度が過ぎているようですが……」

引きつった顔をしたままの西王母が、なんとかこの場を穏便に治めようとしたが、敖閏はにこやかに答えた。

「僕が酔うものがあるとしたら、美酒ではなく、美姫ですがね」

「……」

西王母に見せた微笑を消して、敖閏は東王夫に言い渡した。

「僕が一番聞きたいのは、その動機と釈明ですが、多分、貴方は答えてはくれないでしょう。ですので、せめて、その身柄だけでも拘束させて頂きます」

「君にそんな権限があるとは思えないがね」

そこに、口を挟んだのはさつきから面白くない顔をしている碧霞元君である。

「権限はなくても、私たちはそれぞれに貴方を拘束する理由があつて、貴方もそれを自覚しているはずだよ、東王夫」

「輪廻のシステムを作ったお父上に、どこまでも反撥している貴女が、私の理想を理解できないとは……、なんとも残念です」

東王夫は微笑んで、手にしていた最後の杯を飲み干した。

それが、致死量の毒物を含んだ仙酒であつたのは、敖閨も薄々気付いていた。

沙龍の感覚は日増しに麻痺していく。

冥府の中では五感は言うに及ばず、時の感覚すらなくなっていくのだ。

いや、時という概念はそもそも冥府にはない。

「“エーテル”……？」

栄吉の後ろに立って、モニターを見ている沙龍が反芻した。

「四大元素（空気・火・土・水）の延長にある、天体を構成するという第五元素のことです。ギリシア語では『上層の空気』を意味するとか」

「ふーん……。つまり、西方にも五つの主要元素があるってことか」

東方世界で言うところの『五行』は、木・火・土・金・水、である。

両者は一致するものではない。

つまり、西方にある『空気』は東方にはないし、東方にある『木と金』は西方にはない。

「しかし、このエーテルという第五元素は、机上の空論で、実際には存在しないという話です。この第五元素を担うべき天使も居ませんし」

「フム……」

「つまり、彼等の世界では『四大元素』が全てなんですよ。四大元素で成り立ち、四大元素でもって運営されている。そこに、五番目の元素を引き入れようとしてるんじゃないですかね」

「もしかして、それが黄龍だったの？ 黄龍は『土行』だよ。それは、四元素の中にもあるじゃん」

「確かにそうなんですけど……、純粹な土行じゃないかもしれないし」

「純粹とか不純とかがあるのか」

「よく分からないんですがね。どうも、彼等の軌跡を追っていると、そんな感じにするんです」

栄吉のモニターには、その分析結果が色々と開かれている。

沙龍には、その画面を見ても、栄吉の説明を受けても、なんのことやらさっぱり分からない。

「それよりも、『外』はどうなってんの？ もう十年くらい過ぎちやったら、ぶち殺すよ」

火雲宮時計は、そこまで無茶な数字を示してはいない。

今、蟠桃会の中日くらいであることは分かっている。

ただ、沙龍は、ずっと、頭がぼんやりしているような感じがしている。

冥府時間で何日経ったのかも覚えていない。

「蟠桃会中だから、帝都は閑散としてるんじゃないですかね」
のらりくらりとかわす栄吉は、なるべく、沙龍には大人しくしていて欲しいのが本音である。

半ば強引にハッキングさせられたりしているが、それくらいなら足跡を残さない自信はあるし、この前みたいに事務所を半壊されない限りは、沙龍の機嫌を損ねるつもりはない。

「外とオンタイムの通信はできるのか？」

「一応、元帥閣下からそれは止められているんですが」

「全ての命令系統の外にあるはずの泰山府が、何故、天界軍に諂う必要がある」

「なんか、今日は気合入ってませんか？」

そう言いながら、仕方なく、言われるがままに四神府に繋げてみた。

「これがバレれば、降格ですよ。いや、下手すると首が飛ぶかも……」

そんな独り言も出たが、沙龍は鼻を鳴らして言ってやった。

「その時はその時だ。最悪、水雲宮で雇ってやる」

「私の出来る仕事、ありますかね……」

その時、モニターが突如としてブルー・バックとなり、記号のような文字群が一面にせり上がっていった。

「……あ、まずい」

「なんだ。バレたのか？」

「いえ……」

栄吉は、モニターと同じ顔色になっている。

ミスなのか、それとも、事故なのか、繋がってはいけないような場所に繋がってしまったようだ。

「これ……、特務の丸秘ファイルじゃないですかね。なんで四神府から辿れたのか分かりませんが……」

「特務の？」

沙龍は事務所に之信が居ないのは知っていたが、確認するように視線をぐるっと一周させた。

そして、モニターに視線を戻すと、画面は止まっている。

最後の行には、

“エージェントNo. XXXX 四神府所属、朱雀星君付秘書官、最重要指定人物により拉致。オペレーション・オアシス、第一段階終了”

そんな一文があった。

「これ、なんかヤバいんじゃないっすかねー。あんまり関わりにならない方がよさそうですよー？」

「……」

「……って、聞いてます？ ホラ、うちの臨時職員で居る限り、少なくとも身の安全は保障されますし……」

「……」

沙龍は眉を寄せて黙ったままだ。

すると、栄吉が冗談のように冗談にならないことを言う。

「元帥閣下を敵に回すなら、銀河帝国一個大隊くらい用意した方がいいですよ？」

「なんで私が最愛の恋人と敵対しなきゃならないんだ」

「……だって、そんな顔してますよ」

「……」

敵——？

誰が——？

そんな自問を呆然と繰り返す。

（私の敵は、西方神魔じゃなかったのか……？）

しかし、沙龍は考える前に行動に出ることにした。いつも、それでやってきたのだ。

死神用マントを脱ぐ。

「世話になったな。私のIDは公務員に返しておいてくれ」

栄吉が、諦めたように溜息をついた。

「分かりました。今日付けで処理しておきますから、一応、本日零時までには臨時職員で居て下さいよ」

「ああ、アルバイト料は口座振込みで頼む」

「お気をつけて……」

栄吉の心配そうな声が、小さな背中に届いたかどうかは分からない。

(後編に続く)